一般国道210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第3集

塚堂遺跡 III

E 地 区

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

1 9 8 4

福 岡 県 教 育 委 員 会

塚堂遺跡 III

E 地 区

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

塚堂E地区空中写真

序

今度,「浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第3集を刊行することになりました。

本報告書は，福岡県教育委員会が建設省から委託を受け，一般国道 210号線浮羽地区のバイパス建設に伴い，昭和53年度から実施している埋蔵文化財の調査記録であります。

今回の報告は，昭和57年度に調査した成果をまとめたものであります。本書が文化財の普及活用の一助になれば幸甚に存じます。

発刊にあたり，調査に御協力いただいた地元各位，吉井町教育委員会，建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所に心から御礼申し上げます。

昭和59年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　友　野　　隆

例　言

1. 本書は，昭和57年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道 210号線浮羽バイパス建設予定地に係る埋蔵文化財の第4冊目の調査記録である。
2. 本書に収録した遺跡は，福岡県吉井町大字宮田字曲金所在の塚堂遺跡である。
3. 遺跡での実測図，写真撮影は副島邦弘，馬田弘稔，佐々木隆彦が，遺構等の製図は豊福弥生，鶴田佳子が，遺物の実測，製図は副島，佐々木が　遺物写真は佐々木が各々分担した。
4. 本書の執筆は，Ⅰ・Ⅱ－２－(6)･(7)を副島，その他は佐々木が分担した。
5. 遺物整理は，岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館で実施した。
6. 報文中の遺物番号は通し番号とし，実測番号と写真番号は同一である。
7. 遺構の面積は，プラニメーターから得た数値である。
8. 本書の編集は，佐々木が担当した。

本 文 目 次

I　調査の経過……1

II　発掘調査の記録……3

1.　調査の概要……3

2.　遺構と遺物……4

(1)　竪穴住居跡……4

(2)　掘立柱建物，柵列状遺構……22

(3)　周溝状遺構……31

(4)　土　壙……34

(5)　溝状遺構……36

(6)　大　溝……37

(7)　その他の遺物……40

III　総括にかえて……42

1. 古式土師器についての若干の所見……42

図版目次

図版1　塚堂E地区空中写真（東から）
図版2　(1)　E地区東側全景（東から）
　　(2)　E地区東側全景（南東から）
図版3　(1)　E地区西側全景（東から）
　　(2)　E地区西側全景（北から）
図版4　(1)　1号竪穴住居跡（南から）
　　(2)　1号竪穴住居跡竈出土状態
図版5　(1)　2号竪穴住居跡（西から）
　　(2)　2号竪穴住居跡竈出土状態
図版6　(1)　3号竪穴住居跡と2号周溝状遺構（西から）
　　(2)　4号・5号・6号竪穴住居跡（南から）
図版7　(1)　6号竪穴住居跡出土遺物除去前の状態
　　(2)　6号竪穴住居跡遺物出土状態
図版8　(1)　6号・7号竪穴住居跡（南から）
　　(2)　6号竪穴住居跡特殊遺構
図版9　(1)　8号竪穴住居跡（北から）
　　(2)　9号竪穴住居跡（東から）
図版10　(1)　2号掘立柱建物（北から）
　　(2)　3号掘立柱建物（東から）
図版11　(1)　4号掘立柱建物（北から）
　　(2)　5号掘立柱建物（西から）
図版12　(1)　6号掘立柱建物（東から）
　　(2)　1号周溝状遺構，1号土壙（南から）
図版13　(1)　2号周溝状遺構（西から）
　　(2)　3号周溝状遺構（南から）
図版14　(1)　4号周溝状遺構（北から）
　　(2)　4号土壙河原礫除去前の状態
図版15　(1)　4号土壙（東から）
　　(2)　1号・2号・3号溝状遺構（北西から）
図版16　(1)　大溝1・2（南から）

(2) 大溝1・2土層断面
図版17　6号竪穴住居跡出土遺物
図版18　6号竪穴住居跡出土遺物
図版19　3号・6号竪穴住居跡，溝3出土遺物
図版20　大溝出土遺物

挿図目次

頁
第1図　塚堂遺跡位置図（1/25,000）…… 2
第2図　塚堂遺跡（E地区）遺構配置図（1/200）…… 折込み
第3図　E地区試掘溝…… 3
第4図　1号竪穴住居跡・竈実測図（1/60・1/30）…… 5
第5図　2号竪穴住居跡・竈実測図（1/60・1/30）…… 6
第6図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 7
第7図　2号竪穴住居跡出土装身具実測図（1/2）…… 7
第8図　3号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 8
第9図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 8
第10図　3号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）…… 8
第11図　4号・6号・7号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 折込み
第12図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 9
第13図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 10
第14図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 12
第15図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 13
第16図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 15
第17図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 16
第18図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 17
第19図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 18
第20図　6号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）…… 19
第21図　6号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）…… 19
第22図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 20
第23図　8号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 20

第24図　8号竪穴住居跡上層（流れ込み）出土土器実測図（1/3）…… 21
第25図　9号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 22
第26図　1号掘立柱建物実測図（1/60）…… 22
第27図　2号掘立柱建物実測図（1/60）…… 23
第28図　3号掘立柱建物実測図（1/60）…… 24
第29図　4号掘立柱建物実測図（1/60）…… 25
第30図　5号掘立柱建物実測図（1/60）…… 26
第31図　6号掘立柱建物実測図（1/60）…… 27
第32図　7号掘立柱建物実測図（1/60）…… 28
第33図　8号掘立柱建物実測図（1/60）…… 28
第34図　9号掘立柱建物実測図（1/60）…… 29
第35図　10号掘立柱建物実測図（1/60）…… 30
第36図　柵列状遺構実測図（1/60）…… 30
第37図　1号周溝状遺構実測図（1/60）…… 折込み
第38図　2号周溝状遺構実測図（1/60）…… 31
第39図　2号周溝状遺構出土土器実測図（1/3）…… 32
第40図　3号周溝状遺構実測図（1/60）…… 折込み
第41図　3号周溝状遺構出土土器実測図（1/3）…… 33
第42図　4号周溝状遺構実測図（1/60）…… 33
第43図　5号周溝状遺構出土土器実測図（1/3）…… 34
第44図　1号土壙実測図（1/60）…… 34
第45図　1号土壙出土土器実測図（1/3）…… 35
第46図　4号土壙実測図（1/3）…… 35
第47図　溝2出土土器実測図（1/3）…… 36
第48図　溝3出土土器実測図（1/3）…… 37
第49図　大溝南・北土層断面図（1/60）…… 折込み
第50図　大溝実測図（1/150）…… 38
第51図　大溝出土遺物実測図（1/3）…… 39
第52図　大溝出土遺物実測図（1/3）…… 40
第53図　その他の遺物実測図（縄文土器）（1/3）…… 40
第54図　その他遺物実測図（石鏃）（1/2）…… 41
第55図　No.7柱穴出土土器実測図（1/3）…… 41
第56図　No.17柱穴出土遺物実測図（石鍋）（1/3）…… 41
第57図　その他の遺物実測図（1/3）…… 41

表 目 次

頁
第1表　1号掘立柱建物計測表……22
第2表　2号掘立柱建物計測表……23
第3表　3号掘立柱建物計測表……24
第4表　4号掘立柱建物計測表……25
第5表　5号掘立柱建物計測表……26
第6表　6号掘立柱建物計測表……27
第7表　7号掘立柱建物計測表……28
第8表　8号掘立柱建物計測表……29
第9表　9号掘立柱建物計測表……29
第10表　10号掘立柱建物計測表……30
第11表　柵列状遺構計測表……31

付　　図

付　図　塚堂遺跡付近の地形図（1/1,000）

Ⅰ　調査の経過

昭和57年度の発掘調査は，４月当初より昭和56年度に調査を行なったＡ地区南側字四太郎575－１番地の北側の隣接地である576－１番地を中心に全面発掘を実施した。土捨場は昭和56年度調査分の575－１番地をあてた。

６月中旬には，Ａ地区の調査と並行して，付図のようにＡ地区から東に 240ｍの小川を越した大字宮田字曲金にＥ地区を設定し，456番地と461－1，461－2番地について調査を行なうことになった。

発掘面積は1.300㎡である。調査は456番地の水田を中心に行ない，発掘方法は土捨場がないため路線内で処理することとし，半分調査を行ないその半分を土捨場として利用した。調査を終了後反転して土捨場の部分の調査を行なうことから，作業は倍の手間がかかることとなった。

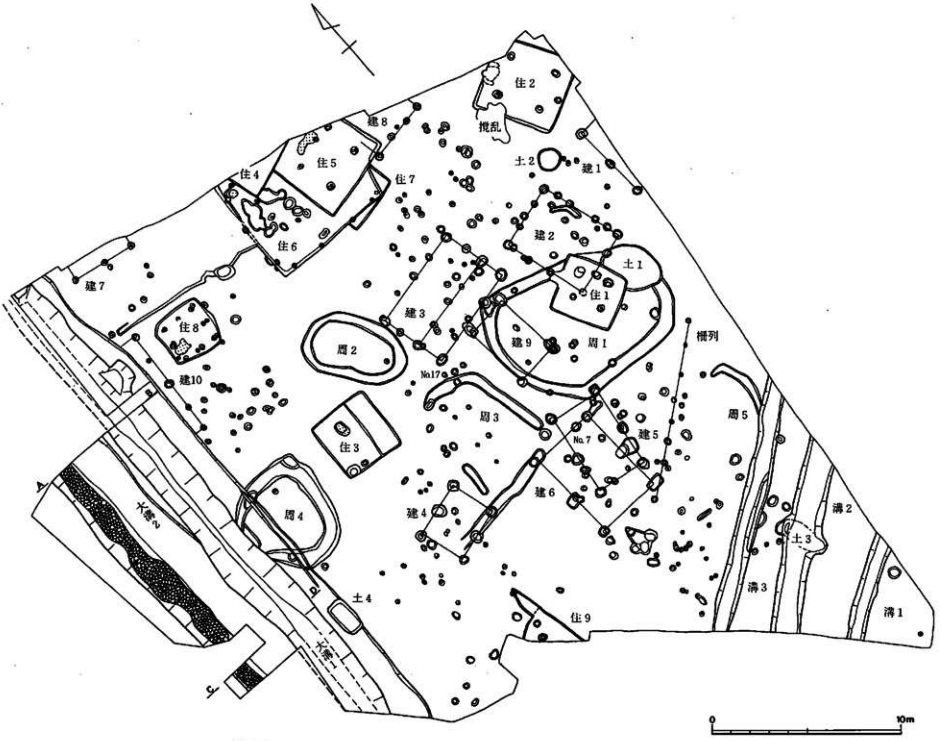
466－1番地は近世墓地（寛永年間から現在まで）の一部であったが，今期の大戦後改葬され分筆し，畑地として利用されていたが，トレンチを入れた結果，墓地の跡が歴然となった（第３図）

なお，遺跡の位置と環境は２集に収録するため，本書では省略する。

塚堂遺跡Ｅ地区の調査関係者は下記の通りである。

総　括	福岡県教育委員会		
	教育長	友野　隆	
	福岡県教育委員会管理部文化課		
	課　長	藤井　功	
	課長補佐	中村一世	
	参事補佐	内山孝之	（前任）
庶　務	庶務係長	松尾　満	
	主任主事	三瓶寧夫	（前任）
	同	川村喜一郎	
調　査	調査第２係長	栗原和彦	
	主任技師	副島邦弘	
	同	馬田弘稔	
	同	佐々木隆彦	
	補助員	日高正幸	

第1図　塚堂遺跡位置図（1/25.000）



第2図　塚堂遺跡(E地区)遺構配置図 (1/200)

以上の他に，地元吉井町教育委員会，福岡県文化財保護指導委員金子文夫氏の指導と協力を受けた。特に建設省九州地方建設局の調査課池沢卓己氏には絶大な協力を受けた。建設省関係者は一塚堂遺跡（第1集）一に記載されているので省略した。

また，作業員として参加をいただいた地元の皆さんに感謝の意を表したい。

第3図　試掘溝による近世墓出土状態

II　発掘調査の記録

1　調査の概要

E地区は昭和55年度に調査を実施したD地区の東側にあたる部分で，東側の用地未買収部分を除く地区を調査対象とした。表土剝ぎは重機を投入し水田の床土下まで掘り下げた時点で、黄褐色土と砂質土からなる地層から切り込んだ遺構が現われた。遺構の覆土は淡黒褐色の土質で埋まり，確認は容易であったが，遺跡が筑後川の自然堤防上に立地する関係から地層の乱れが顕著で，部分的に住居の廃棄後に砂質土で埋った個所があり，プランの誤認があったことは否めない。弥生時代から奈良時代の生活地層面は、後世の田畑による削平で深さが一定しているが，生活地層には縄文晩期の土器片，石器等が嵌入しており，縄文晩期の包含層上に竪穴住居跡等の遺構が設営されていた。土器片を含む砂質土層は，大溝の調査時点で確認したが，30cm前後の厚さで堆積しており，土器もローリングを受けている。包含層下は河原礫と砂混りの地層が厚く堆積していた。

遺跡の周辺は条里制の区割が残っており，調査区の北側の水路がその片鱗を留めている。さらに南北に走る中世の大溝が条里制の区割に沿った水路を利用したと考えられる。

E地区の遺構の内訳は，弥生時代後期後半の竪穴住居跡2軒，同時期の周溝状遺構5基，古墳時代以降の竪穴住居跡5軒，掘立柱建物10棟，溝3条，柵列，ピット群の他，中世の大溝等を検出した。

2　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版4－(1)・(2)，第4図）

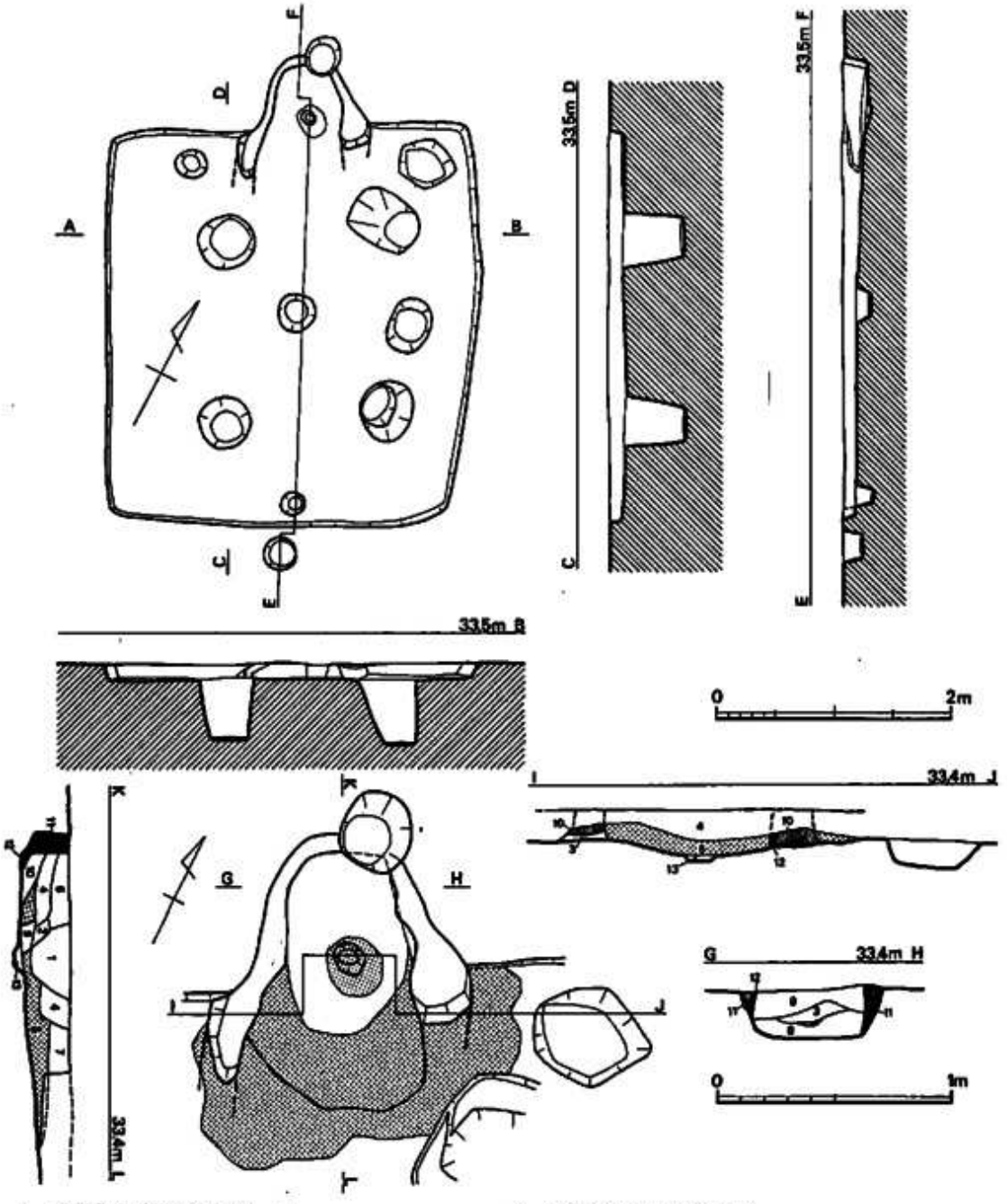
1号周溝，1号土壙，2号掘立柱建物と重複した竪穴住居跡で周溝と土壙を切り掘立柱建物に切られている。平面形態は方形を呈し，東西壁が僅かに長い。住居の規模は東西壁3.35・3.20m，南北壁2.88・3.02m，壁高15cm前後を測る。床面積は10.3m²（竈部分を含む）である。床面上には4本の主柱穴が掘られ，深さは50cm強を測る。柱間は東西間が1.50・1.30m、南北間1.65・1.50mを測り，住居のプランに比例する。床面中央部の柱穴は2号掘立柱建物の柱穴で住居跡より新しい。竈に対峙する南壁沿いの中央部には小さな柱穴が掘られ、2号竪穴住居にも同様の柱穴があることから，上部構造を支える副次的な柱と考えられる。深さは17cmである。

北壁の中央部には造り出しの竈を付設している。まず造り出し部を掘削した後に黄褐色粘土を帯状に貼付け，長さ40cmほどの両袖を付設する。竈の床面プランは不整長方形で，奥壁は2号建物の柱穴で撹乱を受けている。壁高は20cm前後で竈の上部構造は崩壊している。火床の中央部には径13cm，深さ3cmのピットが掘られ支脚の抜去痕が残っているが，非常に浅いことからこの時期に通常使用される小型の甕を支脚に転用していたと思われる。ピットの廻りの床面は焼痕が著しい。煙道は竈の奥壁部に浅い掘り込み部があり，造り出し構造上からも本体内にとり付けていたものであろう。住居の主軸は支脚ピットと南壁沿いの小柱穴を結ぶ主軸と主柱穴間の軸が平行関係にあり，N26°Wを示す。

出土遺物は土器が若干あるが，図示不可能な小片である。住居の時期は不明であるが，2号住居跡と同時期と考えるならば，2号出土の小型甕の小片から奈良時代に比定できる。

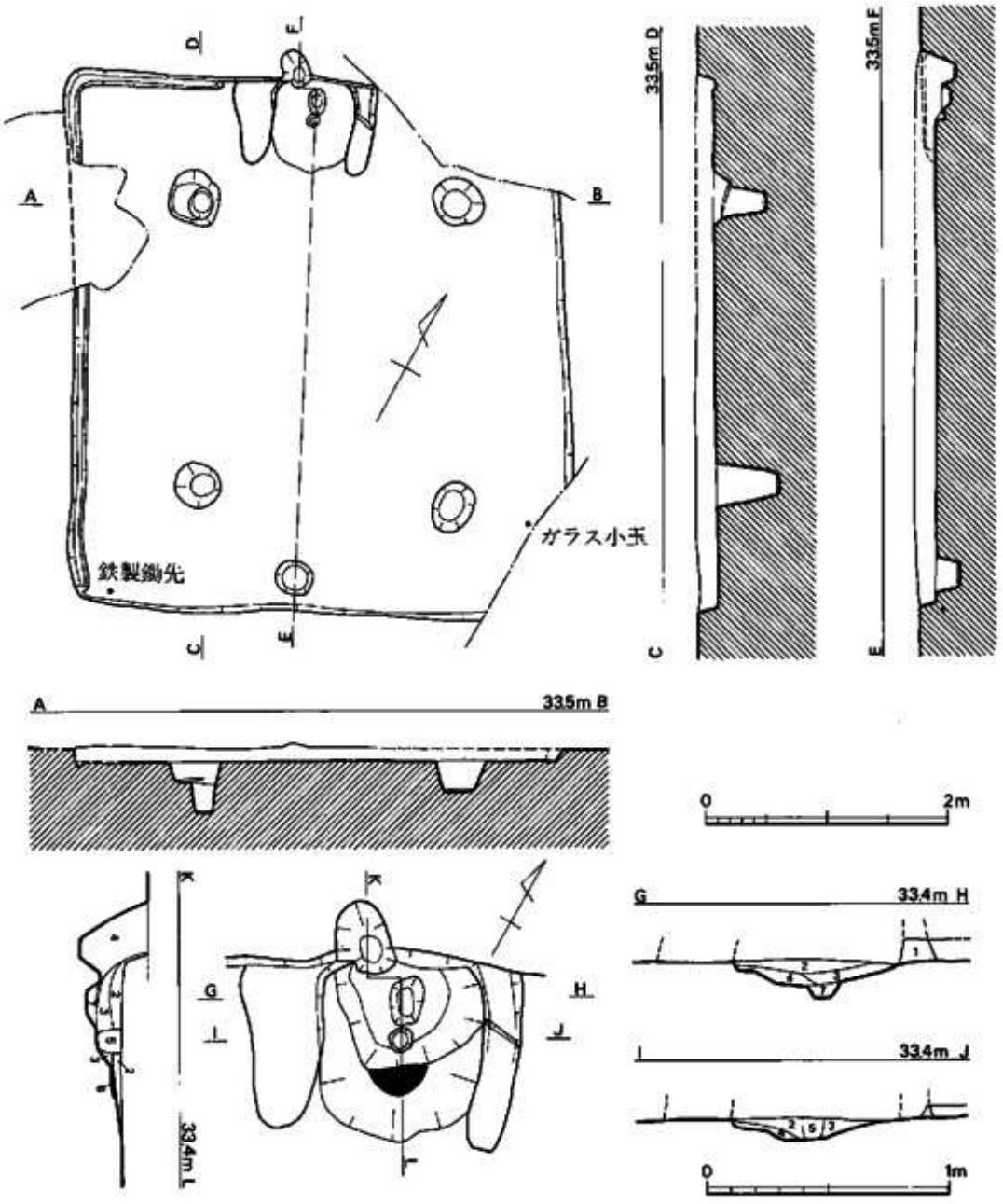
2号竪穴住居跡（図版5－(1)・(2)，第5図）

調査区の北東隅で検出した竪穴住居跡で完掘に至っていない。西壁の一部は撹乱を受けている。平面形態は方形で住居の規模は西壁4.40m，南北壁4.15・4.00m程であろう。壁高は15cm前後を測る。床面は踏みつけられ総体的に硬く，特に竈前面は硬く締っていた。床面積は竈部を含めて17.0m²である。主柱穴は規則的な4本柱で深さは25から50cmと差がある。南壁沿いの西寄りには1号住居と同様のピットがある。深さは20cmである。柱間は東西間で両方と



1．暗褐色土（焼土粒含む）
2．黒色土（焼土粒をほとんど含まず）
3．赤褐色粘質焼土（壁体落下土・袖基部に利用）
4．褐色粘質土（壁体落下土）
5．焼土（炭・灰・焼土）
6．暗褐色砂混粘質土（カマド埋土，焼土粒を含む）
7．粘質灰に焼土ブロックを含む（支脚抜痕埋土）
8．褐色粘質土（炭を含む）
9．5より砂質
10．暗褐色粘質土（焼土粒を含む，袖再築部）
11．黄褐色粘質土（焼土粒を含まず，2回めの袖）
12．（11が焼けたもの）
13．（茶褐色土，焼土を含む，支脚埋土）

第4図　1号竪穴住居・竈実測図（1/60・1/30）



1．黄褐色砂質土
2．暗褐色粘質土（1×1.5cm大焼土ブロックを含む，炭粒子を含む）
3．暗褐色砂質土（焼土粒，炭粒を含む）
4．黄褐色砂混暗褐色土（焼土粒含む）
5．暗褐色粘質土（1×2cm焼土を含む，支脚抜痕）
6．特に焼けている部分
7．暗褐色粘質土（焼土，炭を含む）

第5図　2号竪穴住居跡・竈実測図（1/60・1/30）

も2.10m、南北間で2.30・2.50mを測る。西壁と北壁の一部には深さ3cmの浅い周溝を廻らす。

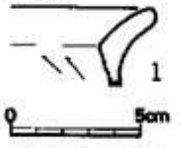
竈は北壁中央部に付設しているが，１号住居と形態が異り「U」字状の貼付け竈である。両袖は黄褐色の砂混りの粘土を使用しているが，明瞭な粘土ではなく調査時に掘り過ぎた感がある。袖の長さは65～75cmを測る。竈の床面プランは略方形をなし、西側袖寄りにはピット状の煙道が床面より深く掘り込まれていた。しかし、住居の上部構造を考慮すれば、煙道に何らかの工夫を凝らす必要性があろう。火床の中央部には径９cm，深さ９cmの支脚の抜去ピットがあり，自然石か土製支脚を固定していたことが判る。主軸方位は１号住居跡と同様な計測方法では主柱穴軸と竈及び南壁沿いのピットを結ぶ軸とは３°のずれがあり，住居の壁ともずれることから主柱穴軸を採用すればN29°Wを示す。

出土遺物は小片の小型甕の他，鉄製鋤先，ガラス小玉があるが，鉄製鋤先は紛失してしまい図示不可能になったことは誠に残念である。ガラス小玉，鋤先とも床面よりやや上層からの出土である。出土土器から住居の時期は古墳時代終末から奈良時代頃であろう。

出土遺物

土　器（第６図）

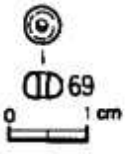
１の小型甕の小片がある。外反度の鈍い口縁を有し，器壁は厚手づくりである。横ナデと荒いヘラ削りで仕上げる。焼成は頗る堅固で暗褐色を呈する。



第６図　２号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

装身具（第７図）

69のガラス小玉が1個ある。色調はコバルトブルーで径が4.5mm、厚さ3.5mm，孔径1.2mmを測る。



第７図　２号竪穴住居跡出土装身具実測図（実大）

３号竪穴住居跡（図版６－(1)，第８図）

２号・４号周溝状遺構の間で検出した平面形態が方形を呈する竪穴住居跡である。住居は砂質層を切り込んでおり、覆土は上層が黒褐色の砂質土、下層が灰褐色の砂層で埋まり廻りの地層と区別がつかず壁の検出に困難を極めた。住居の規模は東西壁3.50・3.25m，南北壁3.30・3.40m，壁高は25cm前後を測る。床面積は11.4m²（ピット状遺構を含む）である。主柱穴は数度の検出を試みたが明らかでなく、住居の形態から東西方向に２本の主柱を設けるのが普遍的な形である。南壁沿いで検出した小ピット（深さ10cm）は主柱とするには疑問が残る。東壁側には幅1.10m，高さ10cmのピット状遺構を削り出している。南西隅には70×50cmの楕円形の屋内土壙を設けている。床面の北壁側には80×55cmの楕円形

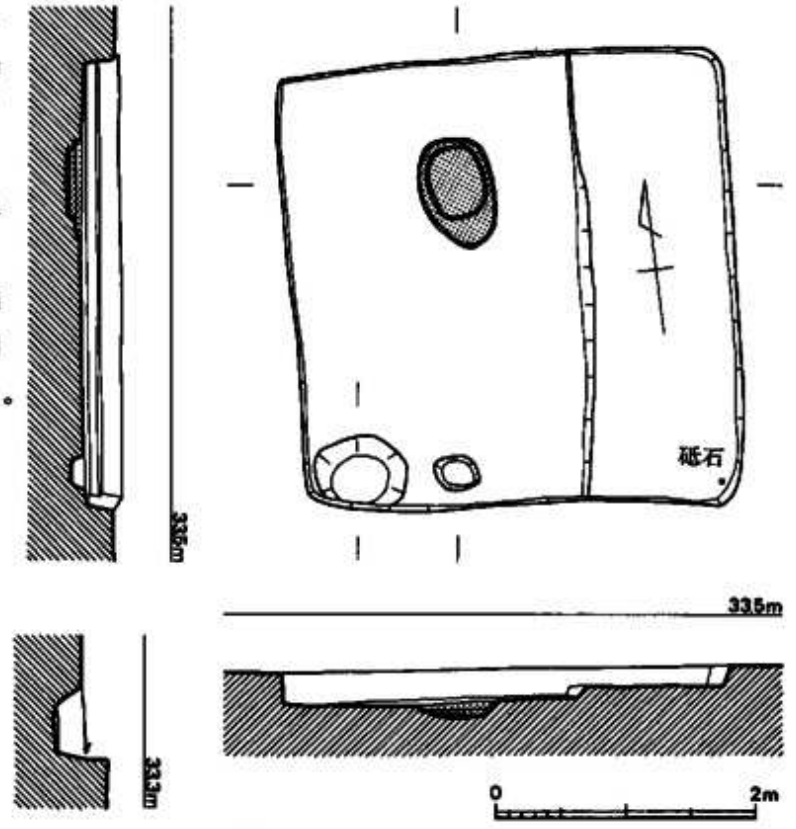
の二段掘りの炉跡があり，中には灰と炭化物混りの砂質土で埋っていた。

遺物は覆土と屋内土壙から甕の小破片が，ベット上から砥石が出土している。住居の時期は古墳時代前期である。

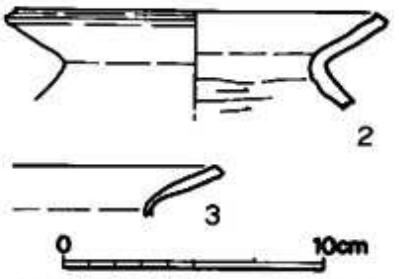
出土遺物

土　器（第９図）

甕形土器が２点ある。２は屋内土壙から出土したもので，口唇部は摘み上げ頸部から直に外反する口縁部を有す。器壁は同時期の甕と比較してやや厚く５㎜を測る。調整は横ナデとヘラ削りで仕上げる。胎土は精製され金雲母を含む。焼成は頗る堅固で灰黄褐色を呈す。３は口唇部を肥厚させ，胎土・焼成・色調とも２に酷似する。



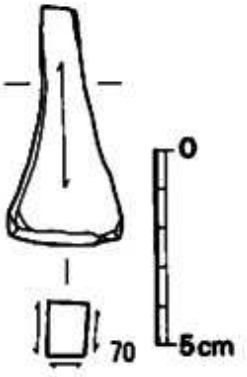
第８図　３号竪穴住居跡実測図（1/60）



第９図　３号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

石　器（図版19，第10図）

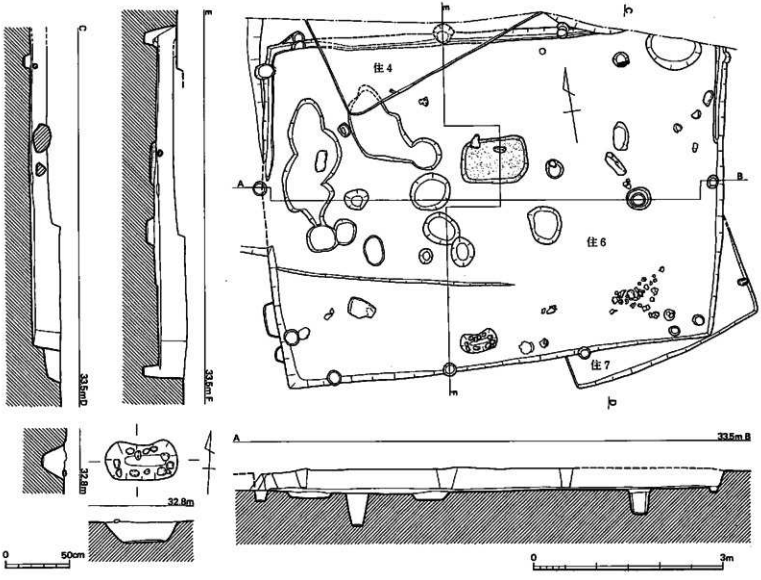
砥石70が1点ある。硬質砂岩製で砥ぎ面は4面である。現存長は6.1cmを測り，⅓を欠失する。使用頻度が著しく砥ぎ面が凹状をなす。



第10図　３号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

４号竪穴住居跡（図版６－(2)，第11図）

5号・6号竪穴住居跡を切った状態で検出した住居跡であるが、大半が路線外であることと調



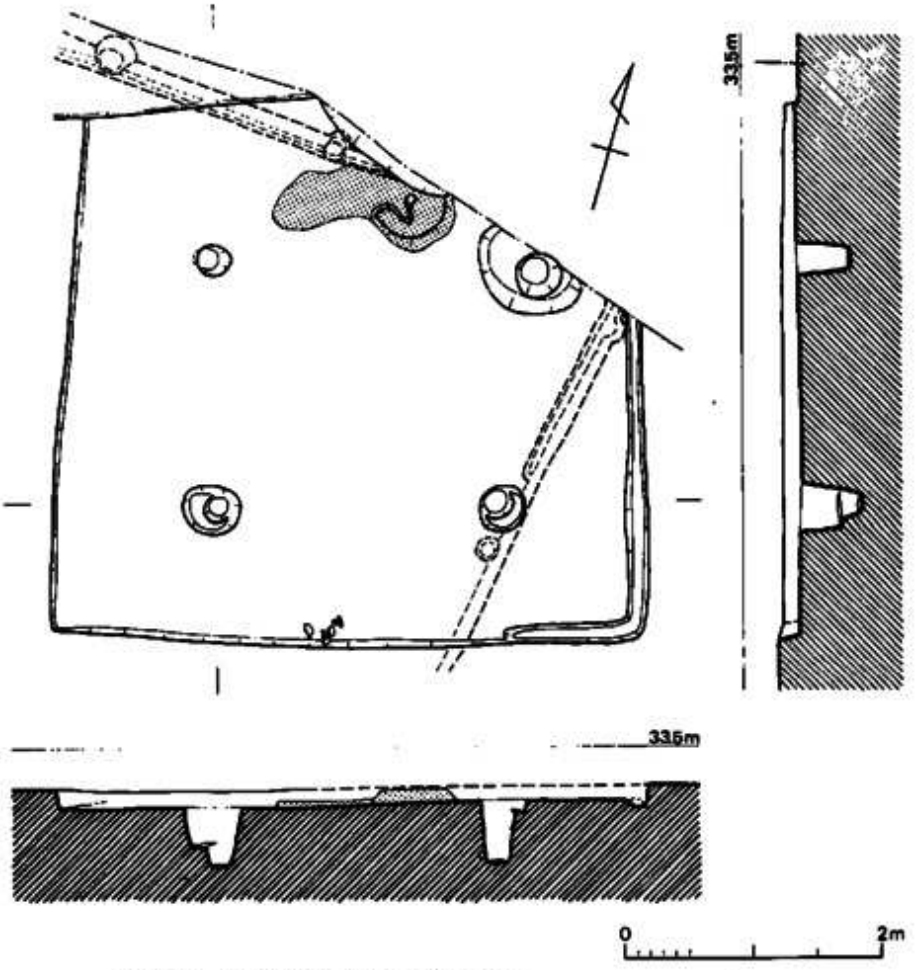
第11図　4号・6号・7号竪穴住居跡実測図（1/60）

査区北側に流れている水路に切られ全容はつかめない。壁高は10cm未満で遺存状態は良くない。

出土遺物は皆無で時期も明らかでないが，５号住居より新しいことから１号・２号住居と同時期と考える。

５号竪穴住居跡（図版６－(2)，第12図）

調査区の北端で検出した竪穴住居跡で３軒の住居跡と重複し，４号に切られ，６号・７号住居を切っている。平面形態は方形をなすと思われるが，北壁を水路により撹乱され完掘に至っていない。規模は南壁で4.60ｍ，壁高10cm前後の数値が得られる。床面は６号住居との重複から殆んどが貼床であるが，竈前面以外は硬く締っていない。主柱穴は４本で深さは45



第12図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）

～50cmと深くしっかりした柱穴である。柱間は東西間で2.50・2.20m，南北間で1.90・1.80mを測る。周溝は東壁沿いと南壁の一部に認められ，深さ5cm強を測る。北壁の中央部には竈を付設しているが，本体は破壊され前面の掻き出し部の焼土のみを確認した。主軸方位は西壁側の主柱を採用するとN16°Wを示す。

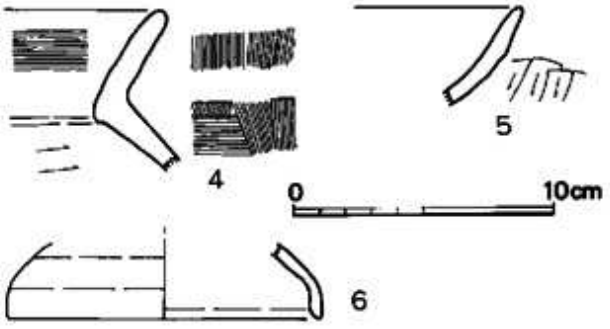
出土遺物は土師質の甕・坏，須恵質の坏蓋がある。甕は竈付近，他は覆土中から出土した。出土土器から住居の時期は6世紀後半～末頃に比定できる。

出土遺物

土　器（第13図）

土師器には甕4と杯5がある。甕は「く」字状に鋭く外反する口縁部を有し、器壁は厚くつくられる。調整はハケを多用し，内面は荒い右方向のヘラ削りで仕上げる。5は坏の小片で甕同様器壁は厚い。内面は横ナデ，外面は縦方向のヘラ削りを施す。胎土は精製され淡赤褐色の色調を持つ。

須恵器は6の坏蓋がある。小片で横ナデで仕上げる。



第13図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

6号竪穴住居跡（図版6－(2)，7－(1)・(2)，8－(1)，第11図）

3号竪穴住居跡と時期的に併行関係にある大型の住居跡で4号・5号より旧く，7号より新しい。西壁は苗代田で削平され壁の一部を欠く。北東隅は水路が流れ調査不可能である。平面形態は長方形で，規模は西壁5.40m，南北壁6.75・7.25m，壁高は遺存状態の良好な個所で40cm前後を測る。住居の床面積は35.2m²である。床面は砂質層からなり硬く締っていない。主柱穴は断面図に示したように2本柱であるが，大型の竪穴住居跡にしては40～50cmを測り，やや浅い感じを受ける。主柱間は4.50mである。さらに，四方の壁に接する形で住居の長軸壁に各々4本，短軸壁に各々3本の副次柱があり，四隅の柱間は狭い。柱間は1.50～2.40mを測り，柱間に差がある。北東隅の壁沿いには楕円形の長軸90cm（短軸は不明），深さ20cm強の屋内土壙が掘られているが，土壙と周溝が直結しているか否かは明らかでない。底部付近には暗灰褐色の粘土が堆積しており，弥生時代の長軸壁沿いに通常みい出される作業穴（屋内土壙）とは異った在り方を示唆する。廻りの地層が砂質土で形成されていることを考慮すれば，土壙底面に堆積した粘土は土壙の内側に粘土を貼り，屋内の水留的な機能を持

たせていたか或は屋内貯蔵穴的な用途が考えられる。中からは壺の破片が出土している。主柱穴間の中央部のやや北寄りには隅円長方形の浅い炉を設けており，３号住居同様の灰及び炭化物混りの砂質土が堆積していたが、焼痕は認められない。周溝は西壁の一部と北壁全面，東壁の一部に掘られており，限定された方向からの湧水または雨漏が想定でき，隅に掘られたピットがそれを利用した水溜土壙と考えれば理解できる。北西隅には床面から10cm程度上層から焼土塊を確認したが，床面の焼痕はない。特筆する事象として，南壁の中央にある副次柱間には不整楕円形のピットが掘られている。ピット内は砂質土で埋まっており，ピット上面には握拳大の河原礫をピットのプランに沿って配していることと底面形状等を考慮すれば，梯子の固定穴が推察され，平入構造の竪穴住居跡であったことが判る。主軸方位は主柱穴軸を採用するとN81°Wを示す。

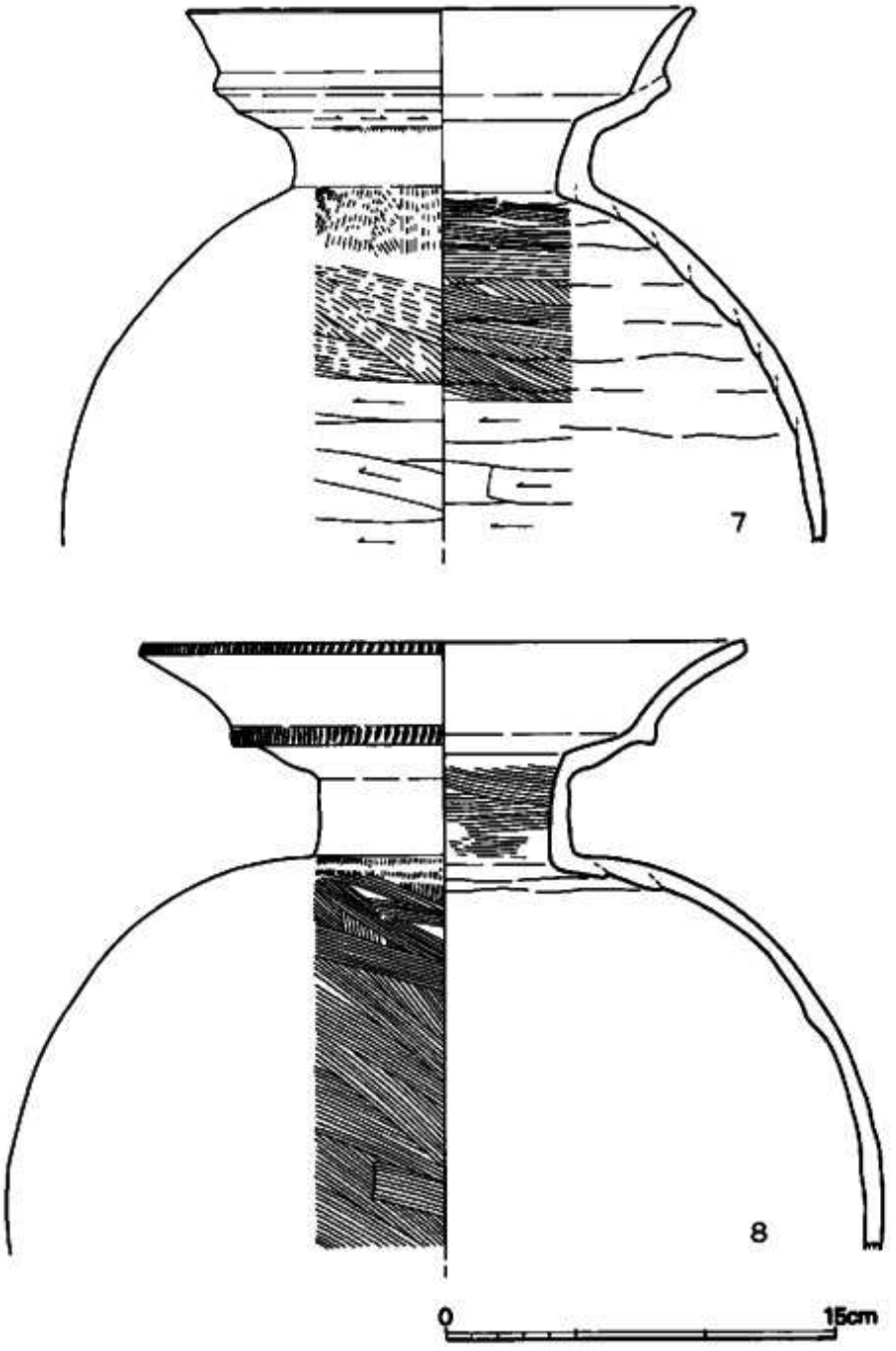
遺物の出土状態は南壁寄りと東壁沿いで集中して出土した。東壁側は床面直上から出土し，南壁側の土器群は床面より10～15cm上位で出土したが，両者の土器群に時期差はない。しかし，18～21・24～26の甕は上層から出土し，僅かに新相をなす。なお，大きな河原礫が床面から10cm前後上層から出土している。

遺物は豊富で壺，小型丸底，甕，鉢，埦，高坏，甑等があり，39～41の高坏は伴出の土器群と比較して新しい様相をなし混入と思われる。その他石庖丁(縄文晩期)，鉄製手鎌が出土している。住居の時期は古墳時代前期でも古い時期に比定できる。

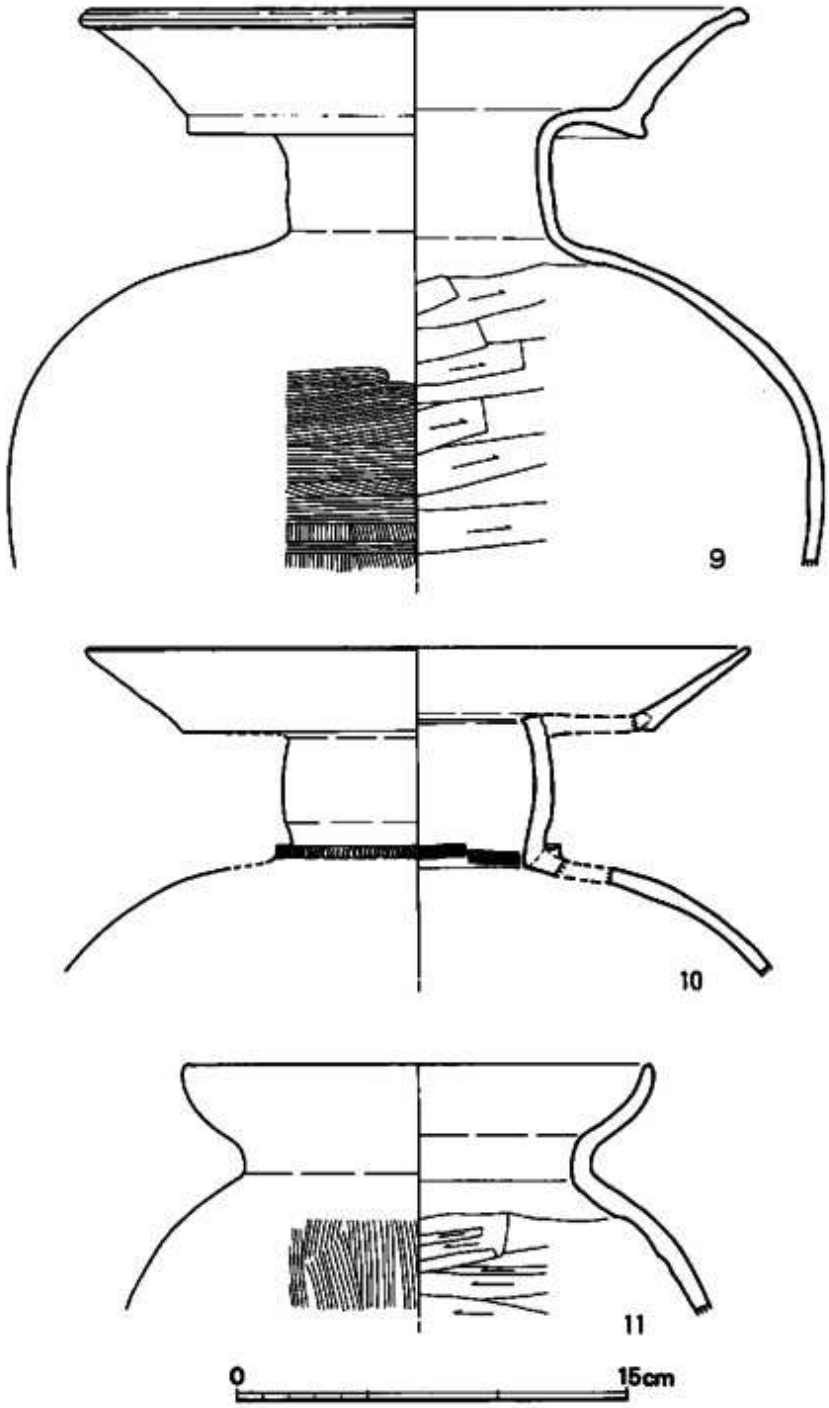
出土遺物

土　器（図版17・18・19，第14・15・16・17・18・19図）

壺は７～15がある。７～11・15は複合口縁壺で，７は鋭く外反する擬口縁に短い反り気味に外反する口縁部を付す。頸部は短く肩から胴部にかけては球形を呈する。総体的に器壁は厚い。調整は擬口縁外面は横ヘラ削り、頸部内面から口縁部外面にかけて横ヘラ磨キ，器部内外面は荒い横ハケと左廻りのヘラ削りを併用している。内面には巻き上げ痕を残す。胎土は頗る緻密で金雲母を含む。焼成も非常に堅固で淡茶褐色を呈する。８は朝顔形の口縁を有し、口唇部と擬口縁外面には板の小口による刺突文を配している。頸部は細く肩から胴部にかけては著しく張り球形をなす。調整は口縁部内外面ともナデ，頸部内面と器体外面は荒いハケを多用する。内面は最終調整が下から上方向の指頭ナデを施すが，器壁を薄く仕上げていることからヘラ削り技法を用いたものであろう。胎土・焼成・色調とも７の壺と酷似する。９はつくりの良質な土器で，長く反り気味に外反する口縁部を持ち口唇部を肥厚させる。擬口縁は外反度が著しく下り気味で細い頸部を有す。肩から胴上半は著しく張り最大径が胴部上半にある。頸部内面から肩部外面までは頗る丁寧な横ナデで仕上げ，胴部外面はやや荒い横ハケと縦ハケを多用する。内面は丁寧な右廻りのヘラ削りで仕上げる。胎土は緻密で金雲



第14図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

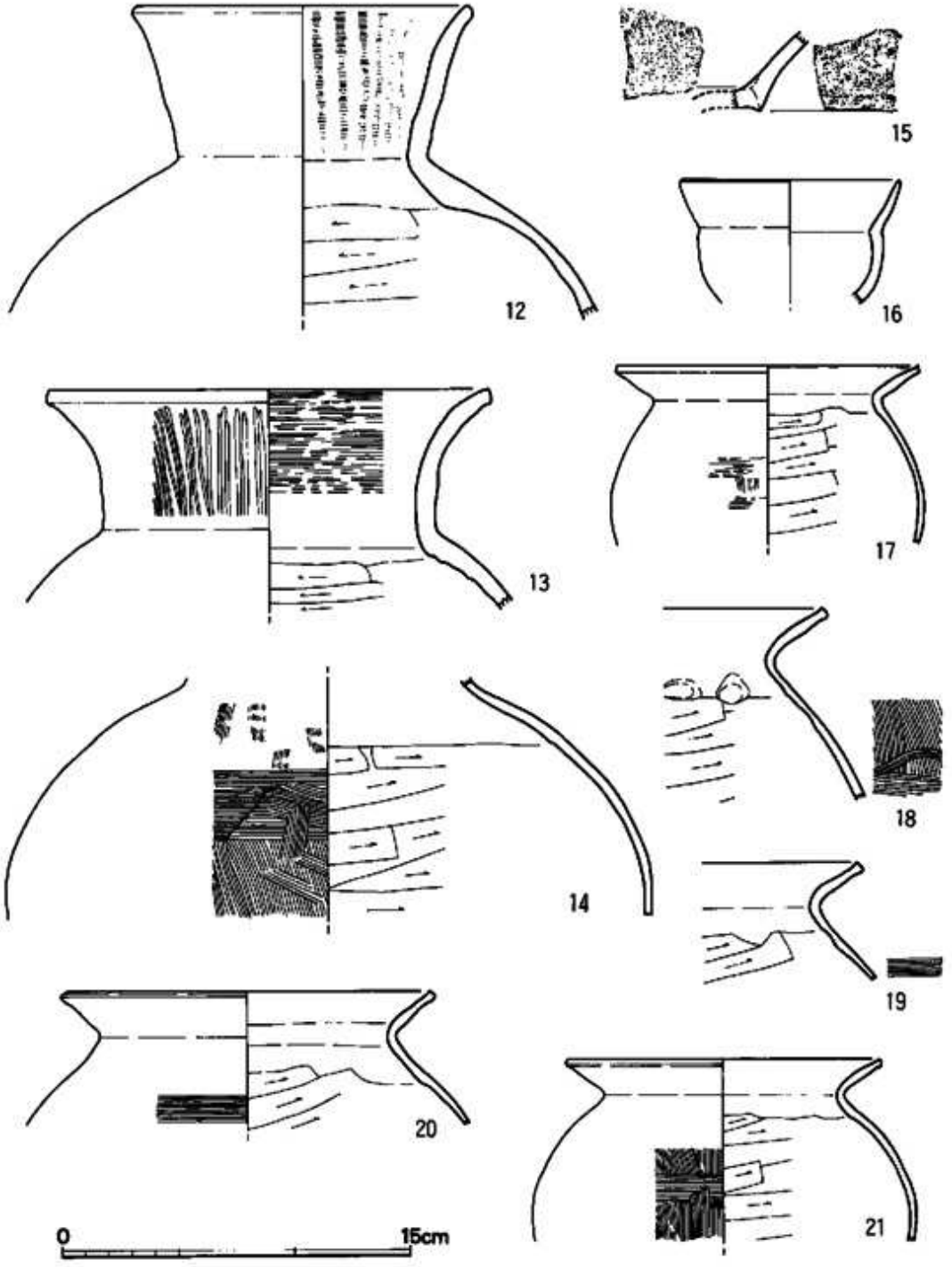


第15図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

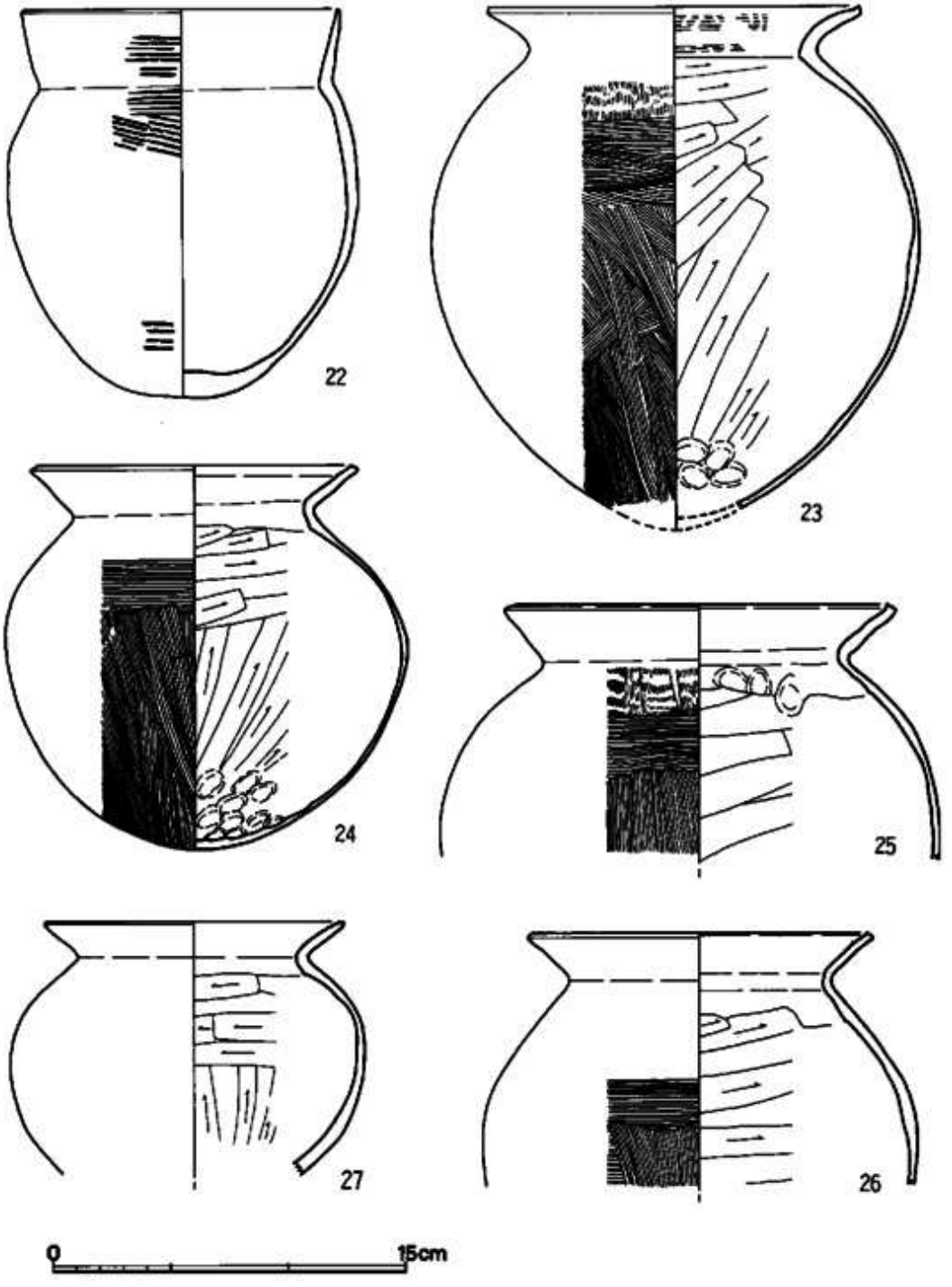
母を多く含む。焼成は頗る堅固で，色調は他の複合口縁とは異り明灰褐色を呈す。10は復原実測の壺で擬口縁から口縁部にかけては屈折し，直に外反する口縁部を持つ。頸部は細みでしかも膨らみ気味で，断面三角形の凸帯を付す。凸帯の上面と側面には半截竹管の刺突文を密に配する。肩部は9の壺同様著しく張る。調整は縦横のヘラ磨キを多用し，頸部内面と器体内面は丁寧なナデで仕上げる。胎土・焼成・色調とも7，8と同様頗る良好である。11は退化した複合縁の形状を持ち，肩部は前記の壺のような膨らみはみられない。調整も荒い縦ハケとヘラ削りで仕上げ，器壁も厚く新しい調整・技法を採用した壺で，39～41の高坏と共存するもので当該住居跡に伴う土器ではない。12は反り気味の口縁部に肩の張った器体を有す。器壁は厚く口縁内外面は細い横ハケののち縦ヘラ磨キで仕上げ，肩部もヘラで丁寧に磨く。頸部内面は指頭ナデでその下から左廻りのヘラ削りで仕上げる。13は大きく開く口縁部を持ち，口縁内面は細いハケ状の横ナデ，外面は暗文状の縦ヘラ磨キを施す。12・13とも胎土・焼成・色調が酷似し，精製された胎土を持ち焼成は頗る堅固である。淡い茶褐色を呈す。14は器壁を薄く仕上げた壺で口縁部と胴下半を欠く。肩の張りは著しく細い横と縦ハケを多用する。内面は右廻りの丁寧なヘラ削りで仕上げる。胎土・焼成・色調は9と同じである。15は内外面に鋭い櫛描き波状文を施す複合口縁壺である。

小型丸底土器は16がある。「く」字状に外反する口縁部は短く，扁平球の胴部を持つ。内面はヘラ削りののちナデ，外面は横ヘラ磨キで仕上げ化粧土を塗布する。

甕は17～28がある。この内17・21・27は小型甕である。22・23・27を除く他の甕は同一の形態，技法，調整を持つ。口唇部は摘み上げるか肥厚させ，口縁部は鋭く外反し内弯傾向は認められない。肩から胴部にかけての張りは強く，最大径を胴部上半に持つ。底部は欠失している例が多く，24のみ残存し丸底をなす。調整は外面に細い横ハケと縦ハケを多用し，内面は頸部より僅かに下から丁寧な右方向と下から上へのヘラ削りで仕上げ，底部内面には「型作り技法」の際に付けられると云う指頭圧痕が認められる。器壁は非常に薄く仕上げている。22は在地系の甕で外反度の鈍い口縁部に張りの少ない胴部を持つ。底部は丸底をなす。器体の内面は丁寧なナデ，外面は弥生時代の系譜を引く荒い叩キを施し，その上を磨キ風のナデで仕上げる。部分的に二次加熱を受ける。23は鋭く反り気味に外反する口縁部を有し，口唇部を僅かに隆起させる。頸部内面の稜線は内面を右廻りのヘラ削りで仕上げるため明瞭に残る。肩から胴部の張りは著しく，底部は尖り底を持つと思われる。最大径は胴部上半にあり，器体外面には横ハケと縦ハケを多く用い，内面底部付近には指頭圧痕がみられる。他の甕の横ハケと比較すると定形化した横ハケはみられず，調整・技法の点においても古い要素が窺える。形態的には大分県安国寺遺跡出土の庄内式大和型の甕に酷似する。胎土は頗る緻密で金雲母を含む。焼成も非常に良く明灰褐色を呈す。胴下半には煤が付着する。27は鋭く外反する口縁部を持ち，胴部は扁平球である。外面は丁寧なヘラ磨キ，内面は丁寧な左廻りのヘ



第16図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

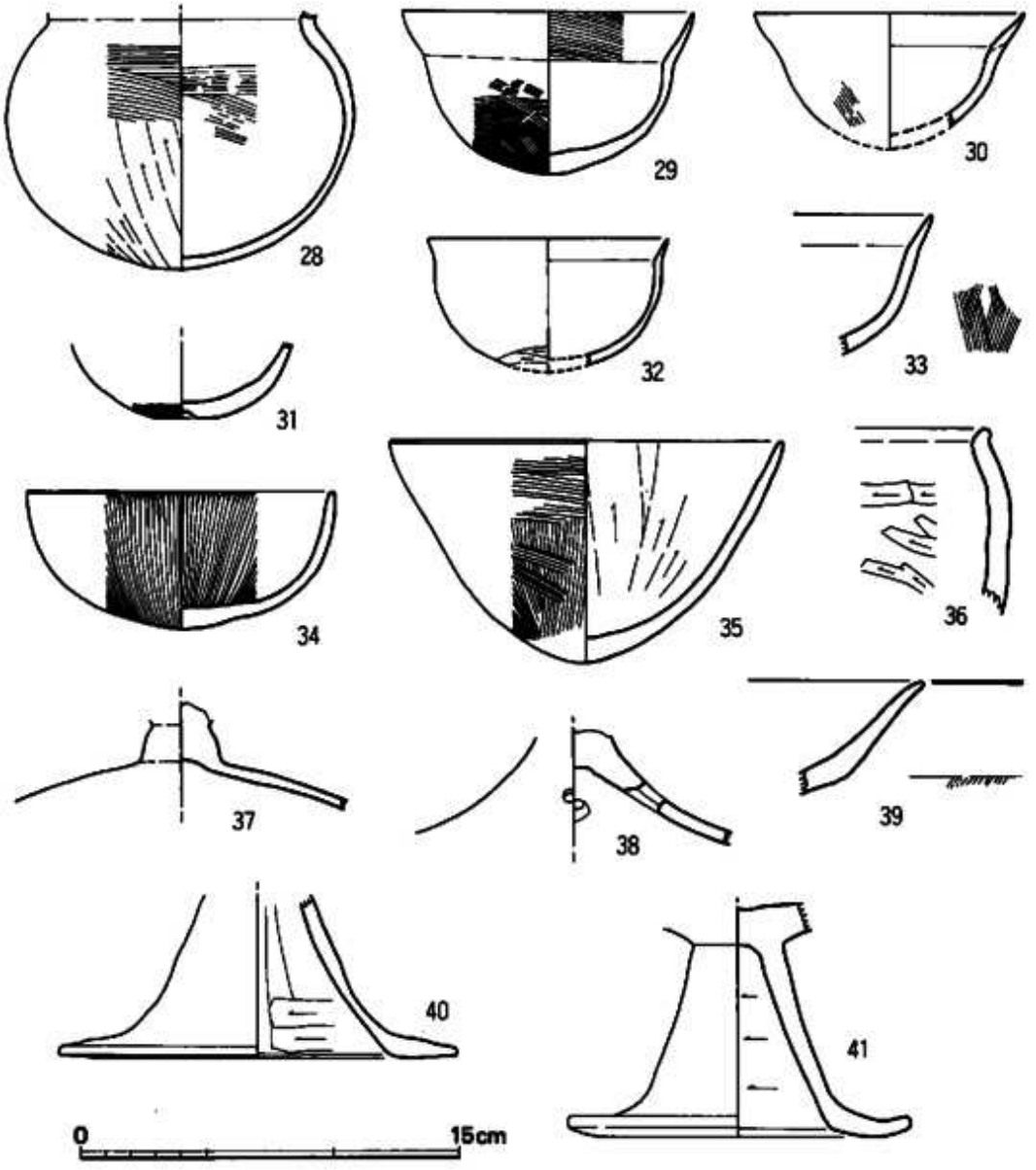


第17図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

ラ削りで仕上げる。強い二次加熱を受け，赤褐色を呈す。28も二次加熱を受け煤が付着する。

鉢は4種類がある。内弯気味の口縁を有す29・30と口縁が短く直に外反する32，在地系の35・36がある。31は底部を凹状にし，他の底部は29・35と同様の尖り底であろう。35は外面に強い二次加熱を受ける。

34は塊で内外面とも暗文状の縦ヘラ磨キで仕上げ，やや尖り底である。頗る良質の土器で，

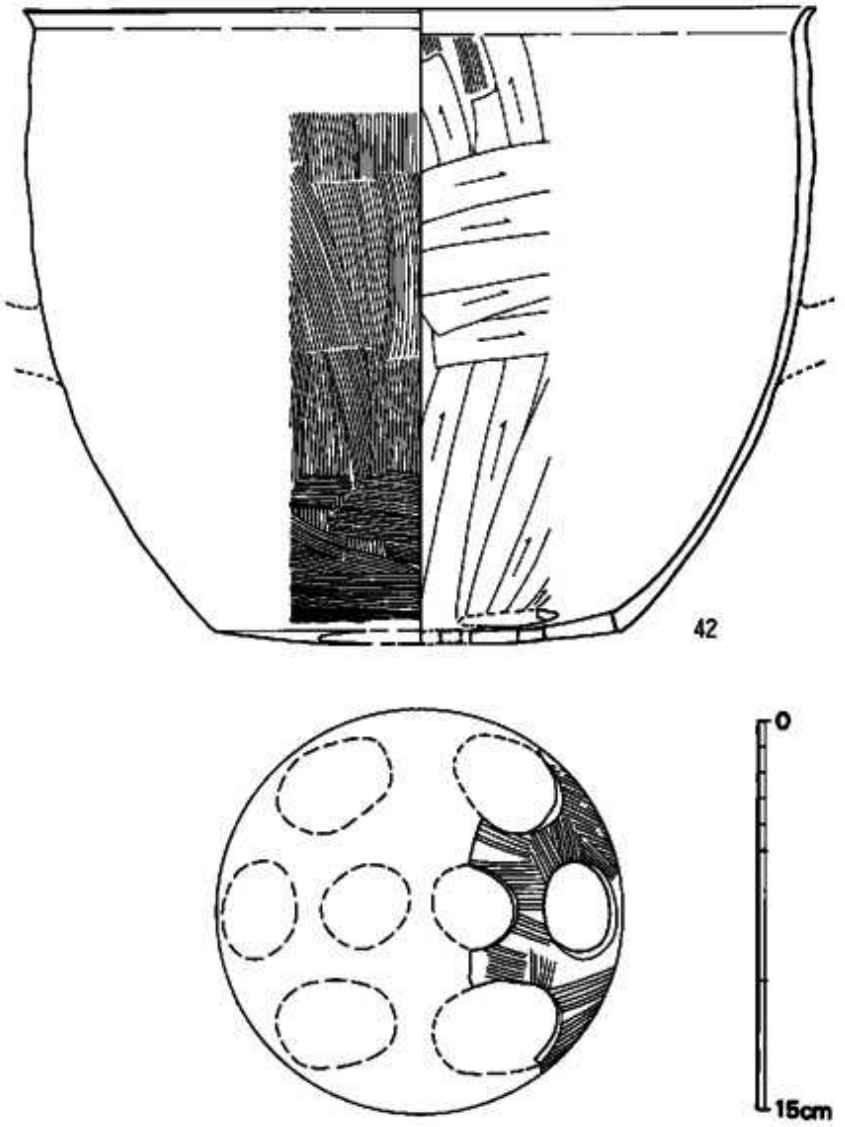


第18図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

胎土は緻密で細粒金雲母を含む。焼成も堅固で淡茶褐色の色調を持つ。

高坏は37～41があるが，前述したように39～41は器種構成の中では新しい要素を持つもので11の複合口縁と同様混入と考える。37・38は最古式土師器の範疇に入る高坏で椀形の坏部がつく。両者とも非常に良質のつくりで37は磨キ風の丁寧なナデ，38は縦ヘラ磨キで仕上げ4個所に孔を穿つ。

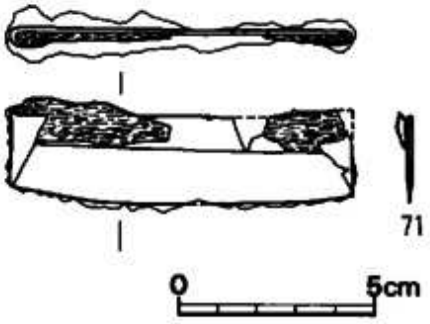
甑は42の破片があり，図示した土器は復原実測である。南壁の土器群と同一レベルから出



第19図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

した。多孔式の甑は西新町，三雲八龍，塚堂A・D地区の諸遺跡で出土例があり，西新町の例は小孔を数多く穿ち，しかも共伴する甕は当該住居跡出土のそれと比較すると古く，多孔式の甑でも古い様相を持つものであろう。 2の甑は口縁部が短く口唇部には浅い沈線を廻らす。胴部と底部は大きく安定感がある。把手は現存では認められない。底部の孔は復原すると8個となる。器壁は薄手づくりで良質な土器である。調整は細いハケと荒いハケを多用し，内面は頗る丁寧にヘラで削っており，共伴する甕に共通する。底部外面にも胴部と同じハケを施す。胎土は非常に緻密で金雲母を多く含み赤色粒子が僅かに混入する。焼成は非常に良く，淡茶褐色の色調をなす。

当該甑が共伴する土器群に伴うか否かの確証はないが，三雲八龍，塚堂A・D地区の多孔式の甑と比較するとタイプもやや異り，調整及びつくりも丁寧で明らかに古い様相を呈し，三雲八龍出土の甑と共伴する土師器が5世紀前葉頃に比定できることから，それ以前の時期が与えられる。



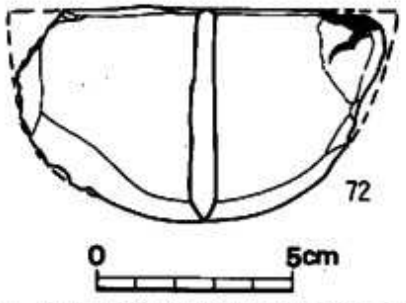
第20図　6号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）

鉄　器（図版19，第20）

71は住居の北西隅の焼土上から出土した手鎌である。使用頻度が激しく砥ぎ直しによる磨耗が著しい。袋部の木質も良く残り，木質の着装線も明瞭である。全長8.8cm，幅2.2cm，厚さ1.2mmを測る。

石　器（図版19，第21図）

72は縄文晩期の無孔石庖丁である。6号竪穴住居が縄文晩期の包含層を切り込んで設営していることから混入したものである。砂岩製で刃部と棟部を研磨し，側面は表裏とも自然面のままである。長さ9.4cm，幅5.5cm，厚さ7mmを測る。



第21図　6号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）

7号竪穴住居跡（図版8－(1)，第11図）

5号・6号竪穴住居跡との重複が激しく全容は全く不明である。南壁のみ計測でき3.10m，壁高10cm前後を測る。現存状況から小型の長方形の住居跡であろう。

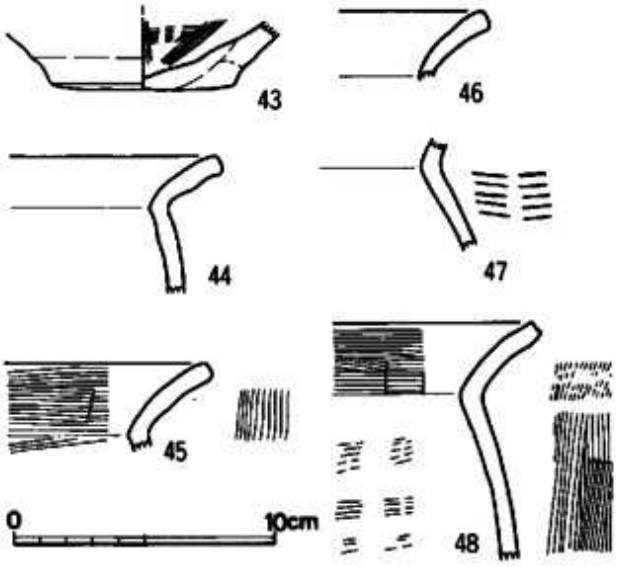
出土遺物は壺・甕の破片がある。出土土器から住居の時期は周溝状遺構と同時期で弥生時代後期後半頃である。

出土遺物

土　器（第22図）

壺は43の底部片が１点ある。底部は僅かにレンズ状を呈す。器外面は横ナデ，内面はハケで仕上げる。

甕は46～48がある。全て「く」字状の反り気味に外反する口縁部を持つ。調整は横ナデとハケで仕上げ，47は荒い５本一単位の叩キを施す。

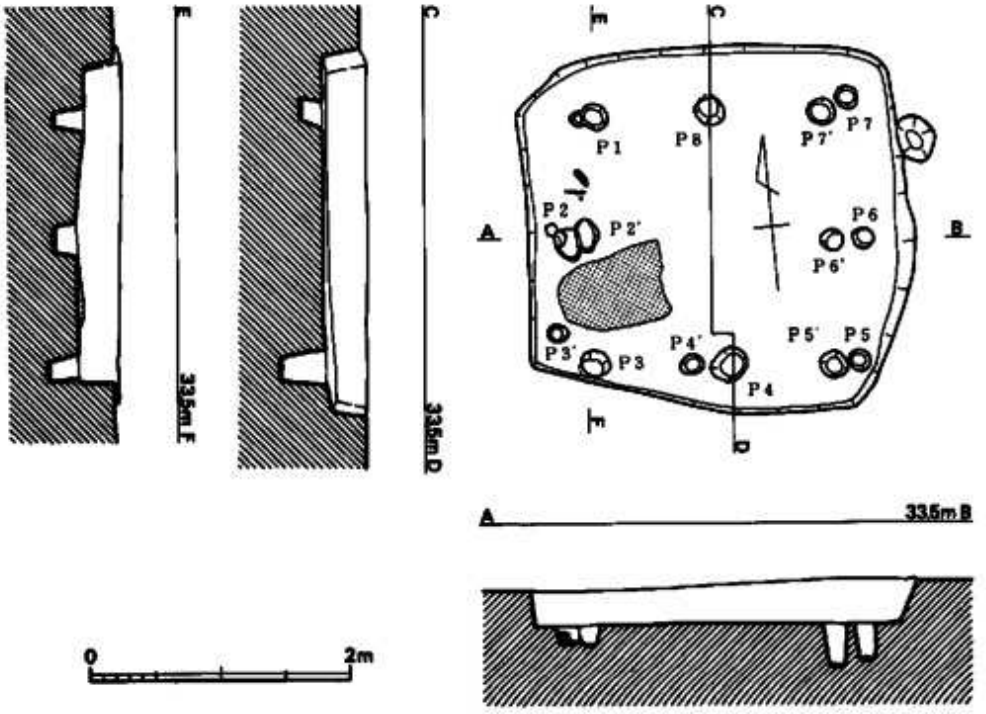


第22図　７号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

８号竪穴住居跡

（図版９－(1)，第23図）

６号住居跡の西側で検出した方形プランを有す竪穴住居跡である。規模は東西壁2.75・1.95m，南北壁2.55・2.95mを測り，やや胴張りをなす。壁高は30cm前後で遺存状態は良い。床面積は7.10m²で小型の住居である。主柱は８本で北壁の２本を除くと全て建直しを計っている（P′）。深さは



第23図　８号竪穴住居跡実測図（1/60）

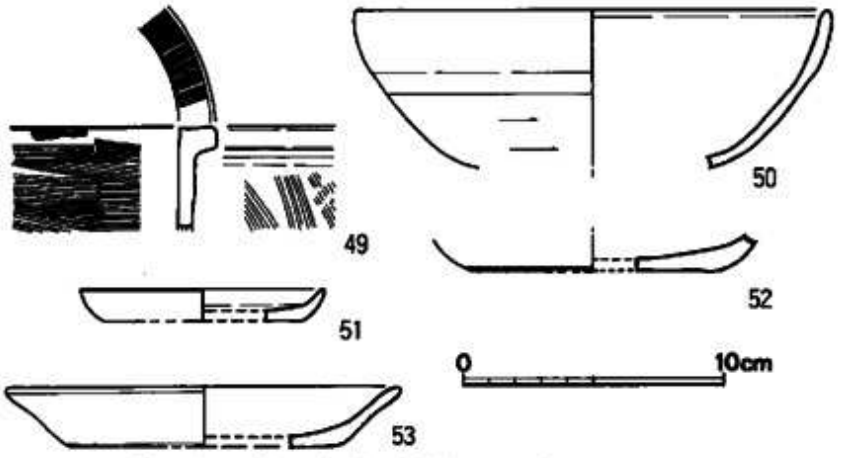
15～30cmと差がある。柱間は$P_1-P_2$90cm・P_1-P_2'1 0m，$P_2-P_3$1.0m・$P_2'-P_3'$70cm，$P_3-P_4$1.10m・$P_3'-P_4'$1.05m，P_4-P_5 1.0m・$P_4'-P_5'$1.10m，$P_5-P_6$95cm・$P_5'-P_6'$95cm，$P_6-P_7$1.10m・$P_6'-P_7'$1.0m，$P_7-P_8$1.05m・$P_7'-P_8'$85cm，$P_8-P_1$90cmを測る。明確に炉跡と認め得る掘り込みはなく，P_2とP_3間で床面に貼り付いた状態で炭化物が堆積しており，短期の火の使用痕が残る。主軸方位はP_2-P_6が棟柱でその主柱を採用するとN85°Wを示す。

図示した出土遺物は覆土の上層から出土した土器で，大溝出土の土器と同時期である。住居跡の覆土中に新しい遺構が遺存したか，或は流れ込みの可能性も否定できない。住居に伴う遺物としては床面直上から内外面に荒いハケを施した甕の小片が若干出土しており，7号竪穴住居跡と同一時期が与えられる。図示した土器はここでは流れ込み土器として説明する。

出土遺物

流入土器（第24図）

49は短い逆「L」字状の口縁を有し厚手づくりである。調整は内面が細い横ハケ，外面は荒いハケで仕上げる。口縁の平担部には幅5mmの板の小口による装飾的なハケを施す。焼成は良く淡茶褐色を呈す。大溝からは同タイプの甕が出土している。



第24図　8号竪穴住居跡上層（流れ込み）出土土器実測図（1/3）

50は瓦質の椀形土器で胴下半はヘラ削り，他は横ナデで仕上げる。復原口径18.2cmを測る。

51～53は皿で51の口径は9.4cm，器高1.2cmを測る。底部は糸切り痕を残す。53は口径15.2cm，器高2.2cmを測る。調整は横ナデで底部に糸切り痕が残る。

9号竪穴住居跡（図版9－(2)，第25図）

発掘区南側で住居の一部を検出したが，大部分が路線外のため完掘に至っていない。浅い溝状遺構と切り合い関係にあるが，新旧は明らかでない。床面には深さ40cmの柱穴があるが，

住居に伴うか否かは判断できない。壁高10cm未満である。出土遺物もなく，時期も不明である。

(2) 掘立柱建物

1号掘立柱建物(第26図)

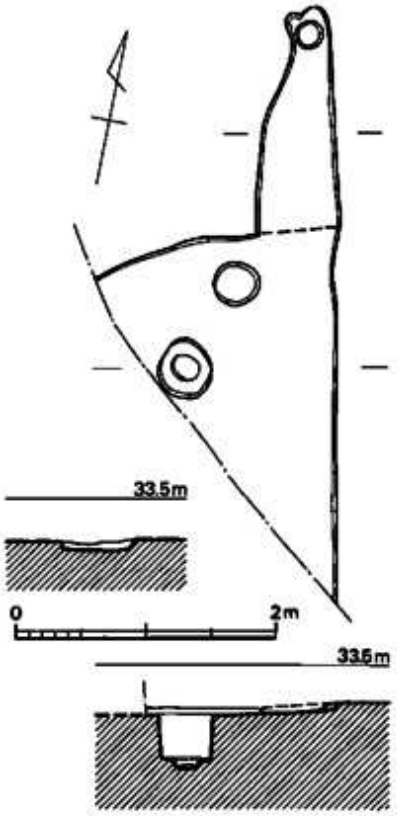
2号竪穴住居跡の南側に隣接して建てられた掘立柱建物である。東側は未買収のため調査不可能であったが，1間×2間の建物であろう。柱穴の深さはP1－35cm，P2－42cm，P3－30cmを測る。P3からは土器の小片が出土しているが，時期の判別はつかない。主軸方位はN4°Wを示す。

2号掘立柱建物(図版10－(1)，第27図)

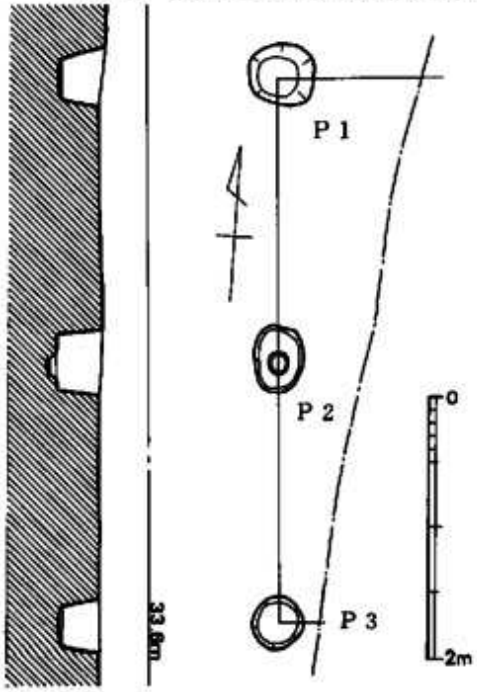
1号住居跡と重複する3間×3間の掘立柱建物でP8が1号住居の竈を切っている。桁行間の東西中央柱は規則的に対応せず，しかも柱間に差がある。隅柱も他の柱と同様の深さで特別深くは掘られていない。柱穴の深さはP1－24cm，P2－20cm，P3－21cm，P4－30cm，P5－28cm，P6－31cm，P7－14cm，P8－24，P9－19cm，P10－22cm，P11－39cm，P12－34cmを測る。柱穴からの出土遺物はないが，1号住居跡を切っており，1号住が奈良時代頃に比定されることからそれ以後の建物である。主軸方位はN17°Wを示す。

第1表 1号掘立柱建物計測表(単位cm)

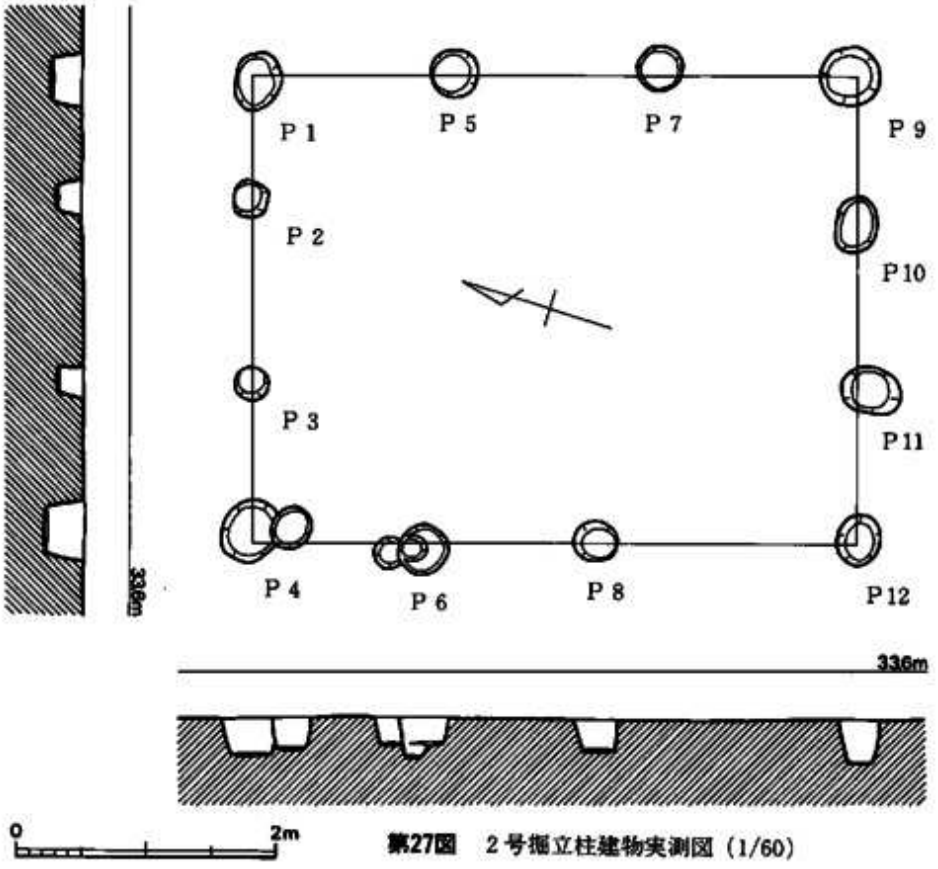
桁行柱間		桁行間
P1－P2 220	P2－P3 200	P1－P3 420
――	――	――



第25図 9号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第26図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)



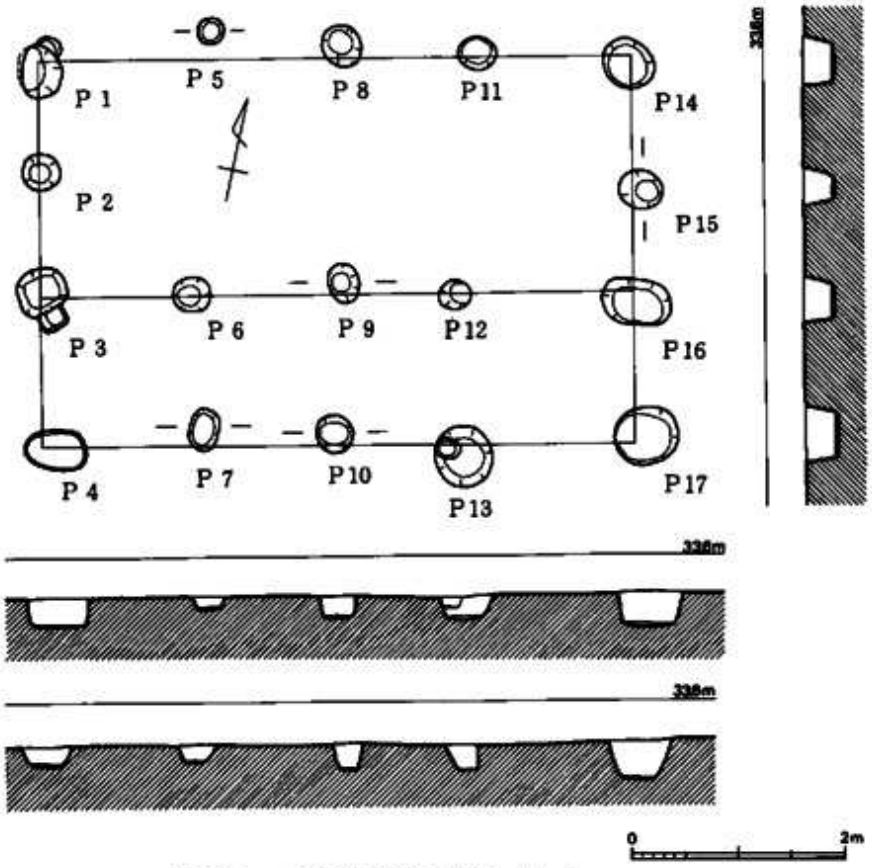
第27図　2号掘立柱建物実測図（1/60）

第2表　2号掘立柱建物計測表（単位cm）

梁間柱間			梁間間		桁行柱間			桁行間	
P1−P2 90	P2−P3 140	P3−P4 120	P1−P4 350	P5−P6 360	P1−P5 150	P5−P7 160	P7−P9 150	P1−P9 460	P2−P10 465
P9−P10 115	P10−P11 125	P11−P12 120	P9−P12 360	P7−P8 370	P4−P6 120	P6−P8 140	P8−P12 200	P4−P12 465	P3−P11 470

3号掘立柱建物（図版10−(2)，第28図）

2号建物に隣接して検出した建物で2号に対し主軸を76°E方向に振る。2間×4間の建物に南側の桁行には廂をとりつけている。P_5，P_7，P_9，P_{10}の柱穴は主軸からずれている。柱穴の深さはP_1−28，P_2−15cm，P_3−16cm，P_4−24cm，P_5−10cm，P_6−15cm，P_7−10cm，P_8−35cm，P_9−23cm，P_{10}−19cm，P_{11}−27cm，P_{12}−22cm，P_{13}−9cm，P_{14}−28cm，P_{15}−29cm，P_{16}−26cm，P_{17}−30cmを測る。P_{16}からは1号土壙出土の高坏と同タイプの土器が出土しており，柱の裏込め内の土器と考えられ1号土壙よりも新しいことが判る。主軸方位はN87°Eを示す。



第28図　3号掘立柱建物実測図（1/60）

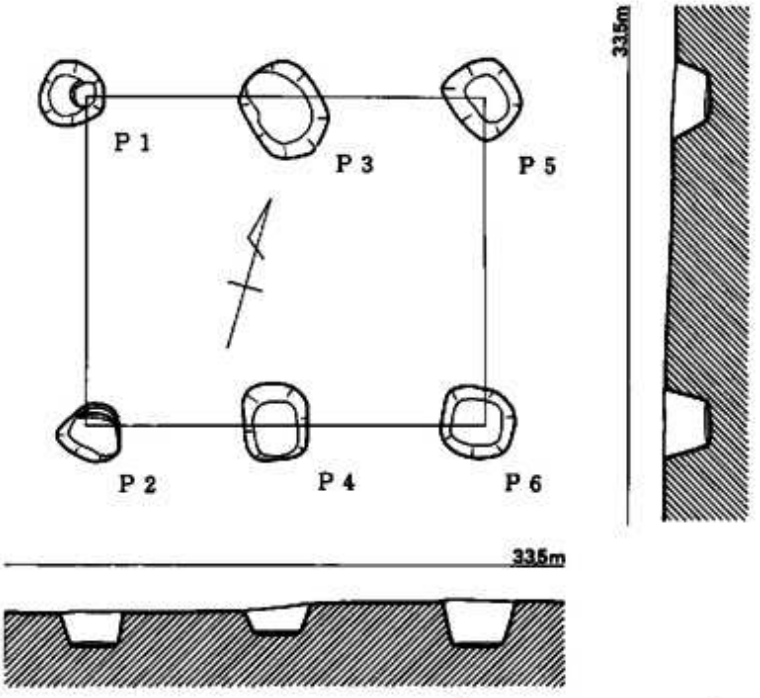
第3表　3号掘立柱建物計測表（単位cm）

梁間柱間				梁間間		桁行柱間				桁行間	
P1−P2 100	P2−P3 110	P3−P4 150	P5−P6 250	P1−P4 365	P5−P7 370	P1−P5 170	P5−P8 120	P8−P11 130	P11−P14 140	P1−P14 560	P2−P15 570
P6−P7 130	P8−P9 225	P9−P10 140	P11−P12 230	P8−P10 370	P11−P13 370	P3−P6 140	P6−P9 140	P9−P12 110	P12−P16 165	P3−P16 560	
P12−P13 145	P14−P15 120	P15−P16 110	P16−P17 120	P14−P17 350	——	P4−P7 140	P7−P10 120	P10−P13 110	P13−P14 180	P4−P17 550	

4号掘立柱建物（図版11−(1)、第29図）

3号周溝状遺構を切って建てられた1間×2間の均整のとれた掘立柱建物である。2号建物と主軸が直行するが，同時期との確証はない。柱穴の深さはP1−20cm，P2−24cm，P3−17cm，P4−16cm，P5−25cm，P6−32cmを測り，隅柱が桁行中央柱に比べて深い。主軸方位はN73°

Wを示す。柱穴からの出土遺物は皆無である。



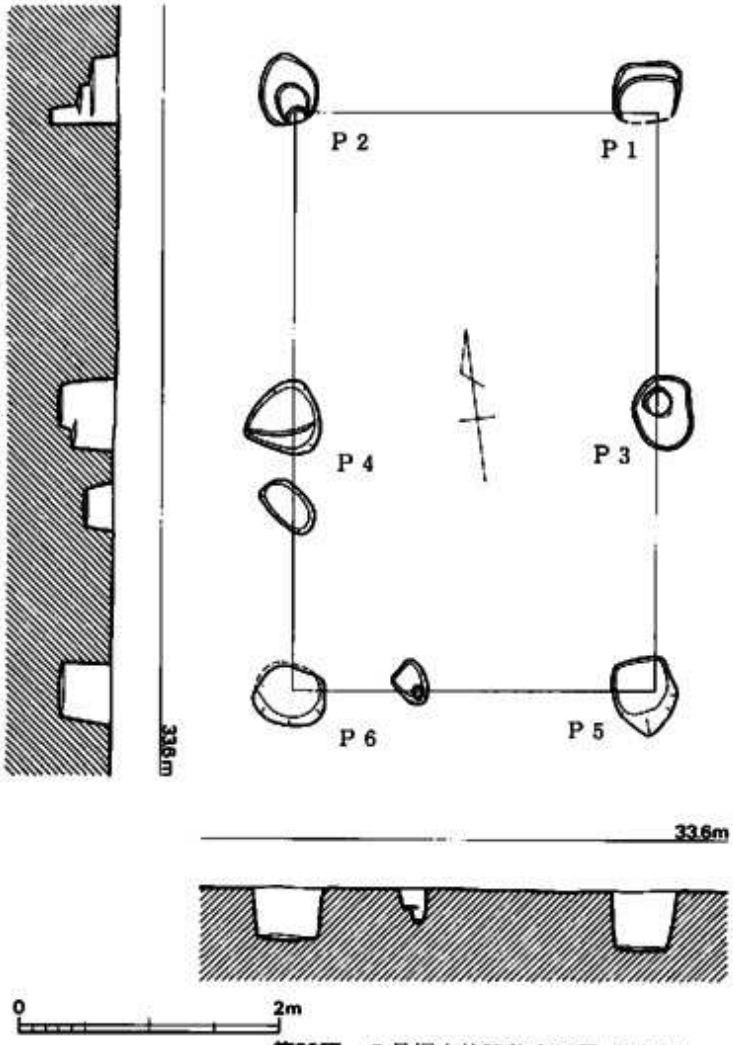
第29図　4号掘立柱建物実測図（1/60）　0　2m

第4表　4号掘立柱建物計測表(単位cm)

梁間間		桁行柱間		桁行間
P1−P2	P3−P4	P1−P3	P3−P5	P1−P5
260	240	150	155	310
	P5−P6	P2−P4	P4−P6	P2−P6
	245	140	155	295

5号掘立柱建物(図版11−(2)、第30図)

6号建物と重複しているが、柱穴の切り合いがないため、新旧関係は明らかでない。1間×2間の整った建物である。柱穴の深さはP_1−50cm、P_2−52cm、P_3−45cm、P_4−42cm、P_5−46cm、P_6−40cmを測り、P_1、P_2の隅柱は深く掘られている。柱穴からは弥生時代後期後半の土器と古式土師器の小片（図示不可能）が出土しており、建物の上限期が古墳時代前期頃であることが判る。主軸方位はN80°Eを示す。



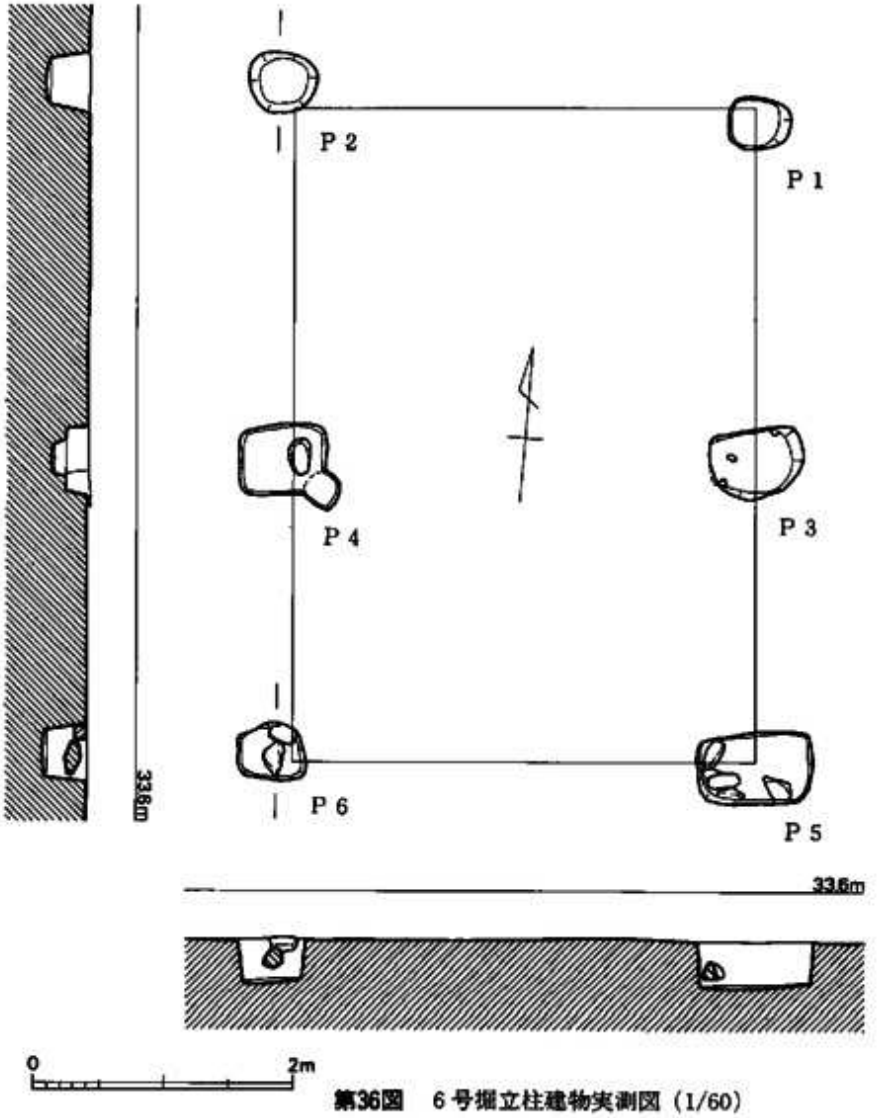
第30図　5号掘立柱建物実測図（1/60）

第5表　5号掘立柱建物計測表（単位cm）

梁間間		桁行柱間		桁行間
P1−P2 270	P3−P4 280	P1−P3 235	P3−P5 225	P1−P5 450
	P5−P6 270	P2−P4 230	P4−P6 210	P2−P6 445

6号掘立柱建物（図版12−(1)，第31図）

3号周溝状遺構，5号建物と重複する1間×2間の掘立柱建物で，3号周溝よりは新しい。



第36図　6号掘立柱建物実測図（1/60）

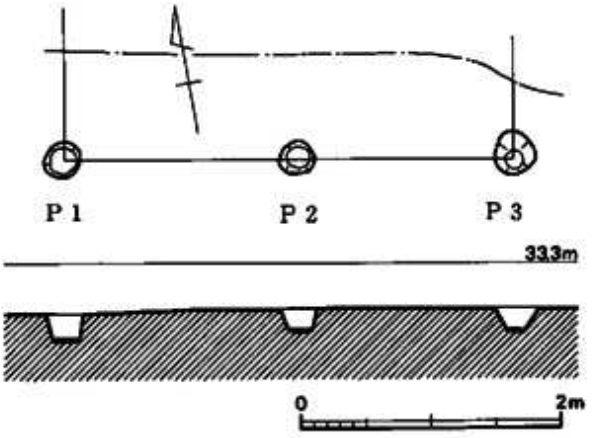
第6表　6号掘立柱建物計測表(単位cm)

梁間間		桁行柱間		桁行間
P1−P2 365	P3−P4 350	P1−P3 260	P3−P5 240	P1−P5 500
	P5−P6 360	P2−P4 290	P4−P6 235	P2−P6 525

P_3～P_6は柱穴の掘り方が方形乃至長方形を呈し，P_5，P_6は柱を固定する目的で河原礫を裏込めに使用している。柱穴の深さはP_1－28cm，P_2－33cm，P_3－59cm，P_4－27cm，P_5－35cm，P_6－35cmを測り，P_3を特に深く掘っている。P_4，P_6からは5号建物と同様弥生時代後期の土器と古式土師器の小片が出土している。主軸方位はN 5°Wを示す。

7号掘立柱建物(第32図)

大溝の東側で検出した建物であるが北側は水路で削平されている。検出した3個の柱穴は桁，梁の遠断はでき兼るが，調査区内で梁間が2間の建物が無いことから1間×2間の建物と判断した方が妥当であろう。柱穴の深さはP_1－21cm，P_2－17cm，P_3－18cmを測る。P_1，P_2からは土器の小片が出土したが，時期の判別はできない。主軸方位は確認した柱穴間を桁行とすればN70°Wを示す。



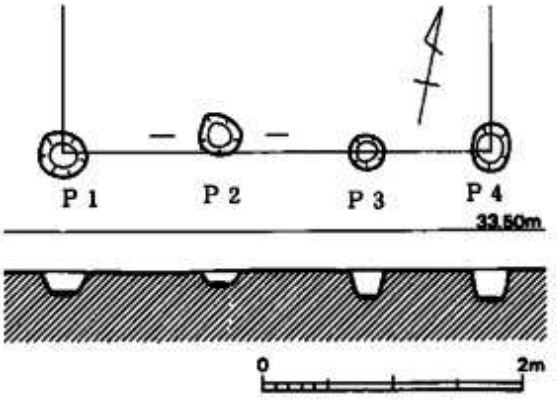
第32図　7号掘立柱建物実測図（1/60）

第7表 7号掘立柱建物計測表(単位cm)

桁行柱間		桁行間
P1－P2	P2－P3	P1－P3
180	165	345

8号掘立柱建物(第33図)

5号竪穴住居跡と切り合い関係にある建物であるが，完掘に至っていないため全容は明らかではない。確認した柱穴は梁間と考えられ，1号及び2号建物と同タイプの建物であろう。このように考えると建物が竪穴住居よりも新しくなる。P_2は梁間の主軸線からずれ，柱穴の深さはP_1－18cm，P_2－12cm，P_3－22cm，P_4－25cmを測る。柱穴からの出土遺物はない。主軸方位はN11°Wを示す。



第33図　8号掘立柱建物実測図（1/60）

第8表　8号掘立柱建物計測表(単位cm)

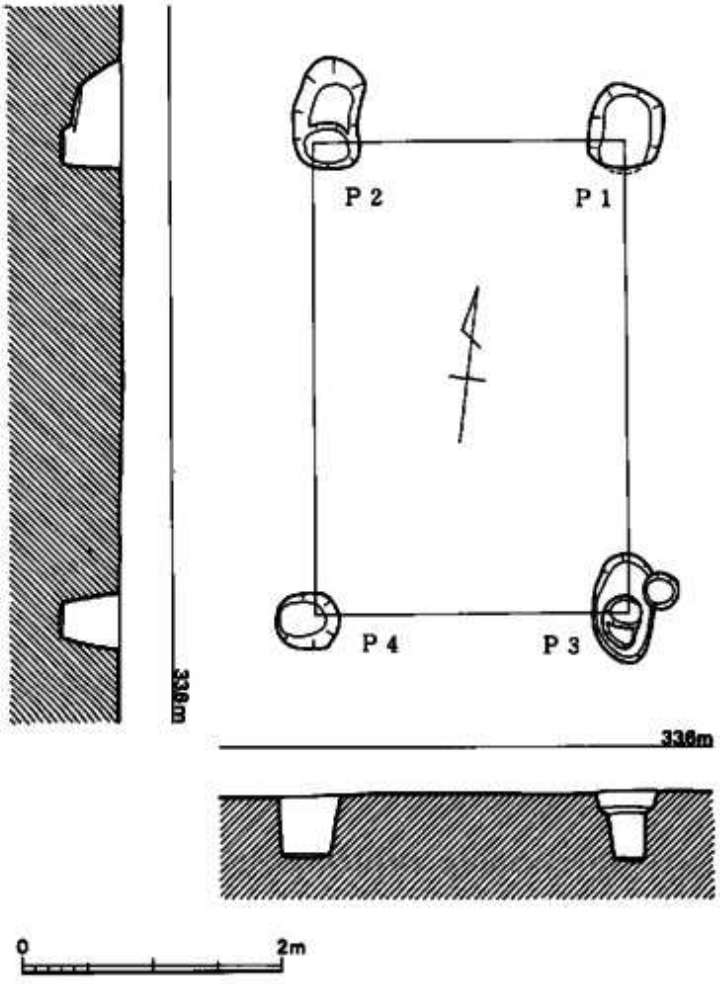
梁間柱間			梁間間
P1−P2 120	P2−P3 115	P3−P4 95	P1−P4 330

9号掘立柱建物(第34図)

1号周溝を切り3号建物に隣接して建てられた1間×1間の掘立柱建物である。桁行中央柱の柱穴は見当らないが、平面形態は5号・6号建物と同タイプである。柱穴の深さはP_1−52cm, P_2−46cm, P_3−55cm, P_4−45cmを測る。P_3・P_4からは弥生時代後期の土器片が出土しているが、当該建物の時期決定の資料にはなり得ない。主軸方位はN 7°Wを示し、1号・6号建物と主軸を略同一に持つ。

第9表 9号掘立柱建物計測表
(単位cm)

梁間間	桁行間
P1−P2 230	P1−P3 370
P3−P4 250	P2−P4 370

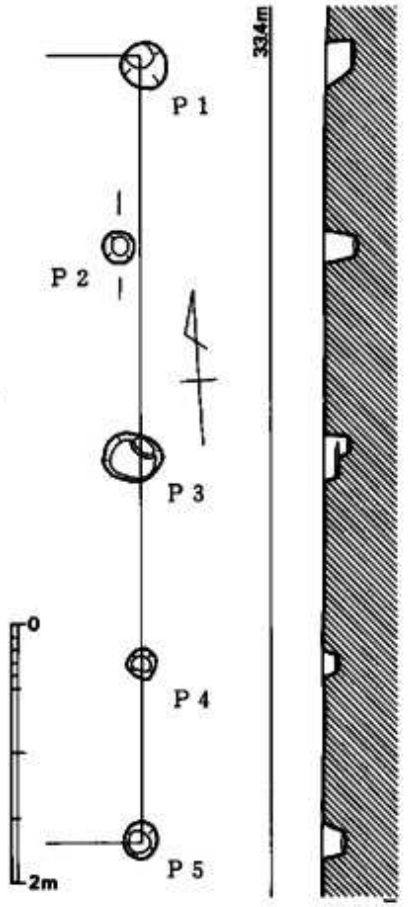


第34図　9号掘立柱建物実測図 (1/60)

10号掘立柱建物(第35図)

大溝の縁に沿って柱穴が並ぶが、柵列としては疑問が残ることから建物とした。検出した

柱穴列は桁行と考えられるが全容は明らかでない。柱穴の深さはP1－20cm，P2－24cm，P3－18cm，P4－11cm，P5－17cmを測る。主軸方位はN 3°50″ Eを示す。

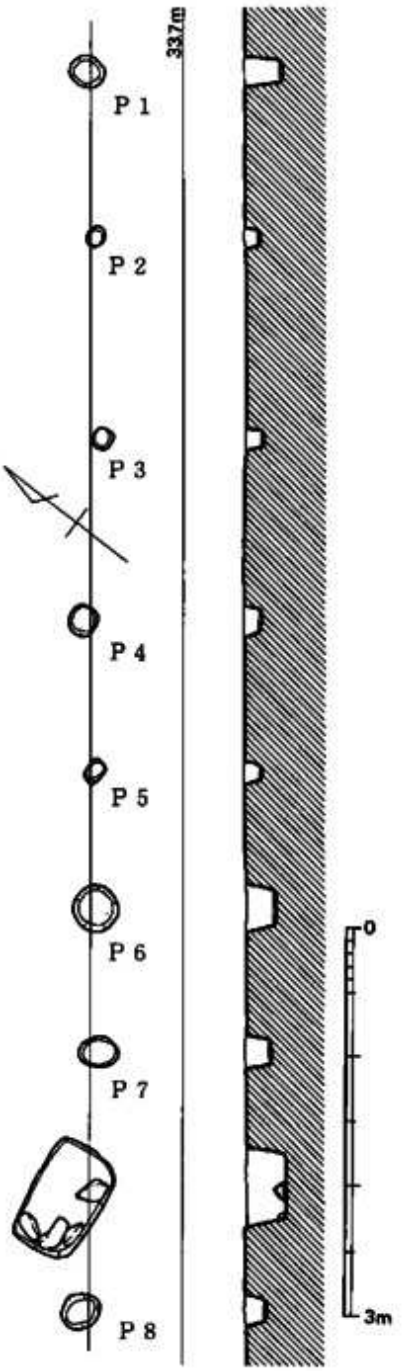


第35図　10号掘立柱建物実測図（1/60）

第10表　10号掘立柱建物計測表(単位cm)

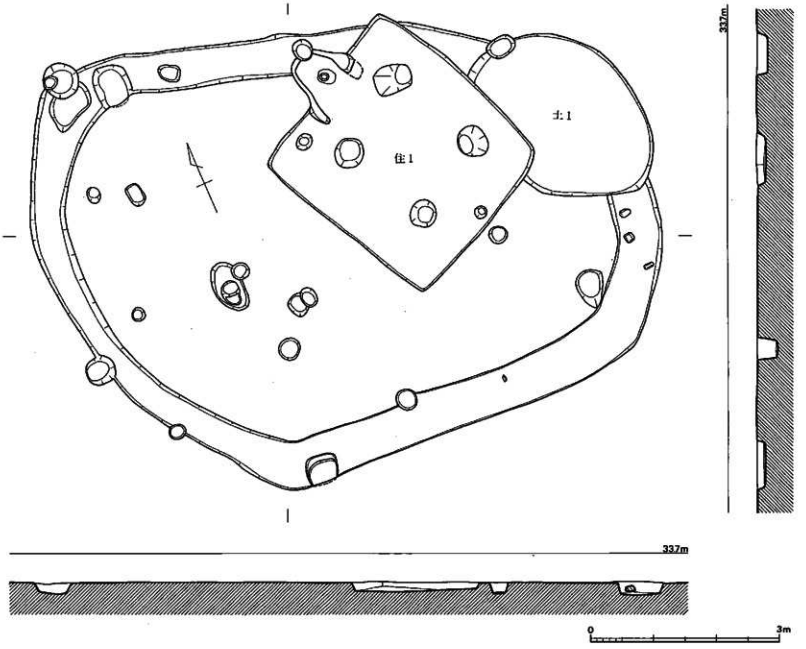
桁	行	柱	間	桁行間
P1−P2 150	P2−P3 155	P3−P4 170	P4−P5 135	P1−P5 610

柵列状遺構（第36図）



第36図　柵列状遺構実測図（1/60）

3条の溝状遺構の北東側に溝と平行して延びる柵列状の遺構であるが，両端が完結しており，柵としては短い。6号建物と一部重複するが、新旧



第37図　1号周溝状遺構実測図（1/60）

関係は不明である。柵列自体は溝に伴う可能性も否定できない。柱穴の深さはP_1-30cm, P_2-12cm, P_3-14cm、P_4-14cm, P_5-14cm, P_6-23cm, P_7-20cm, P_8-17cmを測る。主軸方位はN52°50′Eを示す

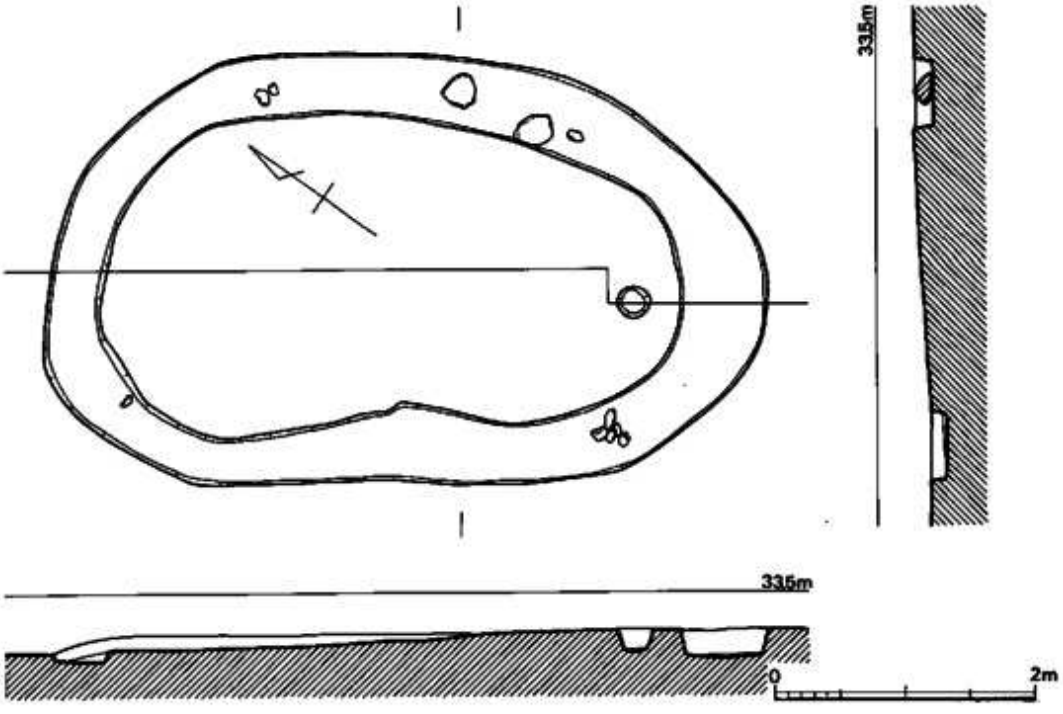
第11表　柵列状遺構計測表(単位cm)

P1−P2	P2−P3	P3−P4	P4−P5	P5−P6	P6−P7	P7−P8
130	155	140	115	105	110	200

(3)　周溝状遺構

1号周溝状遺構（図版12−(2)、第37図）

調査したE地区内で最大の規模を持ち不整楕円形のプランを有す周溝状遺構である。重複する全ての遺構に切られている。規模は長軸10m強、短軸7.0m前後である。周溝の幅は60cm前後、深さは平均して20cm未満と浅く著しく削平を受けていると思われる。溝の断面は逆台



第38図　2号周溝状遺構実測図（1/60）

形状を呈する。周溝内側の平坦面には数個の柱穴がみられ，規則的なまとまりはないものの何等かの構造物を区画する溝とも推考できるが詳細は明らかでない。面積は周溝内側で71.7㎡，周溝を含めると79.5㎡を測る。

出土遺物は、周溝の床面直上からは大きい河原礫と弥生時代後期の甕形土器（内外面とも荒いハケ仕上げ）の小片が僅かに出土しているが，まとまった遺物は無い。

2号周溝状遺構（図版13－(1)，第38図）

3号竪穴住居跡の傍で検出した周溝状遺構で平面形態が楕円形を呈する。規模は長軸5.54m，短軸3.25m，周溝の断面は逆台形をなし，深さは20cm前後で北側は削平され浅い。周溝内側の平坦部には柱穴が1個みられるのみで、他に周溝に伴う遺構はない。周溝の内側の面積は8.8㎡，周溝を含むと15.4㎡である。

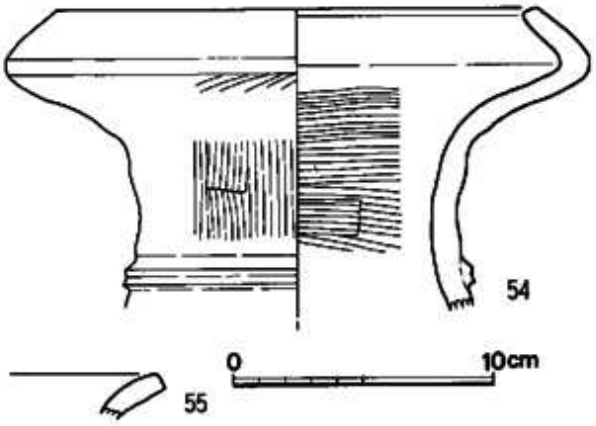
周溝内からは床面に接して河原礫と弥生時代後期後半の壺と甕片が出土している。

出土遺物

土　器（第39図）

54は複合口縁壺で復原実測である。擬口縁は大きく外反し，鋭く内寄する口縁を持つ。頸部には「M」字状の凸帯を付す。調整は横ナデと荒いハケで仕上げる。胎土は砂粒やや多く，金雲母を含む。焼成は頗る堅固で淡灰褐色を呈す。

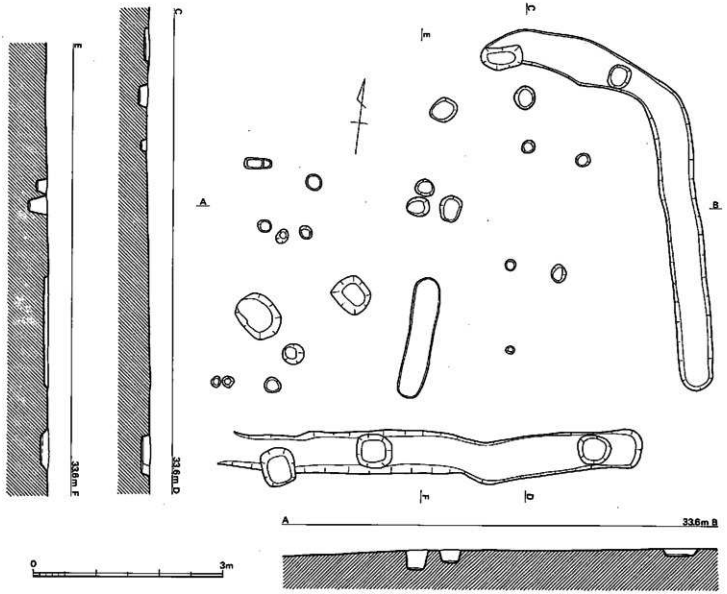
55は甕の口縁部で外面に煤が付着する。淡茶褐色を呈する。



第39図　2号周溝状遺構出土土器実測図（1/3）

3号周溝状遺構（図版13－(2)，第40図）

1号周溝状遺構の西側に隣接し，平面形態が方形を呈すると推察されるが，北側の一部と西側の周溝を欠く。しかも1号周溝状遺構とは1.0mしか離れておらず，1号と3号には時期差が考えられる。規模は現存で南北軸7.10mを測る。南西隅には陸橋を設けている。周溝内

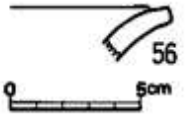


第40図　3号周溝状遺構実測図（1/60）

側の平担部には柱穴と長軸1.9m，短軸40cm，深さ5cmの長楕円形の土壙があるが，周溝墓と認定するには疑問が残る。周溝の幅は65cm前後を測り，深さは10cm前後と浅い。

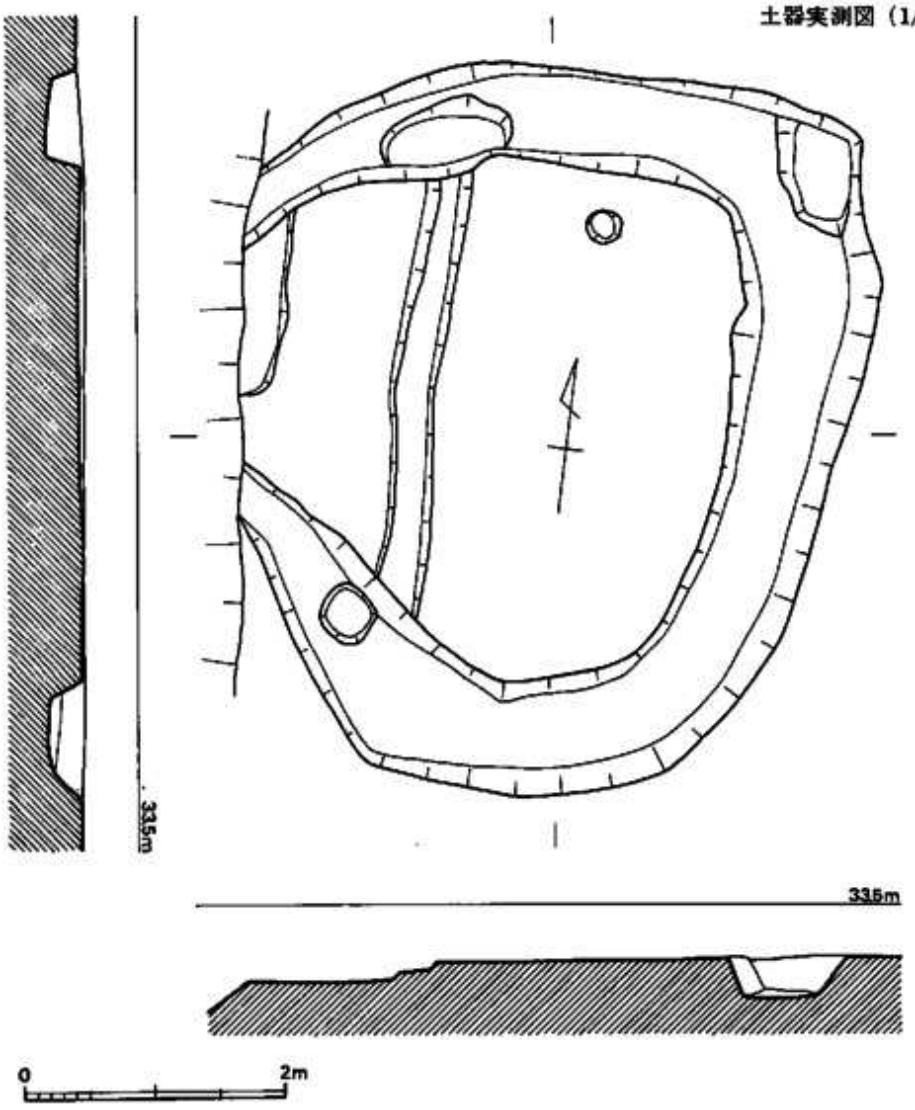
周溝内からは弥生時代後期の甕の口縁部が出土している。

56の甕は砂粒やや多く細粒金雲母を含む。焼成も頗る堅固で淡茶褐色を呈する。（第41図参照）。



第41図　3号周溝状遺構出土土器実測図（1/3）

4号周溝状遺構（図版14－(1)，第42図）



第42図　4号周溝状遺構実測図（1/60）

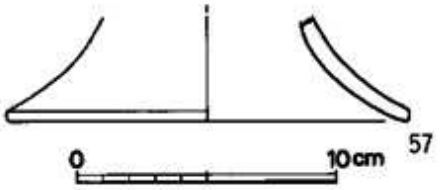
中世の大溝に西側の一部を削平された不整円形の周溝状遺構である。南北軸は5.6m，溝の幅70～90cm前後，深さは25～30cm程で北側周溝内で２個の浅い掘り込みがある。周溝内側の平担部には２号周溝同様１個の柱穴がみられる。平担部の面積は12.4m²，周溝を含めると24m²を測る。

周溝内からの遺物は皆無であるが，設営時期は他の周溝遺構と同様弥生時代後期後半頃であろう。

５号周溝状遺構（付図）

溝３に切られた周溝状遺構で弧状に残っているのみで全容は不明である。周溝の幅は45cm，深さ７cmと浅く著しく削平されていることが判る。

周溝内からは他と同様円礫と弥生時代後期と思われる57の高坏が出土している（第43図参照）。



第43図　５号周溝状遺構出土土器実測図（1/3）

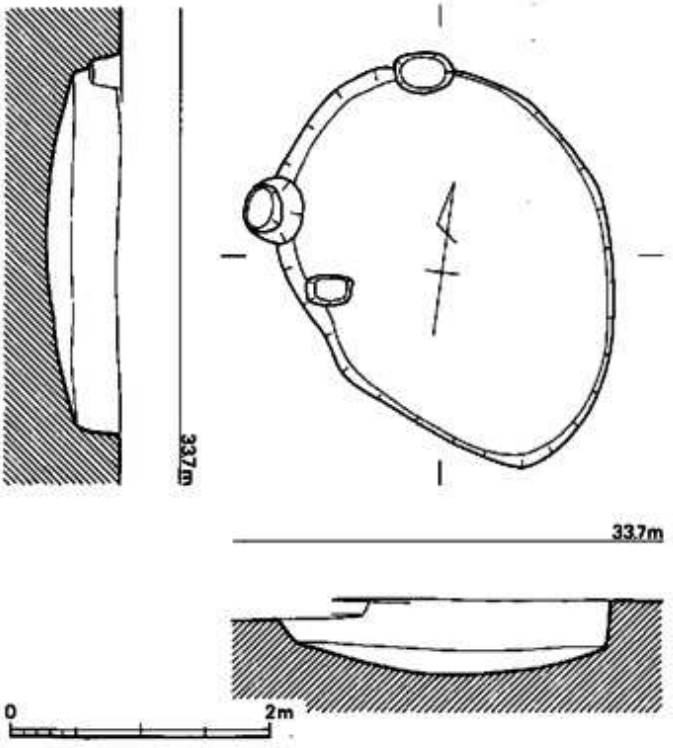
(4)　土　壙

１号土壙

（図版12－(2)，第44図）

１号周溝を切り１号住居と２号建物に切られた平面形態が楕円形を呈する土壙である。底面は緩斜をなしレンズ状を呈する。規模は長軸3.30m，短軸2.40m，深さ54cm前後を測る。覆土は黒褐色土が底面近くまで自然堆積状態で埋まっていた。

出土遺物は土師器の高坏片があり，溝３出土の土師器の高坏と同タイプで共伴する須恵器坏身から６世紀中頃であろう。

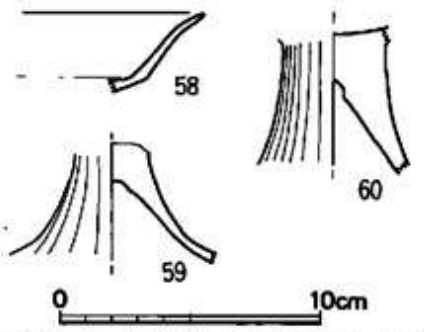


第44図　１号土壙実測図（1/60）

出土遺物

土　器（第45図）

図示可能な土師質の高坏が３点あるが，58と59は胎土・焼成とも酷似し同一個体である。坏部は明瞭な屈折を持ち，口縁部付近で更に外反する。薄手づくりで胎土は頗る緻密である。脚部は両者とも縦ヘラ削りで仕上げ，59は大きく開く。



第45図　１号土壙出土土器実測図（1/3）

２号土壙（付図）

２号竪穴住居跡の南西に隣接する平面形態が円形を呈する土壙である。規模は1.15m，深さ33cmを測る。出土遺物は皆無である。

３号土壙（図版15－(2)）

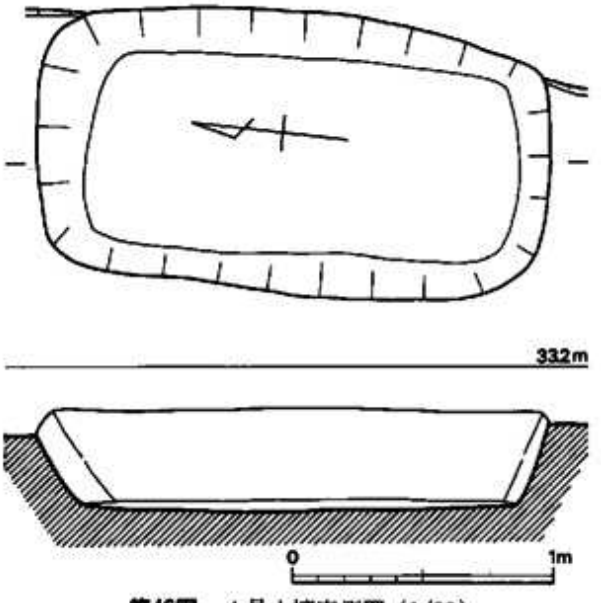
溝２に切られた長楕円形を呈する土壙である。両側の小口部のみが遺存し，北側は有段をなす。規模は長軸が計測でき2.85m，深さ30cm前後である。

出土遺物は軽石（第57図）が１点あるが，溝２から小田氏編年の須恵Ⅳ型式が出土しており，６世紀後半以前であろう。

４号土壙

（図版14－(2)・15－(1)，第46図）

大溝の西側に接して検出した胴張り隅円長方形のプランを有す土壙である。規模は長軸1.98m，短軸1.06m，深さ40cm弱である。土壙内は検出面から黒褐色土と河原礫が混存して埋っており，下層は河原礫のみを集石していた。中世墓の可能性があるが，墓と判断する資料は見当らない。



第46図　４号土壙実測図（1/30）

(5) 溝状遺構（付図）

調査区の南東隅で３条の溝状遺構を検出したが，調査したのは一部である。３条とも略平行に南西から北東方向に延びる。溝１は幅1.0m，深さ27cm前後，溝２は幅1.7m，深さ45m，溝3は幅1.2m，深さ30cmを測る。当該地区の周辺は条里の残りが良好であるが，３条の溝とも条里制の区割と無関係に延びる。全容は次年度の東側の調査時に判明することを期し，詳は次年度の調査に譲る。

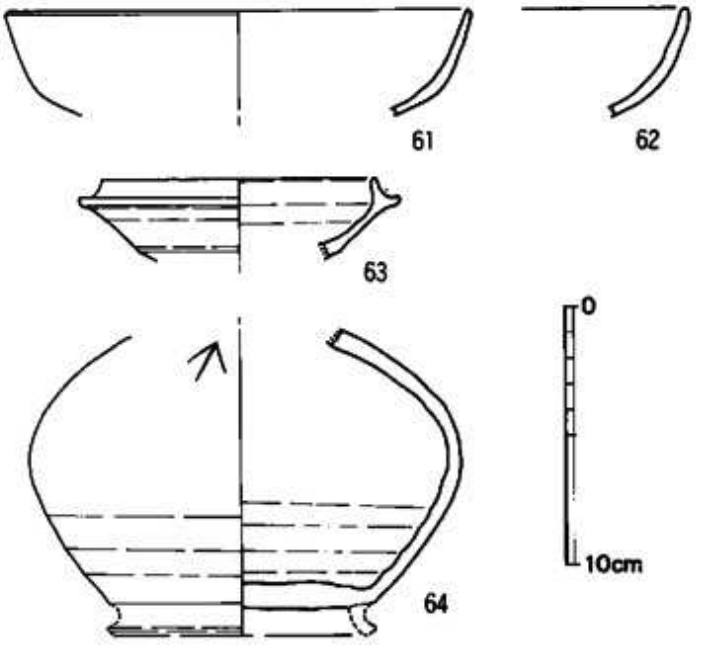
出土遺物は溝１では皆無，溝２からは土師質の埦，須恵質の坏身・高台付長頸壺が出土し，溝３は土師質の甕・高坏，須恵質の坏身片がある。出土土器から，溝２は古相の坏身と新相の高台付長頸壺があり，時期的な幅があることから，後者の土器を採用し７世紀中頃から後半に比定され，溝３は坏身から６世紀中頃の所産である。

出土遺物

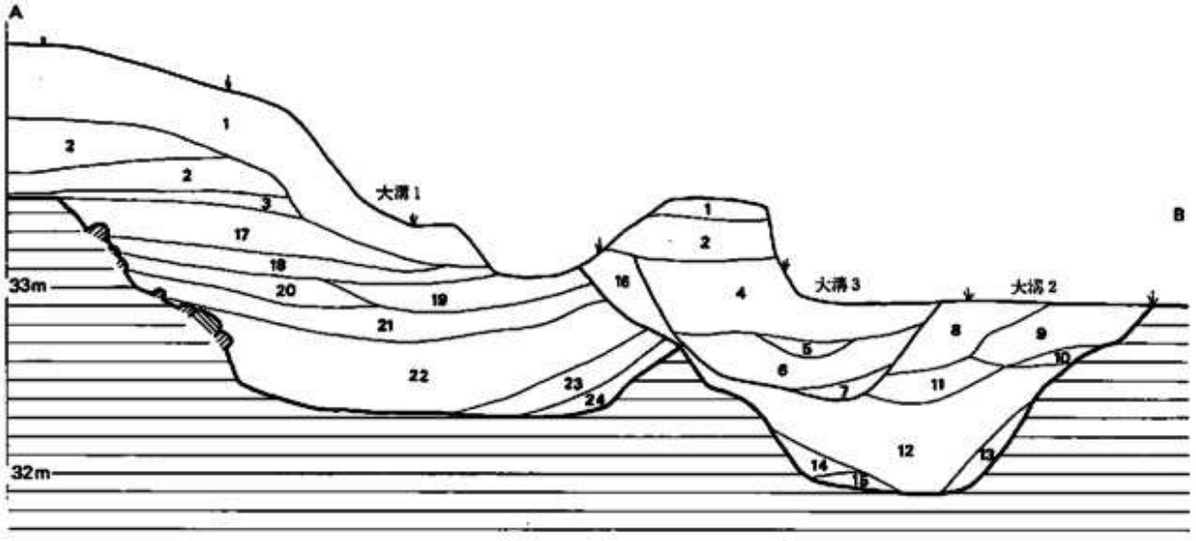
溝２の土器（第47図）

土師質土器には61・62の埦がある，前者の復原口径は17.9。cmを測る。両者とも胎土は頗る緻密で焼成も非常に堅固である。淡赤褐色を呈する。

須恵質土器は63･64がある。前者は口径10.5cmを測る坏身で，調整は横ナデと回転ヘラ削りで仕上げる。後者は肩の張る長頸壺で肩の稜は認められない。底部は高台が剝落した痕跡が残る。肩部には「个」状のヘラ記号が２個所に刻まれる。調整は胴部が横ナデ，胴下半は回転ヘラ削りで仕上げ，内面は横にナデている。暗灰褐色の色調を持つ。

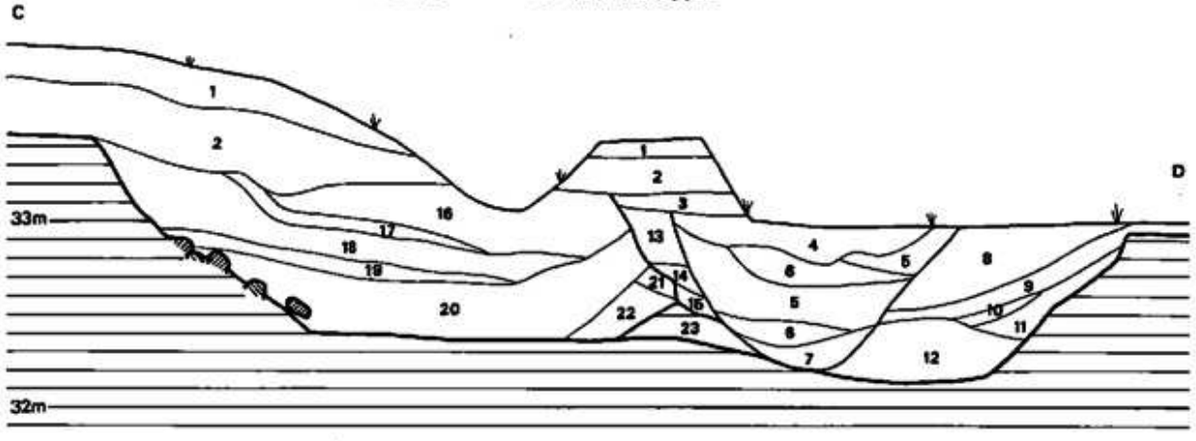


第47図　溝２出土土器実測図（1/3）



1．表土
2．耕作土
3．床土
4．淡灰黄褐色砂質土
5．暗黄褐色砂質土
6．暗灰褐色砂質土
7．明灰褐色粘質土
8．淡灰褐色粘質土
9．淡灰褐色砂質土
10．明灰褐色砂質土
11．暗灰褐色粘質土
12．7と同じ
13．11と同じ
14．砂層
15．9と同じ
16．明灰褐色粘質土
17．暗灰褐色砂質土
18．淡灰褐色砂質土
19．17と同じ
20．淡灰黄褐色砂質土
21．淡灰褐色砂質土
22．明灰褐色粘質土
23．暗灰褐色砂質土
24．淡茶褐色砂質土

0　2m

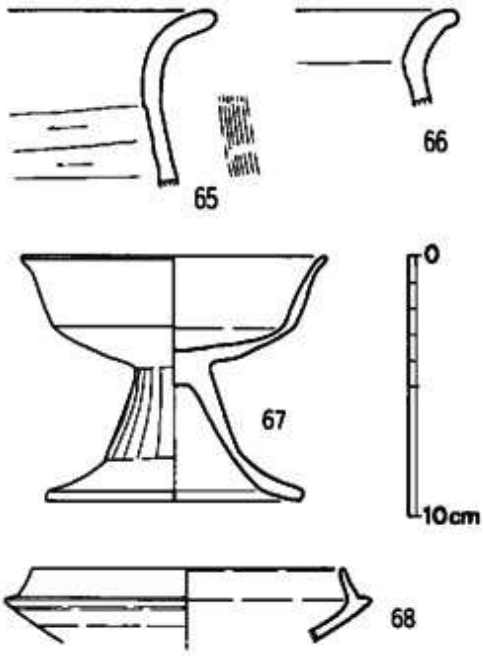


1．表　土
2．耕作土
3．床　土
4．茶褐色砂質土
5．暗灰褐色砂質土
6．暗灰褐色粘質土
7．淡灰褐色粘質土
8．明茶褐色粘質土
9．淡灰褐色砂質土
10．淡灰褐色粘質土
11．暗灰褐色粘質土
12．明灰褐色粘質土
13．8と同じ
14．明灰褐色砂質土
15．12と同じ
16．淡茶褐色砂質土
17．明茶褐色砂質土
18．灰黄褐色砂質土
19．淡灰褐色粘質土
20．12と同じ
21．淡茶褐色砂質土
22．14と同じ
23．暗灰褐色砂質土

第49図　大溝南・北土層断面図（1/40）

溝3の土器（第48図）

土師質土器には65～67がある。65・66は甕形土器片で，65は薄手の器壁を持ち大きく外反する口縁部を有す。頸部内面は稜をなさない。口縁部内外面は横ナデ，体部は荒いハケが残り，内面は左廻りのヘラ削りで仕上げる。66は小型の甕で，２号竪穴住居跡出土の同系譜の甕に先行する形態をなす。短く反り気味に外反する口縁部に内面の稜はヘラで削ることで明瞭に残る。67は１号土壙の54・55と同型式の高坏の完形品である。坏部の屈折は明瞭で口縁部は更に外反する。脚は柱状部から広がり，裾部で屈折させ大きく開く。柱状部は縦ヘラ削りを施す。胎土・焼成とも１号土壙出土の高坏に酷似する。



第48図　溝３出土土器実測図（1/3）

須恵質土器は68の坏身片がある。復原口径12cmを測る。胎土は密で精選され，灰褐色の色調を有す。

(6)　大　溝（図版16－(1)・(2)，第49・50図）

南北方向に水路として使用されている１条の浅い溝がある。それを表土と共に剝いで除去すると，淡い灰褐色粘土に若干青色粘土がブロック状に落ち込んだ幅５ｍ前後，長さ12ｍの落ち込みが検出された。２本の断面を残し発掘を進めた結果，現在の水路を含めて４本の溝を検出することができた。第50図の断面図で示す様に大溝１は大溝２に切られ，大溝２が埋った時点で半分の幅に縮少した水路を作り直している。それが完全に埋った段階に現地表面に出ていた水路に変化している状態を示している。

大溝１は底面で最大幅が２ｍ前後，地山からの深さ1.2ｍを計測する。西側には土止めのための河原礫を詰めて利用している。その詰め方は規則性が認められない。

大溝２は底面で最大幅が１ｍ，地山からの深さ１ｍを測り，底面は大溝１より40cmほど下位となっている。

大溝３は大溝２が埋った段階で新たに設定しなおした状況が理解できる。

大溝に限らず現在の水路の溝までが発掘区を南北方向に横断するもので，一段高い西側の近世墓がある際を限る様に，全長12ｍ，主軸をN1°Wにとっており，略条里の南北方向に合

数する。

大溝は時間的に，古いものが大溝1→大溝2へ，西から東へと移動して，大溝2→大溝3が東から西へと移動し，完全に埋った段階に現在の水路溝へ移動している。

出土遺物は，大溝2を中心として歴史時代の鎌倉時代に位置付けられる青・白磁の輸入陶磁器や土師器等が出土している。

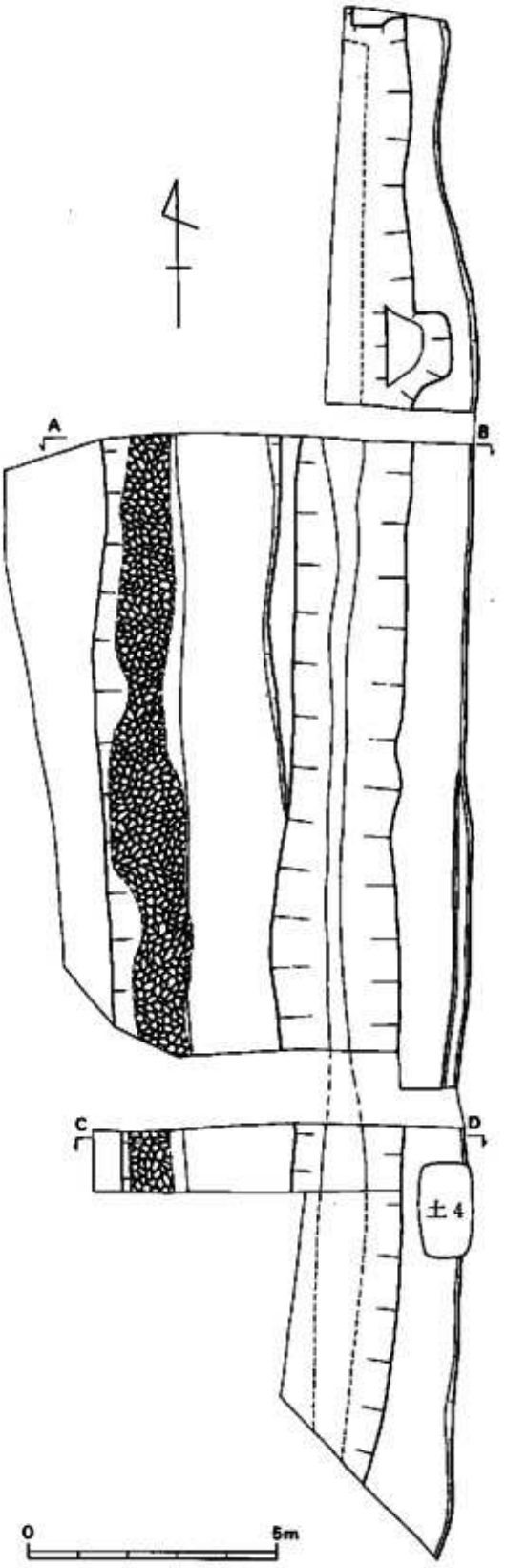
このことから，大溝1は完全に埋った後につくりかえており，大溝2が出土遺物から13世紀頃に流れていたと考えるならば，大溝1は大溝2より早い時期であり，平安時代後半にはつくられていたものと考えられ，それより遡る可能性がある。

出土遺物

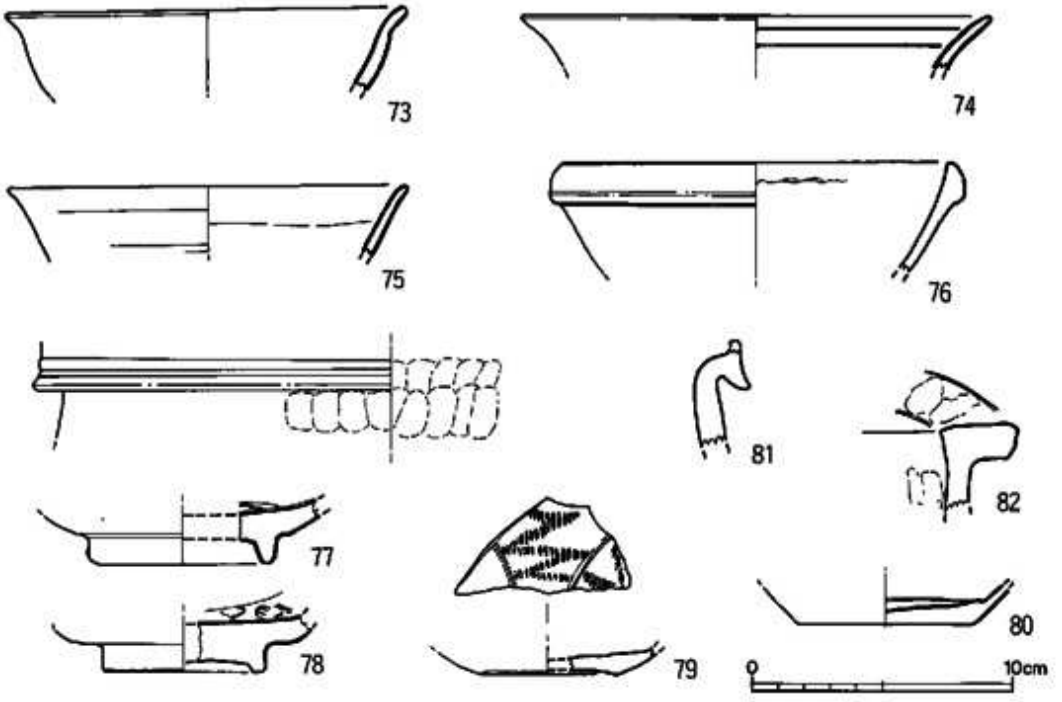
大溝2を中心に出土した遺物はポリ袋で10袋分で非常に少かった。中世期の青・白磁と土師器類であった。

青白磁（第51図）

73～76は口縁部の破片で，77・78は底部破片である。73・74は青磁の椀で，釉調は草青色を呈し，胎土にはカオリンを使用したもので焼成は良好で釉の発色も良好である。75・76は白磁で，76は口縁部が玉縁上の耳付のものに特徴をもつものである。両者とも胎土に細粒砂を含み精練された粘土を使用し，焼成は良好である。77・78は椀の高台部分で竜泉窯系の青磁で見込みに花文様を持っている。77の釉は高台内面まで施釉されている。78は高台内面にはケズリを施して施釉されていない。79は皿形のも



第50図　大溝実測図（1/150）



第51図　大溝出土遺物実測図（1/3）

ので，底が若干上げ底気味で，見込みにはいわゆる珠光青磁にみられるネコガキがみられ，胎土に細粒砂を含み，漉し方が悪く釉の発色もあまり良好なものとはいえない。80は平底を呈する青白磁で，白磁に薄い青の光沢をもつものである。釉のかかりぐあいは底部を除いてほとんど全面に施釉されている。

甕（第51図）

81はみよりん口縁を呈する。常滑の甕で，胎土に細粒砂を含み長石粒がはいり，色調は赤褐色を呈し，焼成は良好でいわゆるヤキシメである。内面は指で押えられ，土灰が自然釉として草色の発色をしている。国内の他の地域からの交流がみられる興味を引く遺物である。

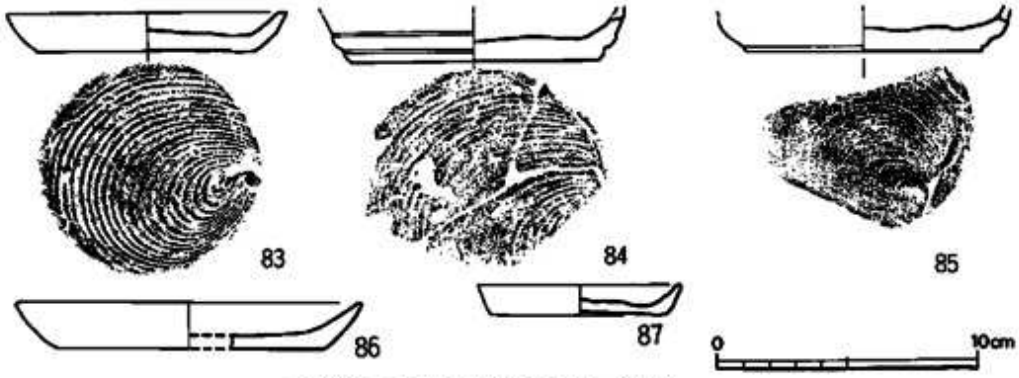
土　鍋（第51図）

82は口縁部片で，表面に煤が付着しており，内面には指痕があり，口縁部にも明瞭に押えつけた指の痕が残っている。胎土に細粒砂を含み，焼成は良好である。色調は赤味を帯びた褐色を呈する。

土師器（第52図）

小皿と坏とに分類できる。用途としては，日用雑器として使用され一部には灯明皿として使用されていた。

小皿（83・86・87）底部に糸切りを有するもので，86・87にも磨滅はしているが糸切りの



第52図　大溝出土遺物実測図（1/3）

切り離し痕が残っている。色調は灰褐色から黄褐色を呈し，焼成は良好で胎土には少量の砂粒がみられる。83は灯明皿として使用されたもので，煤の付着が内面の見込みの部分に認められる。

坏（84・85）底部には糸切り痕がみられる。色調は灰褐色で，焼成は軟質で良好である。胎土に小砂を含んでいる。84の体部下半には２条の沈線を有するものである。

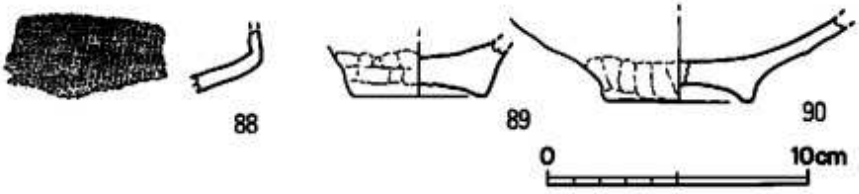
以上の遺物から，太宰府史跡での研究成果と比較すると，歴史時代の鎌倉期の遺物で，時期的には12～14世紀までの範囲に相当する。また中国製の輸入陶磁器の１群と土師器そして，興味を引く常滑の陶器を検出したことは，他の地域との交流のあり方に問題を投げかけるものである。今後の課題になろう。

(7)　その他の遺物

主要な遺構にともなう遺物ではなく，柱穴からの出土或は流れ込みの状態で出土したものを取上げて説明する。

縄文土器（第53図）

散発的に地山に嵌入した状態で出土しているもので，89・90は底部破片で胎土に細粒砂を含み，色調は黒褐色を呈し焼成は良好である。底部は上げ底をなし，調整は器壁の荒がひどいため，指痕のみが明確に捉えられる。時期的には縄文晩期後半頃に比定できよう。88は縄



第53図　その他の遺物実測図（縄文土器）（1/3）

文晩期の浅鉢の胴部破片である。胎土に細粒砂を含み色調は黒褐色を呈し，焼成は良好で器面の調整に磨キがかけられている。88は５号周溝中より出土し，89は３号周溝中より、90は１号周溝中からの出土である。

石　鏃（第54図）

91は８号住居跡の表土から出土したもので，打製石鏃である。石質は姫島産の黒曜石で，押圧剝離によってつくられている。丁寧な仕上げである。

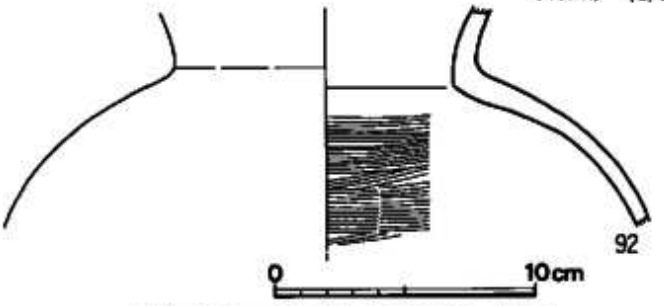
第54図　その他の遺物実測図（石鏃）（1/2）

弥生土器（第55図）

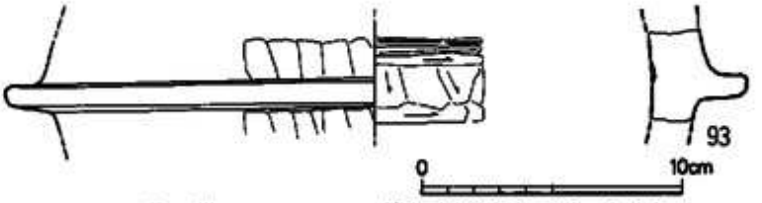
92はNo.７の柱穴から出土した弥生時代後期の壺で口縁部と胴部下半を欠損している。肩から胴部上半にかけての張りは鋭い。調整は内面の荒いハケのみが観察できる。胎土は砂粒多く，金雲母を若干含む。焼成はあまく暗灰褐色を呈す。

石　鍋（第56図）

93はNo.17の柱穴の中より出土したもので，石質は滑石製である。鍔下半には煤が付着している。内面の調整は鍔の位置が上→下へ，他は横位方向に丁寧に仕上げている。表面は上→下へ調整されている。一般的な日用雑器で，水炊用に使用されたものである。時期は中世期のものである。



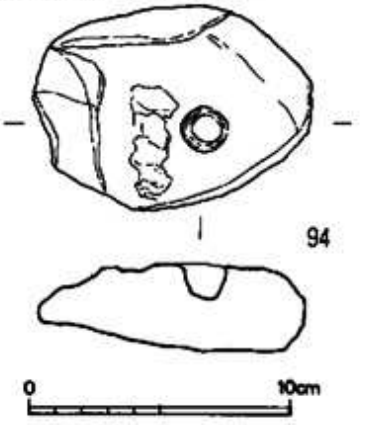
第55図　No.７柱穴出土土器実測図（1/3）



第56図　No.17柱穴出土遺物実測図（石鍋）（1/3）

軽　石（第57図）

94は３号土壙より出土したもので火山岩製で80gである。中央部に穴をあけている。漁具として使用されたものと推測される。



第57図　その他の遺物実測図（1/3）

Ⅲ　総括にかえて

古式土師器についての若干の所見

－北部九州の外来系甕を中心に－

(1)　はじめに

近年の古式土師器研究は出土例の増加と共に細分化と形式設定にすさましいものがあり，特に畿内において著しく進展をみている。北部九州でも最近の調査成果から，僅かな齟齬はあるが，細分化され編年的位置付けが確立しつつある。

昭和54年から調査を継続している塚堂遺跡のＡ～Ｄ地区においても古式土師器の良好な資料が出土しており，筑後川中流域での位置付けがなされると期待しているが，筆者が担当したＥ地区の６号住居跡からも古式土師器の一括資料が得られた。この土器群は北部九州でも古式に認定できる資料で，庄内式(新)から布留(古)式併行期の過渡的様相を示唆する。これを契機として北部九州（主に福岡県内）の当該時期の状況を概観してみたい。

(2)　畿内における形式設定の経過

庄内式土器は田中琢氏の「布留式以前」の論文の中で定義しており，庄内型甕は「細い叩キ技法の採用，底部は平底風の尖り底と丸底，叩キの上からのハケ，内面は頗る丁寧なヘラ削りで器壁を薄くし，口縁部を「く」字状に外反させ端部を上方に摘み上げ，輪づみの痕跡を残す」等の特徴を挙げ，壺は「装飾性の豊かな複合口縁，やや長い口頸部と丸い体部に尖り底を持つ暗褐色のもの，外面をヘラ磨キした厚手の赤褐色の色調を持つ」等の特色を指摘している(註１)。

安達厚三・木下正史氏は飛鳥地域で庄内式から布留式期にかけての好資料を得て位置付けを試みている(註2)。それに依ると藤原宮内裏東外郭地域出土の土器群を庄内式として提示し，「甕Ａ（平底）と甕Ｂ（尖り底）とが伴出し，無秩序に混在することから両者は分離し難い」とする。布留式については坂田寺下層から上ノ井手井戸上層までの変遷過程の中で編年的位置付けを試み，甕Ａの特徴は外反する口縁部に端部が内側に丸く肥厚し，上ノ井手ＳＥ030上層の甕に致っては口縁部が内弯し端部が内傾すると共に体部は長くなる。甕Ｂも長胴化の傾向を示し，小型精製土器三種（小型丸底・鉢・器台）は消失する時期の一群で，須恵器出現

前の土器群とする。

石野博信・関川尚功氏は昭和51年に莫大な土器群を出土した纒向遺跡で庄内式を２形式に細分し(註３)，纒向２式（庄内１式）では口縁部に装飾を施す複合口縁壺が主体で，甕は穂積型（甕Ａ）と庄内型（甕Ｂ）が同数の比率で出土し，３式（庄内２式）では叩キ成形の甕Ｂとハケを多用する甕Ｃが共伴する。甕Ｃは２式に出現し３式に盛行する器形であるという。さらに，庄内型甕を河内型（口縁の外反度は鋭く端部を摘み上げ，右上りの細目の叩キとハケ調整，底部は尖り，茶褐色）と大和型（口縁は外方に直線的に伸び，端部は摘み上げ状に肥厚させ，叩キの幅が太く左上りか水平）に区別する。甕Ｃは尖り底から丸底へ移行し，口唇部は内傾するものも現われ，口縁部は内弯傾向の甕が少量あるとも指摘している。体部全面には不定方向のハケが基調で肩部に横ハケの採用が出現し，刺突文も現われるらしい。

ヘラ削りは瀬戸内地域に先行する技法で，刺突文も上東遺跡のオの町Ⅱ式に先出しており，両者は時期差こそあれ，吉備地方を中心に東西に伝播した技法であろう。

甕Ｃに対して木下氏は，畿内各地で検出されることから時期差として捉える必要性を強調する(註４)。確かに甕Ｃは甕Ｂに対して新しい調整手法が導入され，盛行期が甕Ｂに比べ遅れることから時期差と考えた方が妥当とも受けとられる。

井上和人氏は，田中琢氏の「型の手法」の土器製作技法(註５）を援用し乍ら，庄内(新)から布留終末期の土器製作は「下半部外型作り成形技法」を採用するという興味深い見解を示した(註６)。氏は庄内(古)期の甕は畿内第５様式の系譜を引く「平底作り段階的成形技法」で，庄内(新)期からは「下半部外型作り成形技法」で土器が製作され，その時に指圧痕を残すとする。確かに布留併行期の甕の底部内面を詳細に観察すると指圧痕が残り，その部分はヘラ削りを用いることなく薄い器壁をなす例が多々ある。しかもこの技法はオの町Ⅱ式にも採用されていることから，ヘラ削り・刺突文と同様瀬戸内地方からの波及であると推測している。

では北部九州の実状はどうであろうか。上記の諸見解を援用し乍ら数少ない資料ではあるが検討してみたいが，纒向で甕Ｃとした中には口縁部が内弯するより新しい形態の甕があり，九州の実例では口縁の内弯傾向を持たず，不定方向のハケを施すものを纒向での甕Ｃとして扱う。

(3)　北部九州における甕形土器の抽出とその特徴

北部九州における当該期の資料は僅少乍ら，近年では井上裕弘，柳田康雄，折尾学・常松幹雄の諸氏が編年的位置付けを試みている(註７)。

庄内型甕の出土例をみると，春日市の柏田遺跡，津屋崎町の今川遺跡，前原町の三雲遺跡，那珂川町の今光遺跡，福岡市今宿の高田遺跡，同西区の原深町遺跡，同西新町遺跡，志摩町の御床松原遺跡，甘木市の上々浦遺跡等があり，以下諸遺跡の土器を概観する。

柏田遺跡では庄内型の甕は1号・2号長方形土壙と旧河川から，甕Cは7号住と旧河川から出土している。庄内型の甕は単独時期の一括土器で，口唇部を摘み上げ状に肥厚させ，体部は左上りの叩キ調整がなされ(1個体は右上り)，石野氏によれば庄内型大和甕との指摘がある(註8)。甕Cは布留(古)式の甕と共伴し，口唇部は外側に肥厚させる。横ハケのみられるものである。

今川遺跡の庄内型甕は包含層の中層から出土し，甕Cと布留(古)式と共伴している。庄内甕は口唇部を僅かに摘み上げ，底部は尖り底である。体部外面には右上りの細目の叩キで仕上げ，色調は外面に煤が付着し黒褐色をなすが，煤の剝げた箇所は暗茶褐色の色調を持つ。以上の特徴から報告者の記述どおり河内型甕である。甕Cは頸部下からヘラで削り，外面はハケで調整されるが不定状の横ハケがみられる。灰白色の色調を持つ。他に山陰系の甕で布留(古)式に比定できる搬入品があり，壺は山陰Ⅳ式に併行関係が求められ，布留(古)式よりは先行するとされている(註9)。壺には庄内甕と併行関係のものもある。いずれにしても包含層中層の土器群は庄内式～布留(古)式の時期幅の少ない堆積層である。

三雲遺跡ではサキゾノ1号住居の土器群中に庄内型甕と甕Cの他，山陰系の土器が搬入されている。庄内型甕は実見したが，口唇部は摘み上げ状に肥厚させ，内面のヘラ削りは頸部より一段下部から削っており，底部は小さな平底を残している。体部は左上りの叩キで，暗灰褐色に近い。叩キは今川出土の甕のそれとは明らかな相違を示し，太目でしかも左上り，色調も灰色系統をなすことから庄内大和甕といえる。甕Cは口唇部を摘み上げ，球形の胴部に丸底をなす。体部外面は不定方向のハケ調整が施される。頸部下2cmからヘラで削る。底部内面には指圧痕が残り，井上(和)氏の指摘する「型作り技法」の痕跡か。他に内弯傾向の甕も共伴し，住居から出土した土器の時期に若干の幅があり布留(古)式が搬入された時期とされよう。

今光遺跡の庄内型甕は大溝（旧河川）からの出土で共伴土器に時期差がある。口唇部を僅かに摘み上げ，底部は小さな平底を残す。体部外面は左上りの細目の叩キ調整で，叩キの幅は三雲例より今川例に近い。灰褐色の色調を持つ。叩キの方向は左上りであるが細目であり疑問を残すが，折衷型とも受けとられる。他に口縁部に装飾を施した複合口縁壺がある。7号住居からは右上りの細目叩キを持つ甕があるが，器壁は厚く内面上半に横ハケ調整を残し，調整・技法上に問題がある。

今宿高田遺跡では26号住居から胴部の破片が出土している。外面は三雲に近い太筋の叩キで調整され，左上りか水平である。色調は淡い褐色でやや灰色っぽく大和型甕に近い要素を持つ。この甕にはハケを多用する甕Cは伴っていない。

原深町遺跡では大溝Ⅵ区から破片が出土している。土器説明がないため詳細な点は明らかでないが，図示された範囲内では口縁の特徴，左上りの叩キ等から柏田出土例に酷似している。他にⅤ区から甕C，山陰系の刺突文を有す壺，布留(古)式の甕等が出土しているが，出土土器に時期幅があり一括資料とはなり得ない。

西新町遺跡では多量の古式土師器を出土しており，良好な一括資料が多い。庄内系統の甕はD地区8号住居とF地区1号住居から出土している。前者は多くの共伴土器があるが，庄内系甕は1点のみで直線的に外反する口縁と口唇部の摘み上げ，細い叩キ等の特徴は一応の技法を保持し乍らも，内面はハケとヘラ削りを併用し今光7号住居出土例に似る。叩キは図面で観る限り水平であり，大和型甕に近い。共伴する壺・鉢は併行関係に位置付けられる。甕Cは3点ある。口縁は直線的で口唇部を内外に肥厚させ，体部のハケはやや乱れるが横ハケがみられ，肩に一条の沈線を廻らす。この内の1個体には一部に左上りの叩キを残している。他の甕は口縁が内弯し，肩部に3～4条の沈線を廻らすもの，明瞭な横ハケを施し，定形化した器台の出現等から布留(古)式併行期の器種も新たに搬入された過渡的様相を看取できる。F地区1号住居出土の庄内型甕は形状が前者の甕と酷似し，内面は頸部下よりヘラ削り，頸部は鋭い稜をなし，外面は左上りの叩キで下部はハケでナデ消す。大和型甕か。共伴の甕は内弯する口縁の布留(古)式併行の土器である。

御床松原遺跡では38号住居の一括土器群の中に庄内型甕が1点ある。口縁部は直線的にのび口唇部は摘み上げ状に肥厚させ，内面は頸部の一段下からヘラで削る。体部外面は左上りの太目の叩キで底部は尖り底である。淡い灰褐色をなし，大和型甕である。共伴する甕の口縁は僅かに内弯し，肩には刺突文を配し，布留式に特徴的な横ハケ調整でヘラ削りは庄内型甕と同様である。

上々浦遺跡では溝8上層から1点出土している。共伴する甕は甕C1点と布留(古)式に相当する。庄内型の甕の口唇部は摘み上げ，口縁部は直線的で体部には右上りの叩キ成形が残る。頸部はヘラ削りにより鋭い稜をなす。甕Cは(169)がある。口縁は直線的で外面に不定方向のハケで調整する。他に甕Cに準ずる土器は溝9にあり，肩部に横ハケと沈線が出現している。ヘラ削りは頸部直下と僅かに下段からとがある。共伴する土器に庄内併行期の壺と口縁の内弯する布留(古)式の甕がある。

(4) 外来系甕形土器の評価

纒向の2式では細かい叩キ成形の土器に併行して甕Cが出現し，纒向3式で盛行するとされたが，庄内型甕と甕Cの盛行期に時期差があることから，木下氏の指摘するように甕Cの調整手法は叩キを消す技法と見做され，明らかに新しい手法で甕Bとされる庄内型甕と甕Cは時期差から生じた差として認識できる。

北部九州における調整手法の先後関係では，細かい叩キ（左・右上り）→不定方向の細いハケ（叩キを消す新手法）と肩部に1条の沈線の出現→外面頸部下の縦ハケのハデ消しと定

形化した横ハケ及び肩部の1～4条の直線並びに波状沈線の定着等の過程を経て，成形技法では頸部直下からのヘラ削り→頸部直下と一段下部のヘラ削り混在→一段下部からの削りと移行し，器壁を薄くする目的での指圧痕は北部九州の例でみると，畿内よりやや遅れて甕Cの段階に導入されたと考えられる。同時期の在地系の甕にもその痕跡を留めた例があるが，本来の目的である器壁を薄く仕上げるまでには至っておらず，技法的に拙劣なのか成作技法の違いなのか今の段階では明らかでない。

共伴関係でみると柏田遺跡では庄内型大和甕(?)が単時期で出土し旧河川から同型甕と甕Cとが共存し，今川・三雲・西新町の諸遺跡では庄内型(河内・大和型)甕・甕C・布留(古)式，御床松原・上々浦遺跡(溝8)では庄内型甕・布留(古)式，上々浦溝9は甕C・布留(古)式，塚堂遺跡ではA地区14号住居から甕Cを主体とする土器群が，B地区大溝支流1から甕C・布留(古)式，C地区1号住居から甕C・布留(古)式，E地区6号住居から甕C・布留(古)式が各々伴出する。

纒向遺跡では庄内型甕と甕Cとが共存するが，盛行期に新旧のずれがあり，甕Cとされる中には布留的な傾向の強い土器の混入もあるとの指的がなされ(註10)，大溝出土で層位的な混入も考えられなくないが，甕C自体の時期幅を狭く考え，纒向3式にはすでに新しい手法・技法を有する布留式土器の出現がみられたのではなかろうか。

北部九州の共存関係での出土例をみると玄界灘に近い海浜部で甕Cは庄内型甕と布留(古)式甕と共伴し，内陸部では甕Cと布留(古)式が共存する例が多く，総体的に布留(古)式との共存が強いといえる。E地区の6号住居の土器群では庄内的傾向の強い壺・鉢・高杯が多く，23を除く甕では定形化した横ハケと縦ハケを多用し，形態的にも甕C(23)よりは後出する特徴を示していることからも若干の時期差を認めなくてはならない(註11)。器種構成の中で壺・鉢・高杯等は日常頻繁に使用され消耗される器種ではなく，甕形土器にその器種をみ，新しい技法・調整手法は甕に現われると考えるので，他の器種は新しい要素を持つ甕に共存関係を求めることが考慮される。海浜部及び内陸部の共伴関係にも上記の現象が現れることからも甕Cの定着時期の幅が狭いことが判るのである。塚堂E地区6号住居の出土土器群はこの過渡期的様相を如実に物語る資料であろう。

当該住居跡に時期的に近似する資料として甘木市の大願寺方形周溝墓があるが，甕Cに併行関係にある土器は外来系の複合口縁壺のみで，甕はE地区6号住居の布留(古)式と変化は少なく，広口壺は6号住居の同系譜の壺よりも新しい要素を持ち布留(古)式の範疇のものと考えた方が妥当であろう。

北部九州出土の庄内型甕には井上(和)氏の指摘する指圧痕が現われておらず，底部の小さな平底の甕と尖り底・丸底の甕とは製作技法が異ることから庄内式でも古相の部類に入れられるが，今川・三雲・柏田の庄内型甕よりも先出する甕が那珂川町の松の木遺跡138～140街区8

号住居(註12)と150街区22号・27号・35号・38号(註13)から出土し，纒向1式とされる畿内第5様式系統の叩キを持ち，外面下半をハケで仕上げ，内面はヘラ削りとハケが混在し、小さな平底をなす一括土器群があり，沢田康夫氏から教示を受けたが在地系の土器と共伴するが庄内型甕は共存しておらず，150街区の住居からも出土していない。

北部九州において最古式の土師器を設定する場合，松の木の出土例をそれに当て，三雲・柏田・今川の庄内型甕に共伴する土器群を前者に後出する資料とし，三雲・西新町・今川・塚堂遺跡の甕Cを庄内式(新)相とすることができ、塚堂E6号住の定形化した横ハケの出現を持って布留(古)式に比定できると考える。

また，北部九州に搬入された庄内型甕は大和型甕が比較的に多く，大分県安国寺出土の甕も大和型とされており(註14)、片寄った一地域の甕の搬入に何等かの意義を持たせる必要があるが，時間的余裕がないため省略する。

参考文献

1. 井上裕弘・小池史哲編「山陽新幹線関係埋蔵文化調査報告」(第4集下巻) －1977－福岡県教育委員会
2. 酒井仁夫・伊崎俊秋編「今川遺跡」(津屋崎町文化財調査報告書第4集) －1981－津屋崎町教育員会
3. 柳田康雄・小池史哲編「三雲遺跡Ⅲ」(福岡県文化財調査報告書第63集) －1982－福岡県教育委員会
4. 佐々木隆彦編「今光・地余遺跡」－1980－東急不動産株式会社
5. 佐々木隆彦編「今宿高田遺跡」(今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第10集) －1984－福岡県教育委員会
6. 飛高憲雄・力武卓治編「原深町遺跡」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集) －1981－福岡市教育委員会
7. 折尾　学・常松幹雄ほか「西新町遺跡」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集) －1982－福岡市教育委員会
8. 井上裕弘編「御床松原遺跡」(志摩町文化財調査報告書第3集) －1983－志摩町教育委員会
9. 佐々木隆彦編「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」(1)－1982－福岡県教育委員会
10. 柳瀬昭彦編「川入・上東」(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16) －1977－岡山県文化財保護協会

註

註1　田中琢「布留式以前」(考古学研究第12巻第2号) －1964－

註2　安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(考古学雑誌第60巻第2号) －昭和49年－

註3　石野博信・関川尚功「纒向」(橿原考古学研究所編) －1976－

註4　木下正史「書評－奈良県『纒向』」(考古学雑誌第64巻第1号) －1987－

註5　田中琢「畿内と東国－古代土器生産の観点から－」(日本史研究90号) －1967－

註6　井上和人「『布留式』土器の再検討」(文化財論叢) 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集－1983－　(井上氏の云う「下半部外型作り成形技法」の視点から御床松原出土の庄内型甕を実見したが底部付近まで，粘土帯の接合部と思われる割れが認められたことを付言しておく。)

註7　井上裕弘「弥生終末－古墳前期の土器群について」(山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告7下巻) －1978－福岡県教育委員会

柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡－『伊都』の土器からみた北部九州－」(森貞次郎博士古稀

記念古文化論集）－1982－

折尾学・常松幹雄「北部九州における西新町遺跡の位置－土器の形式分類と編年を中心として－」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集）－1982－福岡市教育委員会

註８　石野博信「奈良県纒向石塚古墳と纒向式土器の評価－木下正史氏の批判に答える」（考古学雑誌第64第４号）－1979－

調査を担当された井上裕弘氏から柏田遺跡出土の庄内型甕は，河内型でも大和型甕でもなく，他地域からの搬入品との指摘を受けた。

註９　藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」（考古学雑誌第64巻第４号）－1979－

註10　前掲註４

註11　６号住居跡出土の25の甕は形態的に甕Ｃに近い。

註12　那珂川町の沢田康夫氏から教示を受けた。

註13　1984年に報告書刊行予定

註14　前掲註３

乙益重隆「安国寺遺跡出土の土器」（土師式土器集成本編１）－1971－

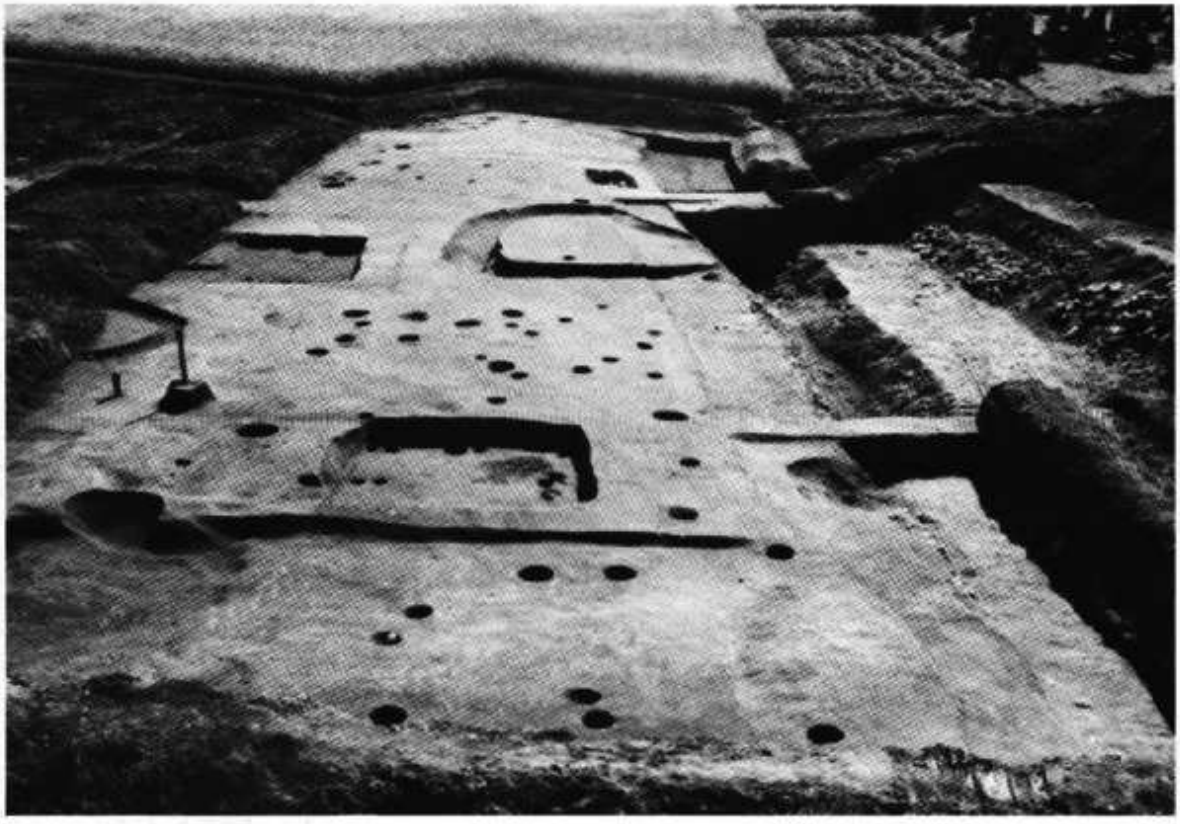
图　版

塚堂E地区空中写真(東から)

(1)　E地区東側全景(東から)

(2)　E地区東側全景(南東から)

(1)　E地区西側全景(東から)



(2)　E地区西側全景(北から)

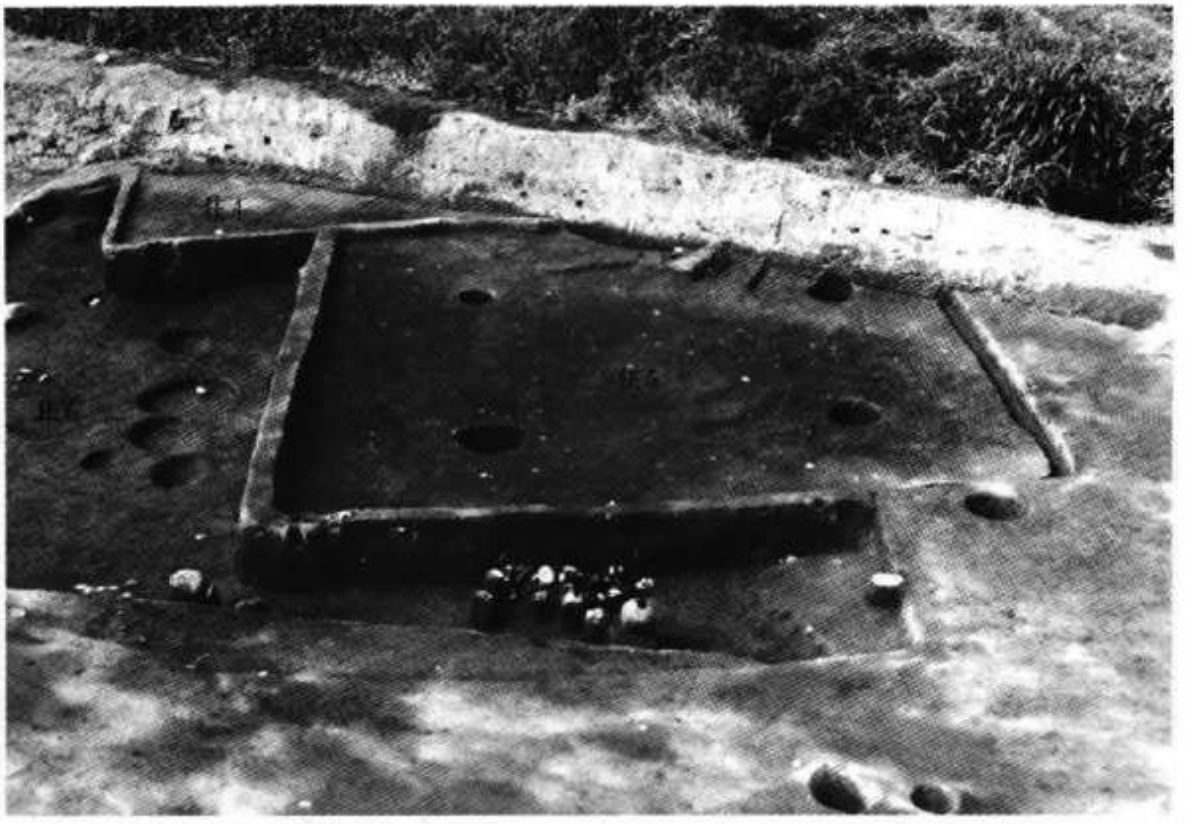
(1)　1号竪穴住居跡(南から)

(2)　1号竪穴住居跡竈出土状態

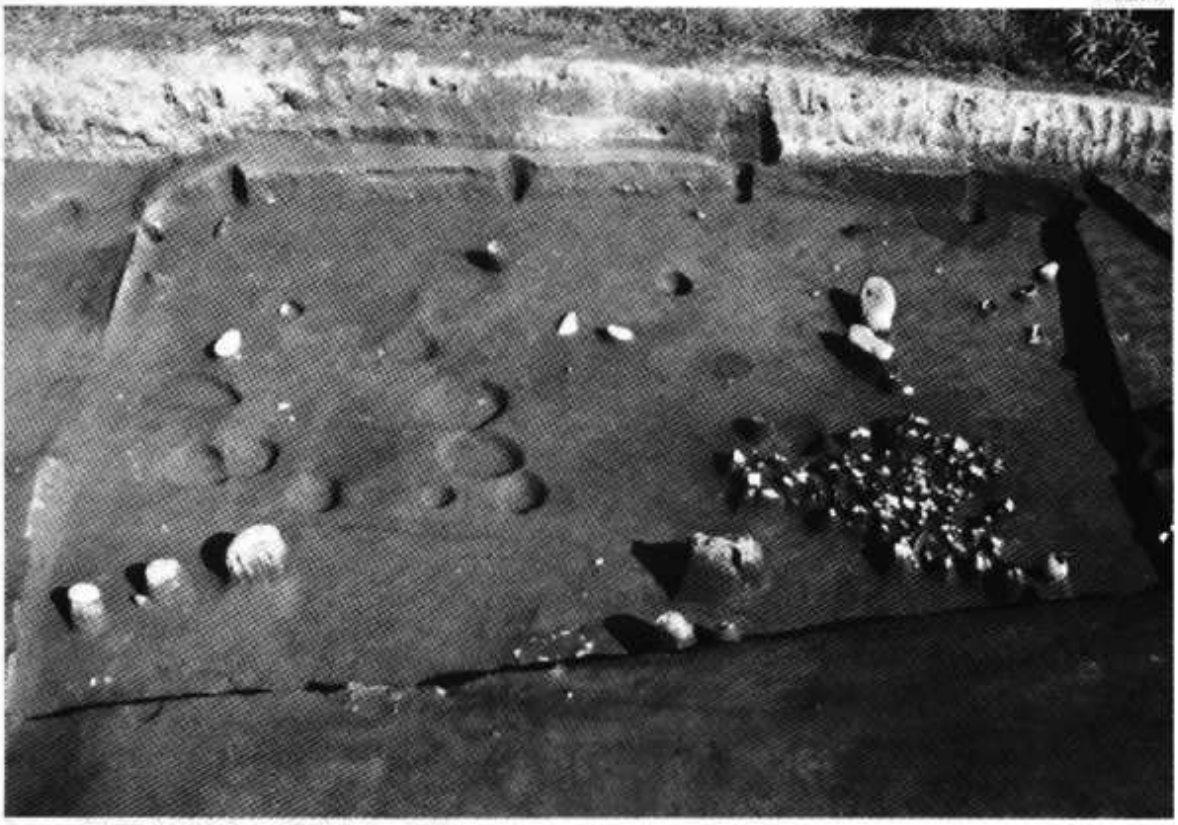
(1)　2号竪穴住居跡(西から)

(2)　2号竪穴住居跡竈出土状態

(1)　3号竪穴住居跡と2号周溝状構(西から)

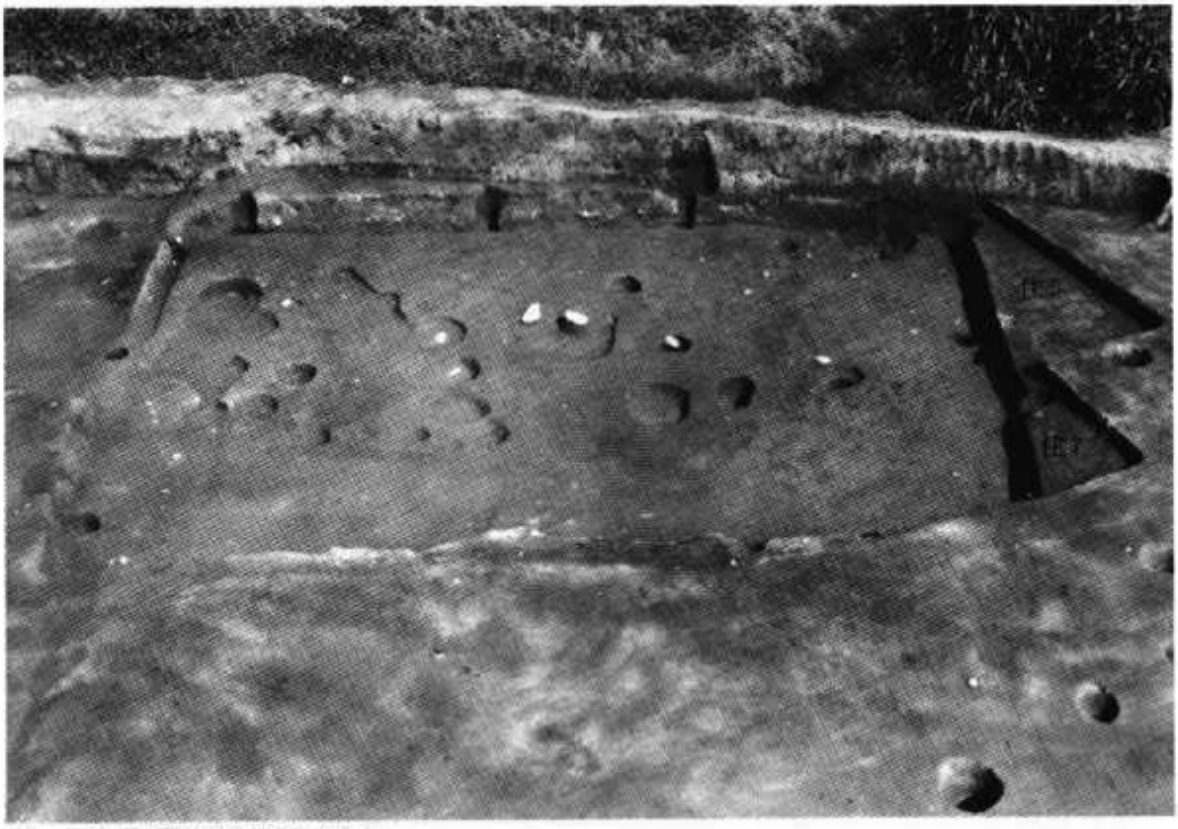


(2)　4号、5号、6号竪穴住居跡(南から)

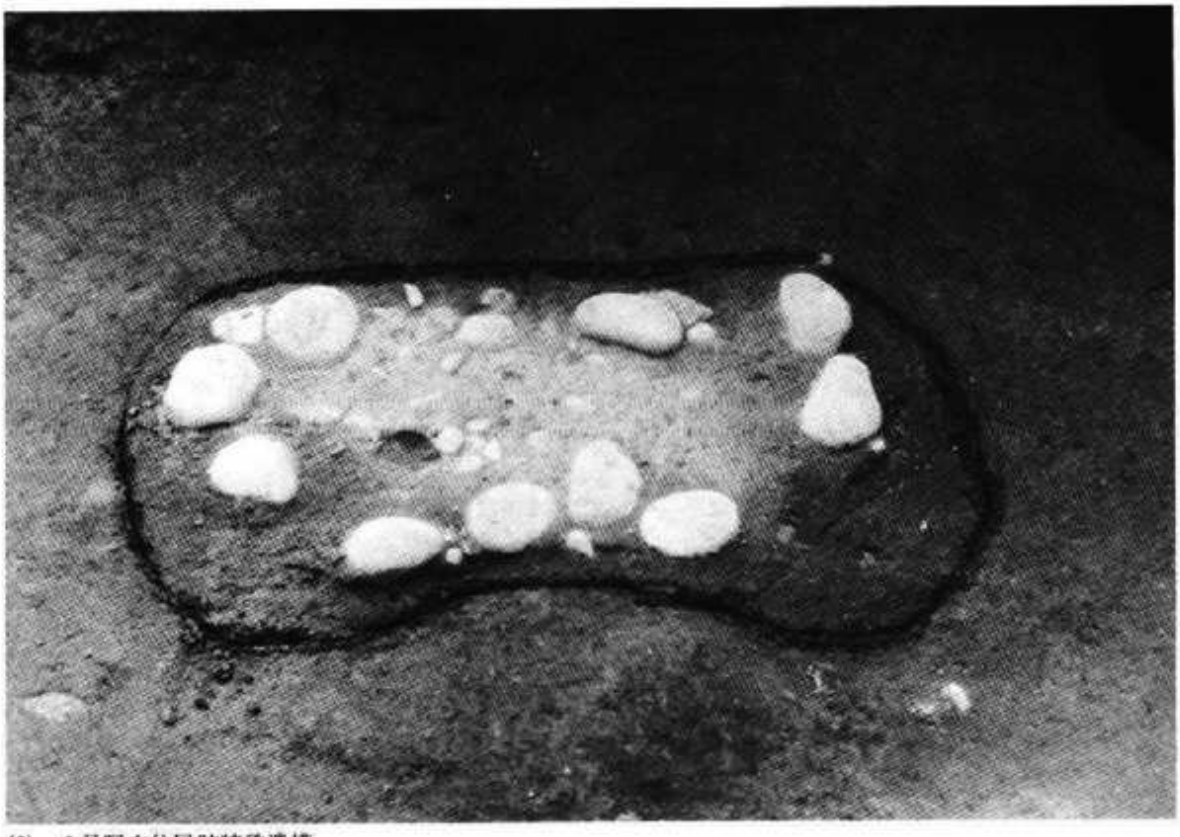


(1)　6号竪穴住居跡出土遺物除去前の状態

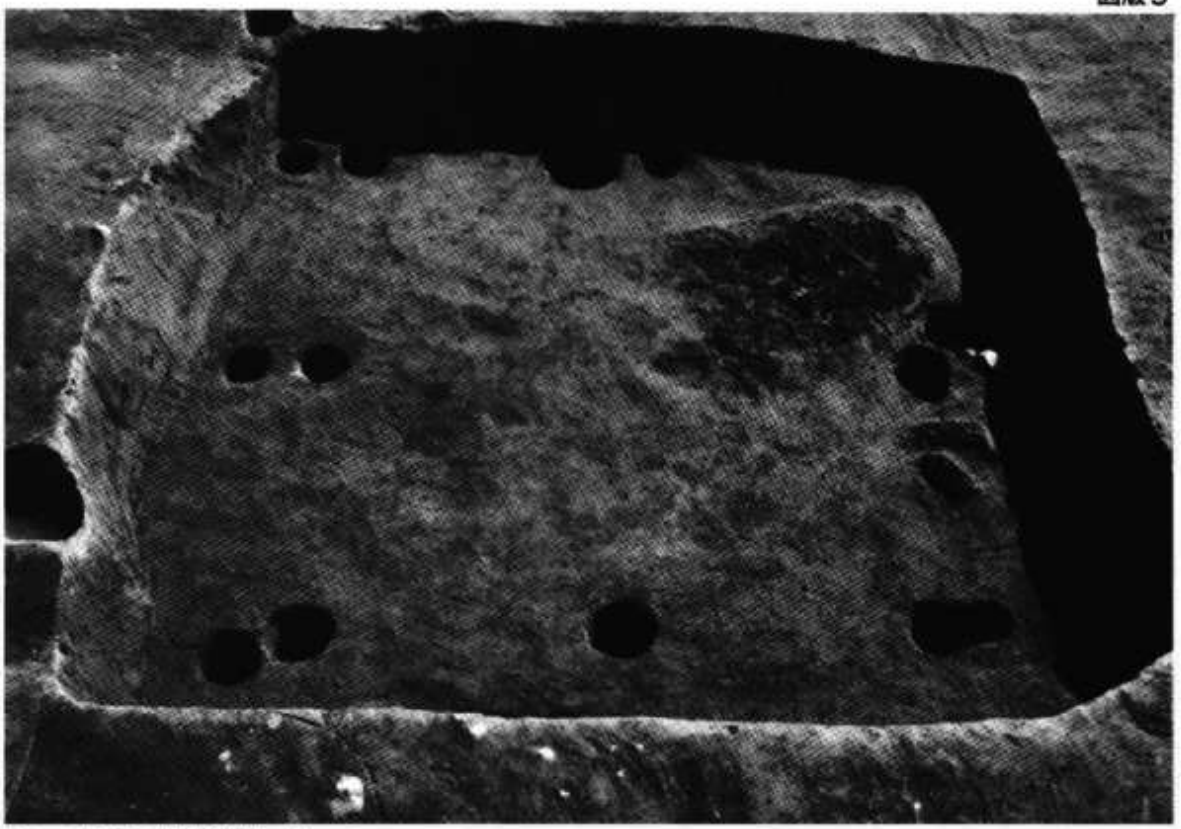
(2)　6号竪穴住居跡遺物出土状態



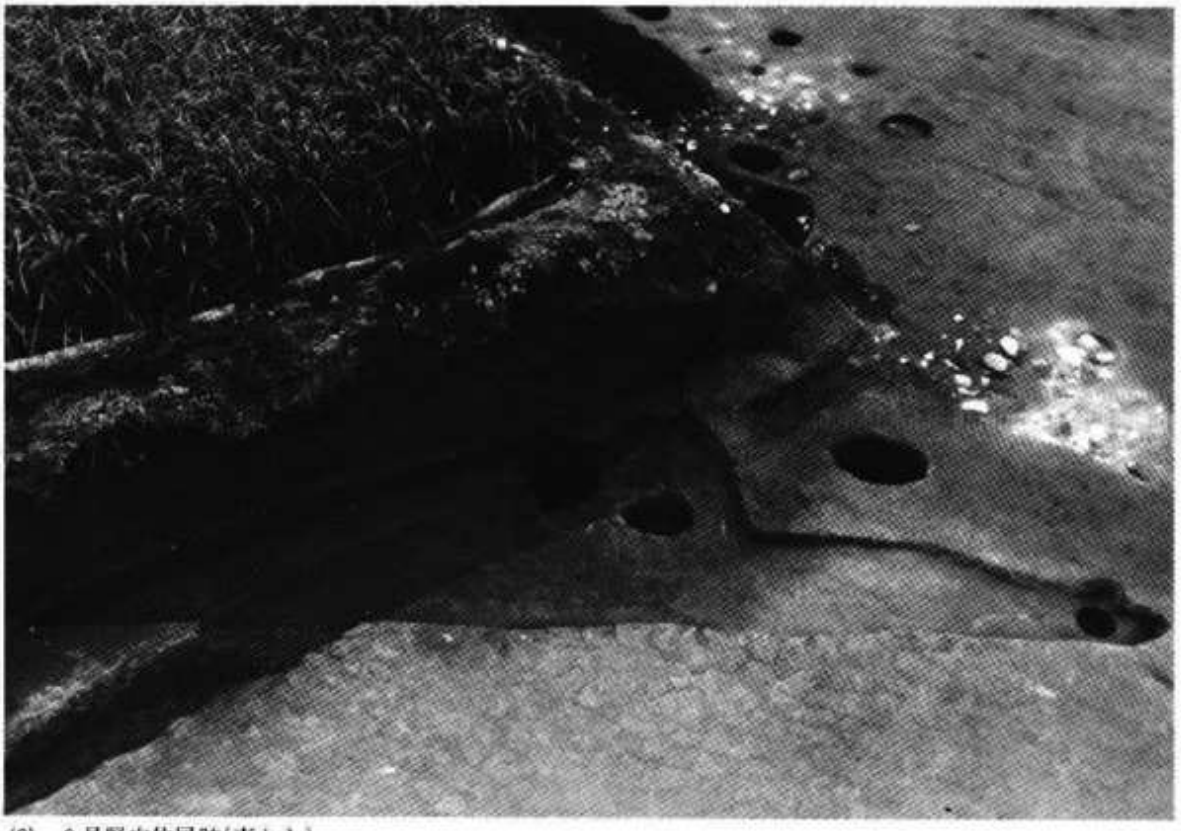
(1)　6号、7号竪穴住居跡(南から)



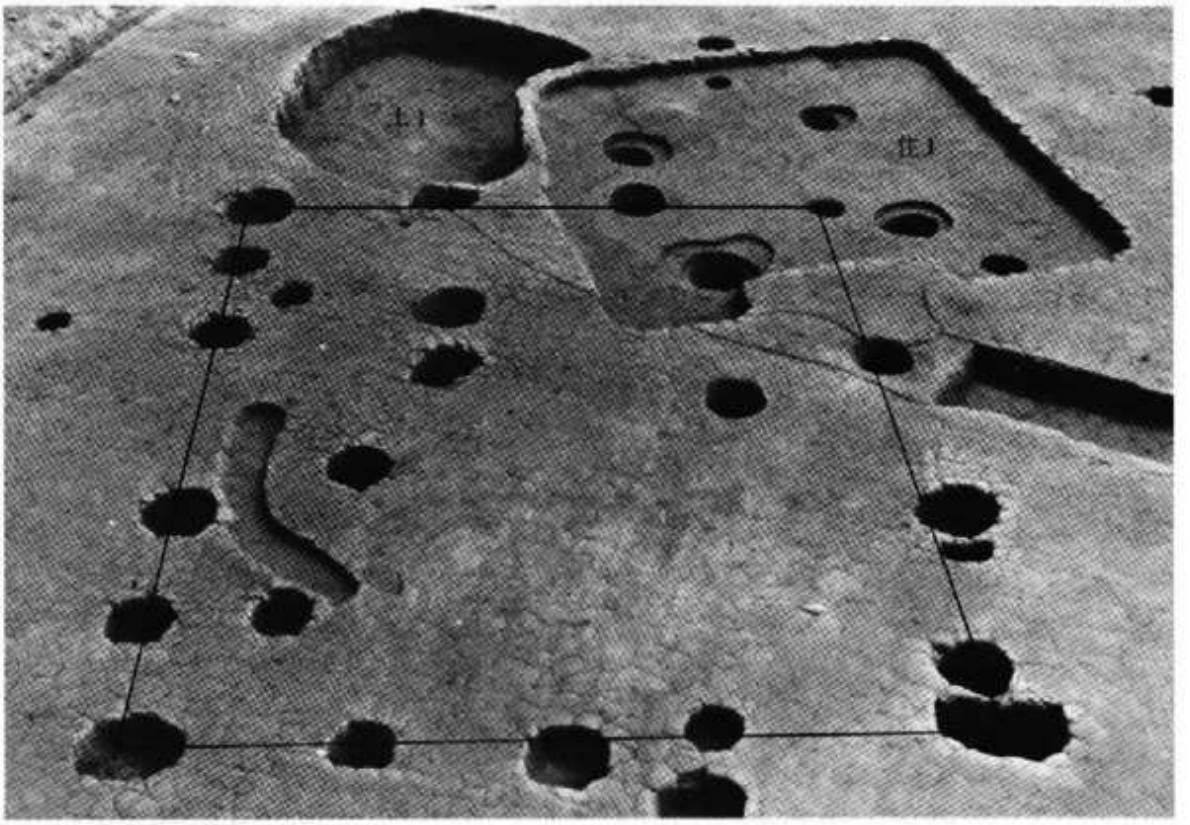
(2)　6号竪穴住居跡特殊遺構



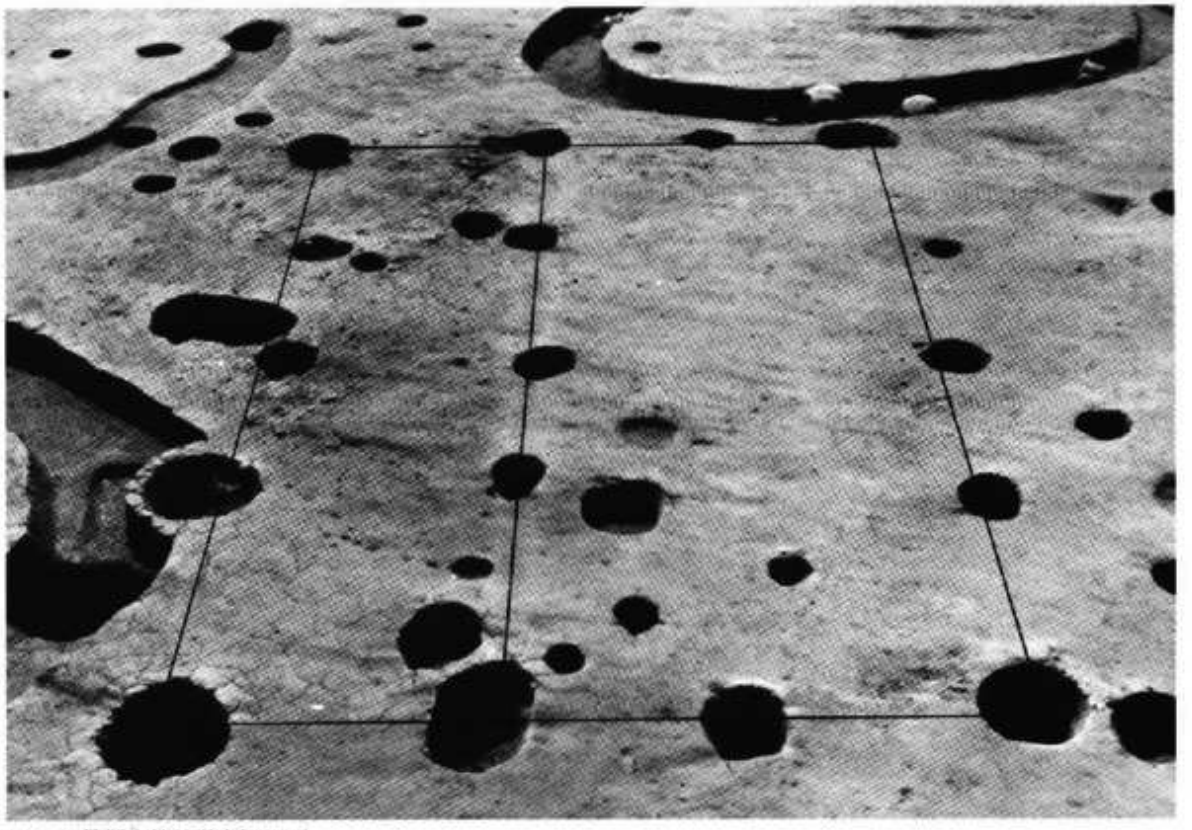
(1)　8号竪穴住居跡(北から)



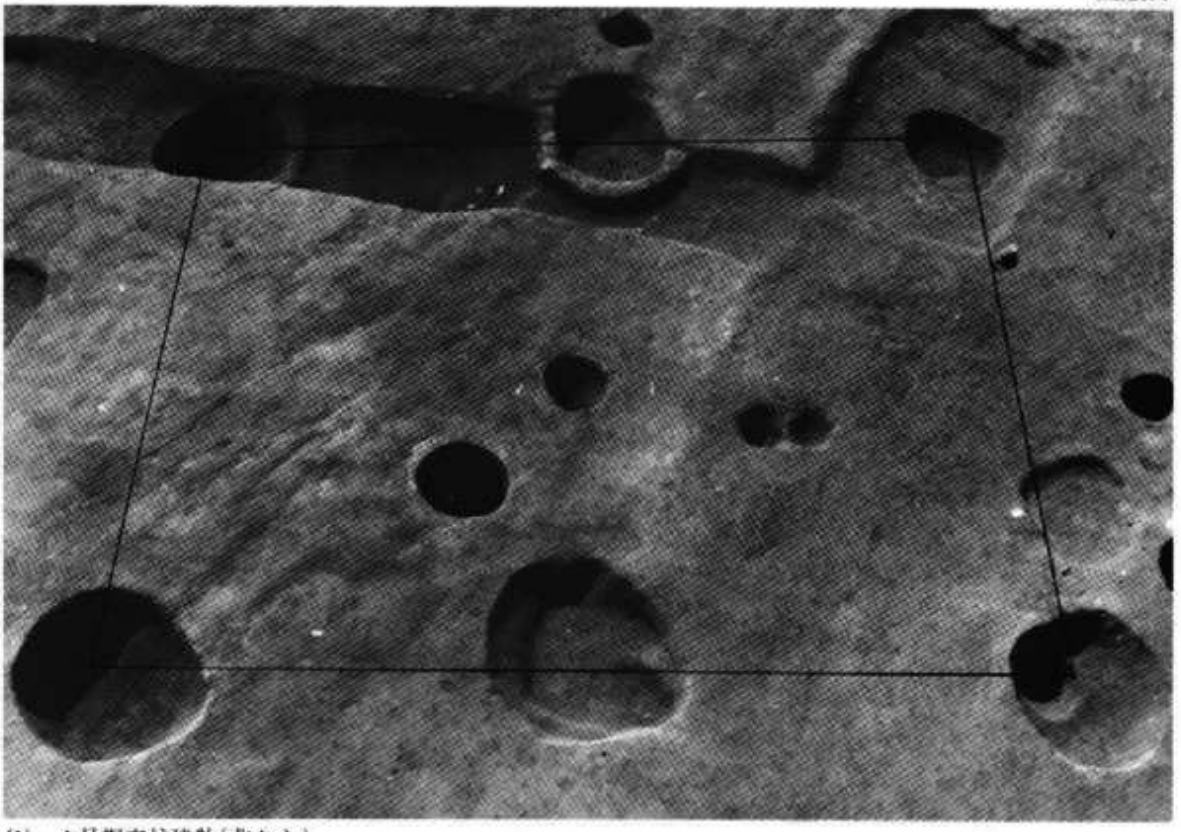
(2)　9号竪穴住居跡(東から)



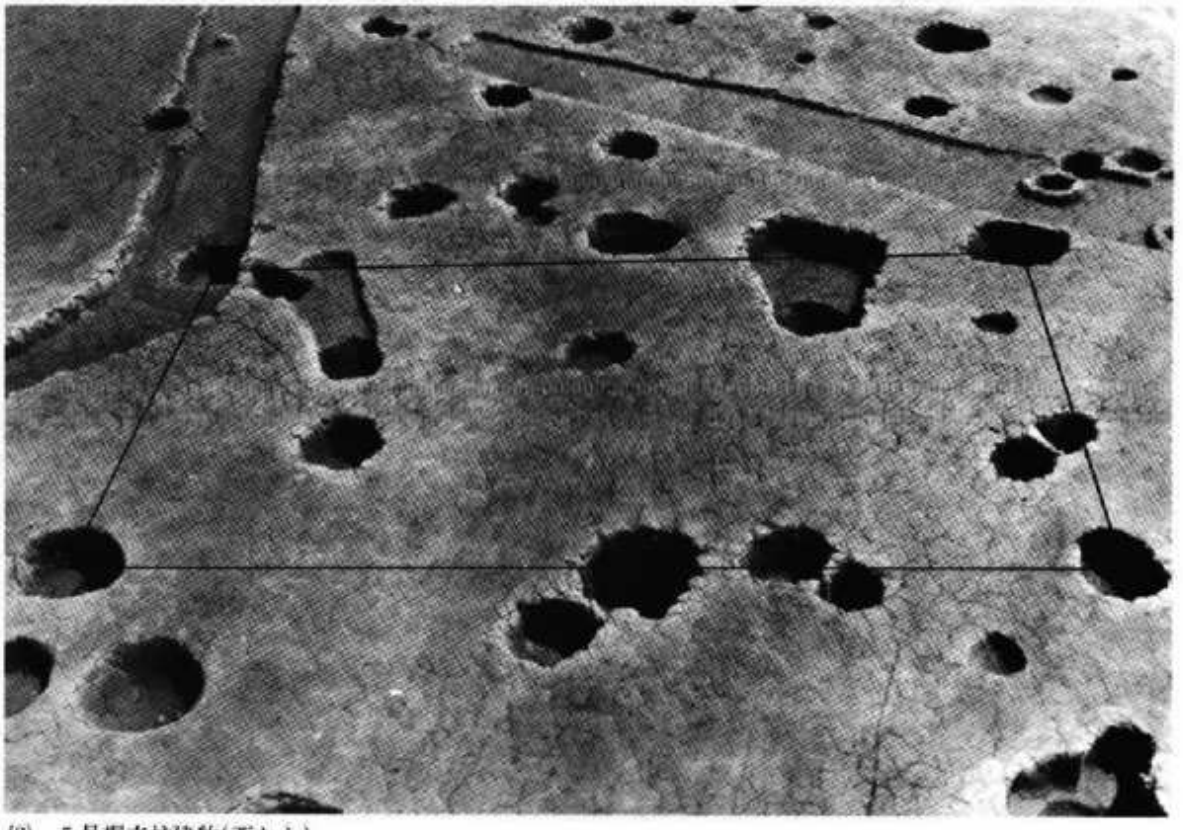
(1)　2号掘立柱建物(北から)



(2)　3号掘立柱建物(東から)

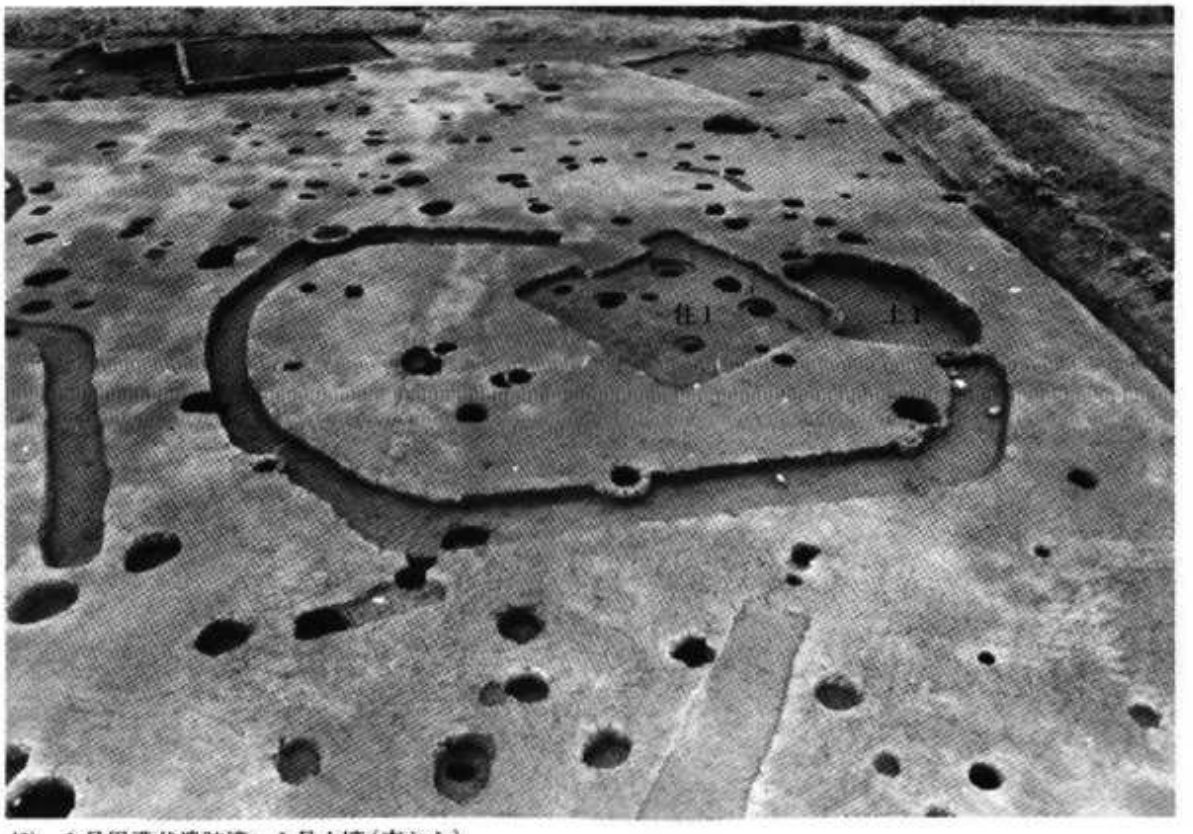


(1)　4号掘立柱建物(北から)



(2)　5号掘立柱建物(西から)

(1)　6号掘立柱建物(東から)

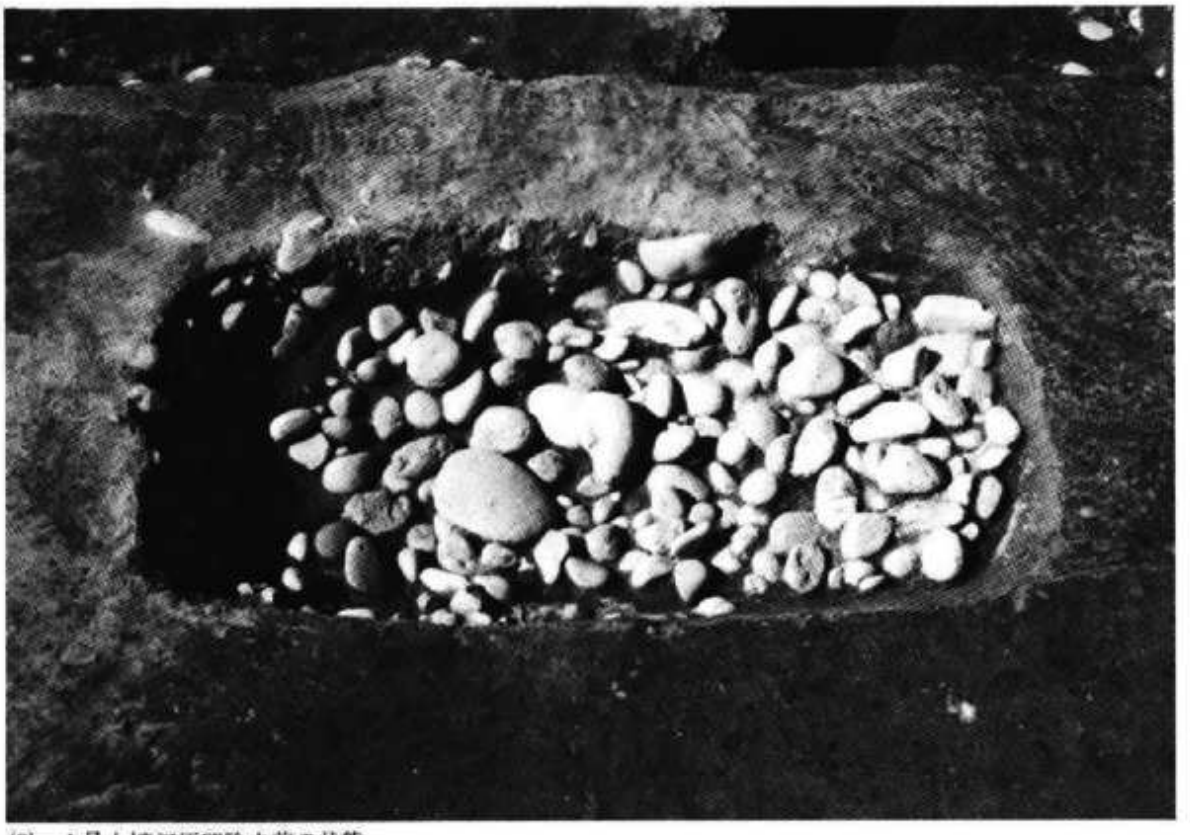


(2)　1号周溝状遺跡構・1号土壙(南から)

(1)　2号周溝状遺構(西から)

(2)　3号周溝状遺構(南から)

(1)　4号周溝状遺構(北から)



(2)　4号土壙河原礫除去前の状態

(1)　4号土壙(東から)

(2)　1号、2号、3号溝状遺構(北西から)

(1) 大溝1、2(南から)

(2) 大溝1、2土層断面

7

8

9

11

12

13

20

21

6号竪穴住居跡出土遺物

22

23

24

25

26

27

28

6 号竪穴住居跡出土遺物

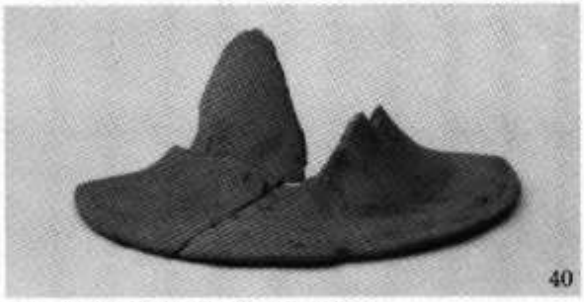
29

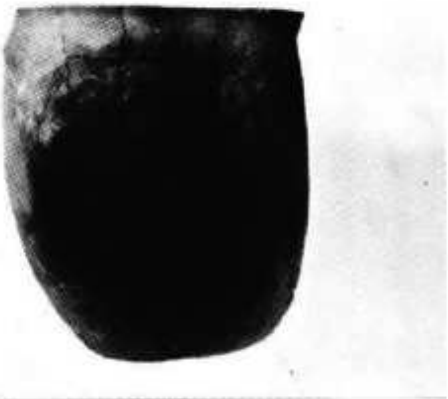
34

35

37

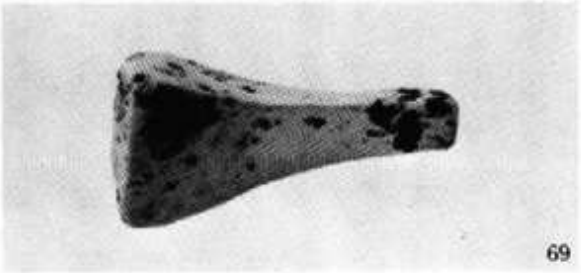
38

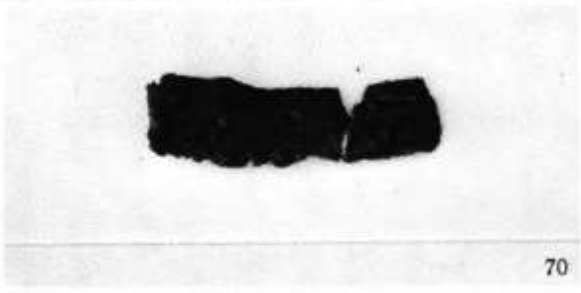

40



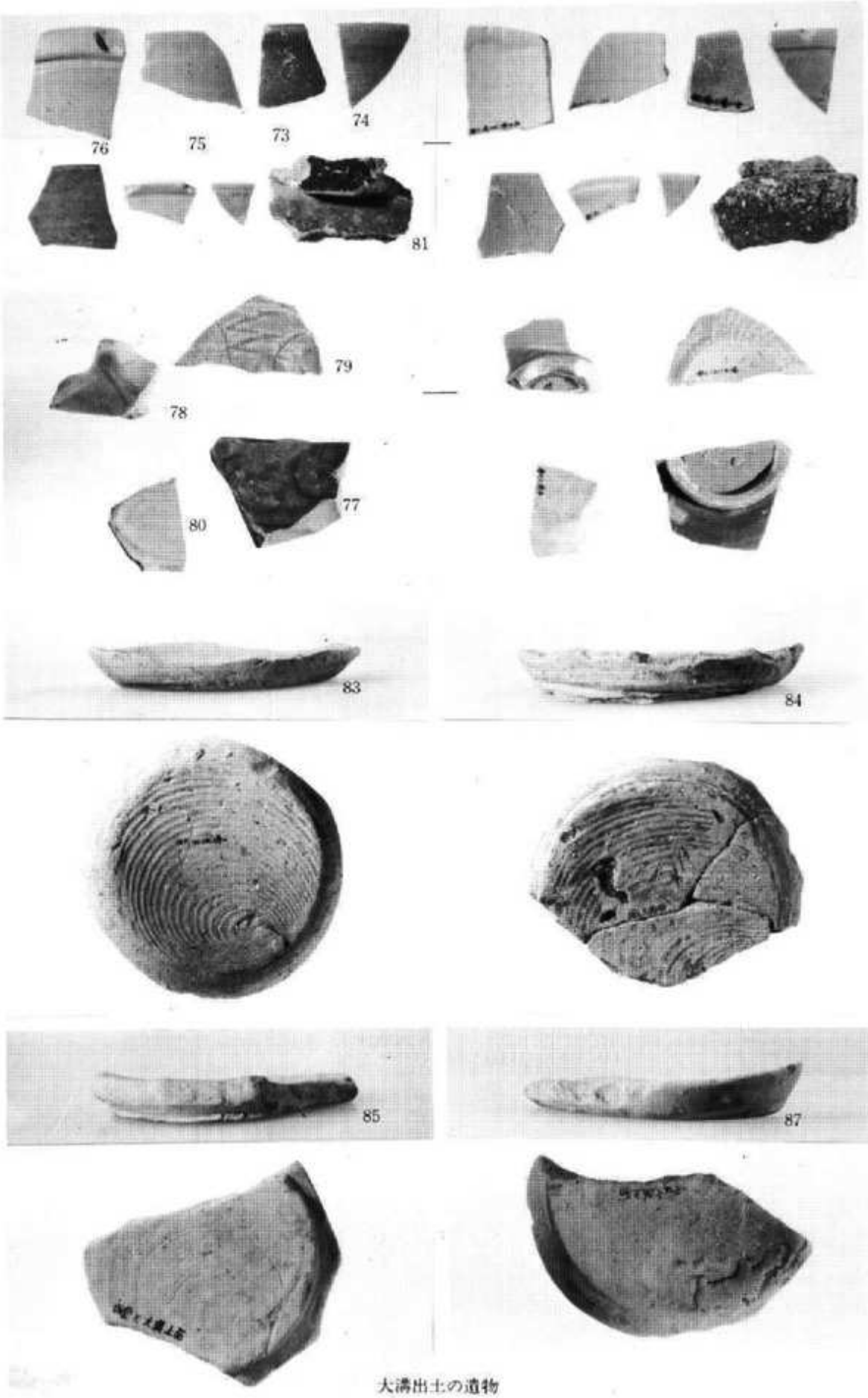
42

66


69


70

3号、6号竪穴住居跡、溝3出土遺物



大溝出土の遺物

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第3集

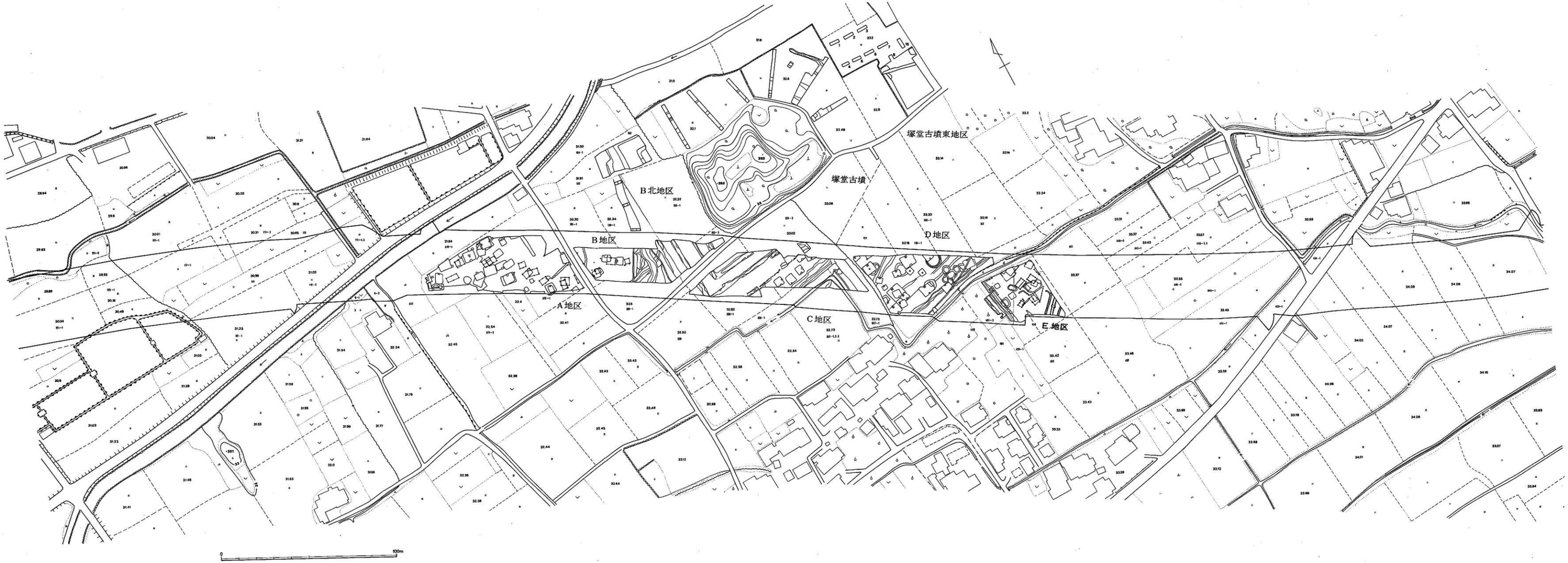
塚堂（つかんどう）遺跡 Ⅲ

E地区

1984年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　株式会社　十　全
福岡市仲畑3丁目21番地



付 図　一般国道210号線浮羽バイパス路線図と各調査地区の位置 (1/1,000)